
殺人鬼の日常

小石 汐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殺人鬼の日常

【Nコード】

N29450

【作者名】

小石 汐

【あらすじ】

殺人鬼と呼ばれた男、南雲 冬夜は銃で撃たれ、一度は死んだ——はずだった。致命傷だったはずだ、と冬夜は考え、走馬灯の中にいるのだ、と結論を出すも、違和感が拭えなかった。そして違和感は、やがて現実となり、歴史は大きく変わってゆく。

そこで冬夜はようやく理解する——この世界も本物だ、と。

*2011/12/2

ひょうりばーす↓代理者の慟哭、と来て、二回目の改稿中です。

真に勝手に申し訳ございませんが、引き続きお付き合いいただければ幸いです。

殺人鬼の最後

立ち並ぶビルの合間、細い路地を照らすのは、大通りから差し込む僅かな光だけだった。そのせいか、奥に進めば進むほど、薄暗くなつてゆく。少し先を見通せないほどではないが、路地の奥へと続く闇は恐れを抱くには充分なほどに濃かった。またカビ臭さと、何かの腐つたような臭いが混ざり、鼻をついた。よく見ると、路地には破けたビニール袋が散乱していた。これが臭いの原因だろう。

恐らく、誰もが踏み込むことを躊躇するだろう。しかし、そんな所に一人の男が現れた。動きは鈍く、ビルの壁に手をつきながらも男は進む。時折、水が滴るような音が細い路地に響くも、大通りから流れ込む喧騒に吞まれていった。

男の名は南雲なぐも 冬夜ふゆやと言い、全国指名手配犯の中でも、ダントツの知名度を誇る。無差別に殺してきた人の数は一体どれほどになったのか——もはや本人ですら把握できていない。血の臭いが全身に染み付くほど、屍の山を築いてきた。そのためか、路地に入った当初、充満する悪臭に顔をしかめた。自分の臭いと違うため、余計に鼻についたのだ。しかし、それにもすぐ慣れる。どちらにせよ、後戻りはできない。今、大通りに出たら、どうなるかは簡単に想像がつく。

捕まって、退屈な時を過ごして、最終的に死刑にされるぐらいなら、自らで命を絶つたほうがマシだろうか——冬夜は苦い笑みを漏らしながら、腰に差しているナイフに思いを馳せた。日本の裁判制度は長すぎる。もっとスケジュールを詰めて、さっと執行してほしいものだ、と誰もいない路地に呟いた。

冬夜は一度、後ろを振り返る。幾度か角を曲がったので、大通りからの光も届かない。そんな中、目を凝らす。闇に慣れつつあった目に人影は映らなかった。とりあえず、追っ手はいないようだ。しかし、どこからともなく聞こえてくる怒声に、身を強張らせた。ま

だ近い、と冬夜は更に奥へと足を進める。しかし、そこで気づく。自らの足元に滴る確かな痕跡に。

見つかるのも時間の問題だろう。冬夜は半分諦めながら、壁にもたれかかった。しかし、膝に力が入らず、ずるずると壁に背を擦りながら崩れ落ちる。そして残してきた痕跡に目をやった。自分の腹部から流れ落ちた血液を指でなぞり、苦笑を漏らした。

腹部には二つの穴があった。銃で撃たれたのだ。当初は焼けるような痛みが続いていたが、それも鈍くなり、痛む範囲が広くなったように感じる。止血しようと手で押さえて来たものの、一向に止まる気配は無い。冬夜は諦めて、傷口から手を離した。

刹那、薄暗い路地に小さな光が躍る。来たか、と冬夜は身構えるも、もはや身体が言うことを聞かなかった。血を失いすぎたのだ。恐らく追っ手が持つ懐中電灯か何かの光だろう。でなければ何度も角を曲がっているのに、こんなところまで光が届くはずが無いのだ。詰みか、と小さく零して、冬夜は壁に身を預け、目を瞑った。

そのまま眠りにつけそうな心地に陥る。もう、そのまま目が覚めなければいいのに、と冬夜は思った。むしろ、こんなことになるなら、最初から無駄な抵抗などしなければ良かった。腹部に二発、銃弾を受けてしまった時点で諦めれば良かった。無駄な努力だった、と冬夜は締めくくる。

いつしか臭いや音が消えていた。元々、薄暗い路地であつたが、更に暗くなつてゆく。そして意識がまどろんでいった。こんな心地で死ねるだけマシなのかもしれない、と冬夜は僅かに安堵の息を漏らした。

ふと目が痛んだ。暗くなりつつあつた視界に、光が戻る。しかし、輪郭ははっきりとしない。冬夜の目を刺激するただけに、鋭い光が向けられたかのようにあつた。その刺激に应じるかのように、聴覚も少しだけ戻る。面倒くさいと思いつつも、血に濡れた手をかざし、光を遮る。何かが聞こえた。ただ反応を示す余裕など無かつた。かざした手すら、再び真っ赤な海に落ちて、血が跳ねた。

刹那、腹部に衝撃が走る。息が詰まり、冬夜は必死に酸素を求めた。これから死ぬと言うのに、酸素を求めるといふ行為が何とも矛盾しているように感じた。しかし、苦しみたくはない、と自身を納得させた。

「おい、生きてるか」

今度は声を聞き取れた。透き通るような声をはつきりと。その声の方に目をやると、紺の制服に身を包んだ女性が立っていた。見下すような冷たい眼差しが冬夜に注がれる。まあそれぐらいのことをやってきたしな、と冬夜は苦笑を漏らした。

「笑うな、ゲス」

女はコンパクトなモーションで再び蹴りを放つ。防ぐ間も無かった。固い爪先が冬夜のみぞおちを的確に捉え、再び息が詰まり、吐き氣と息苦しさに苛まれる。

それにしても撃つたところを蹴るか、と冬夜は苦い笑みを漏らした。それも仕方が無いことだ、と認識した上で。あれだけ人を殺してきたのだから、殺されそうになった際に文句を漏らすつもりなど無かった。むしろ、さっさと殺せ、と冬夜は呟いた。

「そう簡単に死なせると思う？」

女の言葉に冬夜は絶望する。これから死ぬまでに、どれほど退屈な時間を過ごさなければならぬのだろうか、と考えると、ぞつとした。

「……の割には矛盾した行動だな、撃つたところをわざわざ蹴るなんて」

サディストか、と冬夜が尋ねると、再び蹴られた。この女、容赦ない。

「お前には裁きを受けてもらう」

「法廷で？」

そうだ、と女は答えた。それに「冗談じゃない」と冬夜は返す。「もう自分でも分からないほど人を殺してきたんだ。死刑以外に無いだろう。どっちにしても死ぬんだったら、ここで死んでも同じだ

る？」

むしろ、冬夜が捕まった、なんてニュースが流れたら、遺族がすぐに殺せ、と泣き叫び、怒り狂うのではないだろうか。それなら犯人死亡で、さつさと事を済ませたほうが良いような気もした。人の死は物事を沈静化させる際、絶大な効果を発揮するからだ。

そんなことを考えながら、冬夜は顔を上げた。影になって女の表情は読めなかった。ただ、僅かな光を反射する両眼に、冷たいものを感じた。

「死刑とは限らない」

「無期懲でも結果は一緒だぜ？」

暇で憤死する、と冬夜は笑いながら告げる。そして予想通り、冬夜は再び腹部を蹴られた。

「贖罪を暇と言うか」

「お前さんが言うに、俺はゲスだからな」

大体、罪って何だよ、と冬夜はむせながら呟く。

「昔のお偉い方々が作ったルールを破ってはいけません、なんて馬鹿馬鹿しいと思わないか？」

「それでも人を殺してはいけない」

当たり前で模範のような答えが返ってきた。これも冬夜の予想通りだった。分かっちゃいないな、と苦い笑みを零す。しかし、蹴りは飛んでこなかった。

「別に人を殺してはいけません、とは誰も言えないだろう。元々、生物つてのは争うもんだ。殺し合うのが当然だ。それを不自然に捻じ曲げるために、人がルールを築き上げたんだ」

土台を捻じ曲げた上にできた世界なんて壊れるべきだ、と冬夜は言う。それに対する反応は無かった。ただ女の瞳に宿る光が、どこか悲しみの色を帯びたように見えた。

「あなたの常識を疑うわ」

「知ってるか？ 常識つてのは、おおよそ成人までに身につけた独断と偏見のことを言うんだぜ」

どこかの天才が言っていた、と告げることはなかった。まるで自分が生み出した言葉のように堂々と言った。実際、常識とはそんなものだ。育った環境に大きく左右される。そして育つ環境は、人の数だけある。同じ家庭に生まれた兄弟でも、そこには兄と弟、そして生まれた時代背景が絡んでくるため、完全に同じ常識になるとは限らない。それは成長するに従って、より大きく変わっていく。結果、生まれる常識は、その人にとっての物でしかないのだ。本当に全世界共通の――それこそ、どこでも常に通る知識なんてあるかどうか怪しいものだ、と冬夜は推測している。

「それでも人を殺してはいけない」

女は模範解答を再び告げた。もはや、話しても無駄であることを悟り、冬夜は大げさにため息をついてみせる。それは呆れだけではない。本当に問答が疲れてきたのもあった。

ふと視線を落とす、と血の海が冬夜の腰を中心にじんわりと広がってゆく。それを見つめていると、不意に意識が遠のいた。がくり、と頭が落ちる。その反動で何とか意識を取り戻すも、抗いがたい眠気が再び冬夜を襲う。それと同時に悪寒が背筋を抜けて、体が震えた。悪寒と眠気が競り合う。簡単に眠気が勝った。こんな状態でも眠れるんだな、と冬夜は静かになってゆく思考の中で呟いた。

その直後、眠ると言うより、意識を失いかけているのだと冬夜はすぐに気づいた。死が近い。今、自分の後ろに死神さんがスタンバイしていると言われれば、即座に信じただろう。そして、さっさと殺せ、と死神に願っただろう。

「救急車は手配しているんだから、死んだら許さない」

身体が前後に揺れる。しかし、その感覚も遠のいていった。恐らく女が自分の体を揺らしているのだろう。それでも、この眠気には抗えない。瞼が落ち、世界が闇に包まれる。そして音も消えていった。

冬夜はしんと静まった闇の中、心地よさを覚えていた。逃亡生活中、一度でもここまで落ち着けたことがあっただろうか。無かった

とは言わない。実際、いつ死んでも仕方ないと考えていた冬夜の逃亡生活に、緊張感は無縁だった。のらりくらりと人を殺しながら、生きながらえていた。それでも、もう逃げる必要がないどころか、何もする必要もない状況は久しぶりだった。やっと休める、とほっとした。

いつしか、それらも消える。闇すらも。意識が完全に途切れたのだ。そして脈拍が止まる。こうして殺人鬼、南雲 冬夜はようやく止まることができた。

いゝこと（前書き）

先に一言。この話の序盤で殺人について、もろもろ書いていますが、私自身が殺人を肯定しているわけではありません。むしろ、自棄になったとしても、私は誰にも迷惑かけずに、ひっそりと死にたい。何もできない人は、何もせずに世界から退場すればいいのです。あ、私事ですので。

ころすということ

人を殺してはいけない——そんなルールが当然のように敷かれている世界だが、実際はそうなのだろうか。

人を殺してはいけない理由として、他人にやられて不愉快なことはしないように、と教える両親や教師がいる。ならば、殺されても構わないのなら、人を殺してもいいのだろうか、ということになる。それは自暴自棄になって、無差別に殺人を繰り返すことを認めてしまうことになる。

また別の理由として、誰かが悲しむから、と言う人もいるが、それも先ほど述べた理由と似たところがある。あなたが誰かを殺す。すると、その誰かを知っている人が悲しむ。つまり、あなたの周りの大切な人が殺された時を想像しなさい。不愉快でしょう？ と尋ねているようなものだ。ただ、この場合も不愉快じゃないし、自分の周りに失って困るような人はいません、となると相手は絶句するのだろう。

最後に法律で罰せられるから、と言う人もいる。ただ、それは人を殺してはいけない理由になっていないことを彼らは理解していない。別に人を殺してもいいですよ。ただ、殺した際はそれ相応のペナルティを負ってもらいますからね、と言うのが法律なのだ。もちろん、その刑罰を明確にすることで、抑止力に繋がる。しかし、それは人を殺してはいけない理由にはならない。法律によって守られることを望まなければ、それを守る理由など無いのだ。

守りたい者だけ、守っていればいい——冬夜はそう考えていた。だから、身勝手なのは重々承知で、人を殺し続けた。ただ、殺されてもいいと考える者が、生きるために人を殺すと言うのも、これまた矛盾しているように思えた。しかし、飢餓や寝不足で苦しむのは本望ではない、と簡単に考えて、次々と人を襲った。

そんな冬夜は止まった。ようやく止まれた、と満足感の中、死ん

でいった——はずだった。

「何だ、これは」と冬夜は思わず呟いた。仰向けになって、しかもふかふかで温かいベッドに横になっている。どうしてこんなことになっているのか、理解できなかった。

冬夜は白い天井を見つめながら、必死に記憶を辿る。逃げている最中に撃たれて、そして意識を失って……病院？ そろりと冬夜は首を横に振った。しかし、どう見ても、病室ではない。机とタンスがあるだけの簡素な部屋だった。テレビは無い。ただ、机の上に大きなパソコンが一台置いてあった。床には無造作に服が散らばっている。

どこことなく見覚えのある風景に、冬夜は眉をひそめる。掛け布団をめくり、恐る恐る身を起こす。そこで違和感に気づく。むしろ、違和感が無いことに違和感を抱いた、と言うべきだろうか。撃たれたはずの腹部に痛覚や違和感が無かったのだ。

まずは周囲を確認する。人の気配が少しだけするが、その音は遠い。更に部屋の隅まで観察してから、一息吐く。監視カメラも無い。一体何を考えているんだ、と呆れながらも、冬夜は服をまくった。撃たれたはずの腹部に傷は無かった。

そこで再び思考する。撃たれた傷が治ってしまうほど、長く眠っていたのだろうか。しかし、冬夜はそれを即座に否定する。そんな長い時間を眠って過ごしていたら、今こうして身を起こすのも大変だったに違いない。

何かが変だ、と訝りながら、ベッドを抜け出る。足元に散らばる服を踏まないように気をつけながら、部屋を出る唯一の扉へと忍び寄った。そつと扉の取っ手に手を伸ばす。何か仕掛けがあるような重みは無いし、鍵もかかっていない。冬夜はそつと扉を開け、その隙間から外の様子を伺う。先ほど聞き取れた音が僅かに大きくなったように感じた。

どこかの一軒家の廊下のようなだった。フローリングがずっと奥に続いて、その先に階段がある。階段が螺旋状になっているのか、下

のフロアまでは見通せない。ただ、ここが二階以上であることだけは確かだった。

それと同時に僅かな隙間から流れ込んでくる香りは、どこことなく懐かしさを覚えた。しかし、それを振り払うように、冬夜は扉をそつと閉めた。人の気配がする以上、先に進むのは危険だと判断したのだ。何故こんな状態になっているのか分らないが、傷も塞がり、体調はほぼ完璧に近い状態なのだから逃げることも可能かもしれない、と冬夜は考え始めた。足音を消したまま、部屋の中央に立つ。そして二つの選択肢を見やって、冬夜は考える。

冬夜の視線の先には窓が二つあった。どちらも普通の窓のようで、薄いカーテンが陽光を程よく遮っていた。直接触れるのは気が引けたが、この部屋にある物を利用して結果は似たようなところだ。何かしら痕跡が残る、と考えた所で、冬夜はふつと息を吐いた。痕跡も何も、先ほどまで自分はあるベッドで寝ていたではないか、と苦い笑みを零し、そこから冬夜の行動は大胆になった。

机の上にあったシャープペンを手にとり、カーテンを開いた。そこには普通の窓があった。これなら、すぐに逃げ出せるかもしれない、と思えるぐらいに普通だった。しかし、冬夜は硬直する。まるで、そこに罠があるのを発見したかのような、驚愕の表情で窓を見つめていた。否、正確に言うならば、窓の外に広がる風景だろうか。しばらく、それを見つめた後、何かに気づいたように冬夜は部屋を振り返った。

まさか、と小さく呟く。ここは――。

「俺の、部屋？」

何年も昔に逃げ出した場所に、冬夜は立っていた。何の冗談だと笑い飛ばそうと思っても、頬は自然と引きつる。あの女が、ここに自分を運んだのだろうか。それこそ余計なお世話だ、と内から熱が湧き上がった。

殺してやる、と明確な殺意を持ったのは久しぶりだ。今までは成り行きで面倒くさくなり、結果的に殺すことが多かった。殺すこと

が目的なのではない。別の目的があり、それに向けて行動を起こしている内に殺すと言う結果に辿り着くケースが多かったただけなのだ。そのため、久しく湧いた感情のコントロールに手間取る。むしろ、コントロールする気も失せた。冬夜は乱雑に扉を開けて、廊下に出た。

それと、ほぼ同時に廊下にあった一つの扉が開いた。そして顔を覗かせた少女が目丸くして、冬夜を見つめる。そして冬夜も硬直した。

「ど、どうしたの、兄ちゃん」

尋ねられていることは理解している。しかし、今の冬夜に答える余裕は無かった。溢れ出しそうなほど疑問符が浮かび続け、頭の中が詰まりパンクしそうだった。情報過多だった。その一言と彼女に出会ったことで、大体のことは把握できたものの、何故そうなっているのが分からなかった。むしろ、こんな状態になるはずがないのだ。

「もしかして、気分良くなった？」

驚きの色が薄くなり、少女の瞳に期待の光が宿る。しかし、それにも答えられない。やがて、少女は失望したかのように肩を落とした。「もういいよ」と小さく不貞腐れたように零すと、冬夜に背を向けて階段を下りて行った。

冬夜は一人廊下で立ち尽くす。ようやく疑問符が少しずつ消えてゆき、思考の余裕が生まれた。そして結論は驚くほど、あつと言う間に導き出される。

「走馬灯、か」

後頭部を掻きながら、ため息をつく。そして冬夜は階段を下りていった。走馬灯なら遠慮なく立ち振る舞おう。もはや、足音に気を遣う必要も無い、と冬夜はリビングに向かった。懐かしいな、と冬夜は玄関などを一瞥し、思わずため息を漏らす。それが安堵と呆れが混じったような息だった。

そしてリビングへと続く扉を開く。その瞬間、時が止まったよう

に感じた。母も父も妹も、皆自分を見て、固まったのだ。テレビから流れるニュースと、フライパンに熱された何かが鳴いている。それ以外の音は無かった。

おはようと、母がぎこちなく言う。それにさらりと答えながら、冬夜は食器棚を開いた。

「朝ごはん、すぐに準備するから」

冬夜はコップを取り出して、食器棚を閉めた。

「いいよ、別に」と冬夜は断る。何か言いたそうな母の横を通り過ぎて、キッチンに入った。そして蛇口を捻って、コップに水を注ぐ。それを一気に飲み干してから、冬夜は再び口を開いた。

「朝は食べられる気がしない」

そして、もう一杯水を飲み干して、コップを置いた。

「じゃあ、お昼、お弁当は？」

弁当？ と冬夜は思わず聞き返した。その際に制服姿の妹の姿が視界に入り、納得する。まだ自分が学生だった頃の走馬灯なのか、と。それにしても今はいつなのだろうか、と冬夜は内心で首を傾げながら、とりあえず弁当の申し出を断った。「そう」と母は悲しそうに目を伏せた。何も言わなかった父と妹も、どことなく暗い表情で黙々と朝食を口に運んでいた。それにしても良い匂いだな、と母の手にあるフライパンに目をやると、ウィンナーが焼け、ぱちぱちと鳴きながら跳ねていた。

「それ、一つだけ貰っていい？」

そう言って、冬夜はフライパンに手を伸ばした。許可を得る前にフライパンに乗ったウィンナーを手にし、口に運んだ。予想以上に熱かったが、噛み潰すと肉汁が口内に広がった。それがまた熱く、苦労しながら飲み込んだ。喉元過ぎれば熱さを忘れる、ってのはウソだ。胃の中に広がる熱は気味が悪く、冬夜を苛んだ。

そして母に背を向けて、リビングを後にしようとする。さて、どうしてくれようか、この走馬灯、と考えながら、扉に手を伸ばした所で、「冬夜」と呼び止められた。低く、重圧な声だった。それに

答えることなく、冬夜は振り返った。父が渋い顔で口を開く。

「高校ぐらいは出ておけよ」

「出て、何か得するなら」

冬夜は悪気もなく、率直に返した。そして何か言いたげに口を動かす父に背を向けた。待て、と声が聞こえる。しかし、冬夜は無視した。そのまま階段を上り、自室に戻った。そしてベッドに再び横たわった。まだ肌寒く、掛け布団の中に身を滑り込ませる。

「……案外、暇だな」

白い天井を見つめたまま、冬夜は呟いた。やがて、ばたばたと廊下を走る音が僅かに聞こえてくる。そして「いつてきます」と妹の夕夏^{ゆうか}が玄関を出ていった。

部屋を区切る扉と違い、玄関の重厚な扉を開け閉めすると、家全体に音が響く。どこに行くにも誰かに知られてしまうのを嫌い、冬夜はいつしか玄関の扉を音無く開け閉めすることが得意になってしまった。それが後々の逃亡生活でも役に立ったのだから、人生で何が役に立つかなんて分からないものだ、と今更思い耽った。

それにしても退屈だ、と冬夜は思う。あの頃の自分は一体何をしていただろうか、と思い出そうとしても、その後に刻んだ記憶が斬新すぎて、記憶が霞んでいた。とは言え、パソコンに向かっていたような気がするな、と冬夜は布団から抜け出て、パソコンを起動した。

「……遅え」

電源ボタンを押し、パスワードを打ち込む画面まで、しばらく待つ。そしてパスワードを打ち込んでから、更に待ってようやくデスクトップの画面が表示された。一体どんなオペレーションシステムを使っているんだ、と考えて思い出す。窓社の二〇〇〇だ。

ようやく起動したブラウザのお気に入りを見る。ああ、そういえば、と冬夜は思い出す。ウェブ漫画や小説のリンク、またはオンラインゲームのホームページなどが整理されずに並んでいた。漫画でも読み直そうか、とリンクをクリックする。しかし、ブラウザの動き

は酷く遅い。三ページほど進んだところで、次のページを長々と読み込んでいるパソコンを強制終了した。

再び暇になった、と冬夜はベッドに転がった。時計を見ると八時半になり、そろそろ学校も始まる頃だった。今から行ったところで遅刻は決定なのだが、如何せん、この暇が酷い。散らばった服を漁ってみると、随分と下のほうに制服が埋もれていた。いつから学校に行っていないのだろうか、と思い、月日を確認するために部屋を出た。

リビングには母しかいなかった。父はもう仕事に出たのだろう。「どうしたの？」

テレビを見ていた母は冬夜の姿を見ると、柔らかに微笑みながら言った。しかし、その瞳の光が僅かに揺らいているのを冬夜は見逃さなかった。

「いや、暇だなんて」

学校でも行こうかな、と零すと、やはりと言っべきか、母の表情は一気に明るくなった。

「でも、お昼はどうするの？」

「購買で何とかする」

「お金あるの？」

そこで冬夜は首を傾げる。我ながら間抜けだったと思いながらも確認しなければ分らない。と言うか、走馬灯なのにお腹が空くのだろうか、と考えるとおかしくなって、つい笑みが漏れた。ある、と答えて、冬夜はリビングを後にする。

家を出て、途中でコンビニに寄ろう。そこで週間雑誌などでも立ち読みして、今がいつなのかを調べるつもりだった。なかなか自由度の高い走馬灯に満足しながら、冬夜は着替えた。再び制服に身を包むことがあるとは——込み上げる恥ずかしさを一瞬で噛み殺して、冬夜は家を出た。そして自転車に跨り、ペダルを踏んだ。

まだ学校に通っていた頃、よくお世話になったコンビニで自転車を降した。当時、帰宅の途中に寄っていたので、登校中に入ったこ

とはなかった。女性店員の訝るような視線に対し、冬夜は軽く睨み返す。いらつしゃいませ、と店員は目を逸らしながら言った。

そして本棚に向かって、雑誌を手に取り、開く。その記されている日付を見ても、ぱっと思いつけないために逆算するハメになった。結果、今が高校二年の春であることが分かった。自分が学校に行かなくなり始めた頃だ、と冬夜は思い出す。これだけは忘れもない。何を隠そう、自らが殺人に走るきっかけが、この年に生まれるのだから。冬夜からすれば記念の年と言っても過言ではなかった。そうか、この年に俺は人を初めて殺したんだな、と考えると、感慨深いものがあつた。

雑誌を一通り読み終わると、それを元の場所に戻す。そして店員の冷たい視線を背中に感じながら、冬夜はコンビニを後にした。長居は良くない。学生服で、こんな時間にコンビニにいたら、宿敵の警官に補導されてもおかしくないからだ。たとえ走馬灯であっても、警官のお世話になるのは気が進まない。長い逃亡生活のせいで、警官は敵だという意識が抜けなくなっていた。

自転車に跨り、学校に向かって、のんびりと漕ぐ。既に遅れているのだから、急ぐ必要も感じられなかった。懐かしい風景に目を細め、冬夜は故郷の空気を吸い込んだ。まだ冬の残滓を感じさせる空気の冷たさと車が吐き出す排ガスの臭いで、少しむせた。幹線道路を車が颯爽と抜けてゆく。渋滞のピークは過ぎたようだった。

冬夜は腕時計に目をやった。時計は既に九時を回っている。仕事でも学校でも始業の時間だろう。ならば、ここを走っている車は一体何をしているのだろうか、と少し首を傾げながらも、一瞬でその疑問を忘れた。

やがて、学校に着く。誰一人、制服姿を見ない通学路と言うのも、これまた不思議なものだった。自分だけ妙に目立っているのではないかと、と冬夜は気が気でなかった。これも逃亡生活の癖なのか、あまりに目立つ行為は避けたかったのだ。そのため、校門を通り、自転車置き場までやってきて、冬夜は安堵の息を漏らした。

自転車を適当に止めると、下駄箱へと向かった。ふと桜のような澄んだ香りが鼻をつく。冬夜は足を止めて振り返った。自転車置き場の奥にある桜が風に揺られ、花びらが雪のようにはらりと舞い降りた。満開は過ぎているのは、桜に詳しくない冬夜にでも分かった。もう四月も後半に入っているのだから当然だ。雨が降れば、一瞬にして花びらが落ちるだろう。冬夜は興味なさそうに背を向けた。下駄箱を訪れると、やはり二年生の所に冬夜の上履きがあった。

それと履き替えて、廊下を歩く。どこからか授業を進める教師の声が聞こえてくる。それ以外は音が無く、静かだった。階段を上り、教室を目指す。記憶が正しければ、ここのはずだ。冬夜はクラスの番号を確認して、扉を開いた。刹那、空気が止まる。視線が自分の下に集まるのを感じながらも、冬夜は素知らぬフリで教室に踏み込んだ。俺の姿を見たら、一度は誰もが固まる――それに何とも言えない居心地の悪さを覚えて、やはり居場所なんて無かったんだな、と冬夜は小さく息を吐いた。

当時、自分の席がどこだったかまで覚えていない。教室中を見渡して空いている席を探すと、二つあった。どちらだろうかと、冬夜は悩む。確かあちらの席だったと、あやふやな記憶に従って足を進めた。

「おい、南雲」

呼び止められて、振り返る。教師が手を差し出していた。

「遅刻届けは？」

教師の目は笑っていないかった。厳しい目つきで、冬夜を見ている。「それに遅れてきたら、言うこともあるだろう？」

最初からやり直して来い、と教師は言った。急に白けた。冬夜はそんな教師から視線を逸らして、大きくため息をついた。その態度が気に食わなかったのか、教師の眉間に皺が寄る。「何だ、その態度は」と今にも言い出しそうな雰囲気、冬夜は微笑む。

走馬灯だ、自由なのだ。肩に掛けていた鞆を、するりと落とす。身が軽くなった。そして床を三度蹴り、教師との距離をゼロにする。

教卓にあつたボールペンを掴み、教師の首筋に向けて振るつた。それを綺麗に寸前で止める。出ていない芯をかちりと押し出すと、ペン先が喉に触れて、黒い点をつけた。

それだけで充分だった。教師は一步も動けず、状況を把握してから、ようやく腰が抜けたように教卓の影に崩れ落ちた。そして手にしたペンを教卓にそつと置く。冬夜は何も言わずに振り返つた。クラスメイトの視線に一瞬気圧されながらも、自らの鞆を取るために足を踏み出した。

結局、何をしにきたのだろうか、と冬夜は考えながらも、鞆を拾い上げて教室を後にする。それと同時に授業の終了を告げるチャイムが鳴り響いた。

廊下に出ると、先ほどとは違って、音が溢れていた。椅子を引く音があちらこちらの教室から響き、やがて声が漏れてくる。誰もいなかった廊下に人が出てくる。授業を終えた教師や、馬鹿はしゃぎした男子生徒などを無表情で抜き去りながら、冬夜は下駄箱へと向かった。

「冬夜？」

そんな冬夜を呼び止める者がいた。これが嫌だったのだ。冬夜は小さく舌打ちを漏らしながら、振り返つた。久しぶりだな、と笑いながら言う男が視界に入つた瞬間、冬夜は全身の毛が逆立ちそうになるほどの感情が爆発的に生まれた。冬夜が明確な殺意を抱くのは珍しい。しかし、今日だけで二度も殺意を抱いていたら、説得力も無さそうだが、それは事実だった。

目の前が真っ赤になる。八つ裂きにしたい衝動に駆られるも、今は武器が無い。筆箱の中にコンパスや定規などがあるが、それらを取り出す時間が惜しかった。今すぐに目の前の男を殺してやりたいと握りこんだ手に力が入り、骨が鳴つた。

しかし、瞬時にそれをコントロールする。走馬灯なのだから、別に構わないのではないかと考えながらも、周囲の目が気になり、今はすべきではない、と判断したのだ。それは、もはやクセだった。

衝動を飲み込む際に、少し顔を伏せる。そして次の瞬間、冬夜が顔を上げると無表情になっていた。そして目の前の男、上村 祐介を興味なさそうに見つめていた。

「何か？」

「おいおい、用が無かったら、話しちゃいけないのかよ？」

少し驚きながらも、上村は苦い笑みで答えた。

「学校、来る気になったんだな？」

「気まぐれでな」

飲み込んだ衝動は、喉元を過ぎて落ち着いた。熱い物を飲み込んだ時とは違うのだな、と小さく呟いた。

「ん、どうかした？」

何でもない、と返して、冬夜は上村の横を通り過ぎる。

「お、おい、荷物持って、どこ行くんだよ？」

案の定、上村は慌てて冬夜についてくる。あまりにも予想通りすぎて、冬夜は思わず苦笑を漏らした。こういうヤツなのだ。人の気も知らないで、ずけずけと踏み込んでくる。そして人の居場所を奪っていった。一瞬、吐き気を覚えるも、それは現実のものではなかった。飲み下した衝動が再び喉元をせり上がってくるかのような感覚だった。

衝動を再び飲み下して、冬夜は「帰る」と返す。すると「何で？」と尋ねられた。

「それを知って、どうする？」

お前には関係ない、と冬夜は突き放した。しかし、上村はなかなか離れない。じりじりと衝動が喉の壁を上ってくる。

「理由を知れば、何とかできるかもしれないだろ？」

余計なお世話だ、と冬夜は鼻で笑ってみせる。

「お前が原因だよ、言うまでもないだろうが」

その瞬間、上村は目を剥いた。そして悲しそうに目を伏せながらも、足を止めない。未だ、冬夜の横に並んでいた。

「やっぱり、怒ってるのか？」

「そんな気がする」

冬夜の返答が曖昧になったのは、確信が持てなかったからだ。もう遠い昔の記憶だ。今、覚えているのは圧倒的な殺意だけで、それが生まれた原因となる感情を思い出せなかった。ただ、その感情を生み出した原因なら、冬夜は覚えていた。

「別に気にすることはねえよ。お前は良いヤツだ、夕夏と付き合えばいいさ」

どこかで言ったことのあるセリフを思い出して、冬夜はそれを棒読みした。しかし、もはや感情は湧いてこない。二人が付き合いだした当時、自分はどんな気持ちで、その言葉を吐いたのだろうか――冬夜は、それを思い出すことができなかった。

「だからさ、もう帰ってもいいか？」

「いや、そんな当然のように帰るって……良くねえと思うんだが」それに、と上村は続ける。

「部活、どうするんだ？ 先生、もう怒りも呆れも通り越して、心配してるぜ？」

そう言えば、と冬夜は思い出す。学校に顔を出すことがなくなり、それと同時に部活も行かなくなった。結果的に、それは冬夜が初めて人を殺すまで続き、学校も部活も自然と戻れなくなった。

つまり、この頃はまだ周囲が冬夜のことを諦める前だったのだろう。面倒くさいと思いながらも、現状に不思議な心地を覚えていた。走馬灯に出てくる人に心配されてるって、どういうことだ、と。

「辞めるなら辞めるって伝えにいけ、ってことか？」

どうせ結果的に辞めるのだから、と冬夜は肩を竦めながら答えた。すると、上村は大げさに首を横に振った。

「違う、何でそうなるんだよ。今まで、ずっと一緒にやってきたのに」

上村の声は怒気をはらんでいた。しかし、怒られる筋合いは無い、と冬夜は更に突き放す。

「俺の自由だろうが」

「自由だけど、勿体無い。それに辞める理由は？」

飽きた、と返すと、上村は一瞬口を開いたまま、固まった。やがて頬が引きつり、眉が釣りあがる。来る、と冬夜は体を反った。目の前を上村の拳が抜けてゆく。少し目測を誤ったのか、上村の拳は鼻先をかすめていった。そのまま冬夜の身体は後ろに倒れてゆく。その体勢を利用して、冬夜は足を振り上げた。無防備な上村の首筋に、冬夜の爪先が綺麗に入る。そこで振り抜かずに、当たった瞬間に足を引いた。綺麗なハイキックだった。ただ振り抜いていない分、ダメージは軽かったようだ。上村は廊下に膝をつき、咳き込みながらも冬夜を睨み上げていた。

「良かったな」

今、武器が――刃物があったら、確実に殺していたぞ、と冬夜は心の中で呟いた。

そして、これまた随分と目立ったものだ、と冬夜は眉をひそめる。休み時間だと言うのに、廊下はしんと静まり、視線は冬夜と上村に注がれていた。そこから逃げるように、冬夜は上村に背を向けて、下駄箱に向かって歩き出した。本来なら教師に呼び止められて、怒られるぐらいの出来事なのに、誰も冬夜を止めることができなかった。しばらく顔を出さなかった冬夜の変貌に、誰もが声をかけることを躊躇ったのであった。

うるさいというこ

どこかで時間を潰すことも考えたが、こんな時間に制服で出歩いていては目立つと考え、冬夜は寄り道もせず家に帰った。母に「どうしたの」と尋ねられ、「面倒くさくなって帰ってきた」と告げると、肩を落とした。少し悪いことをしたような気がしたが、そんな小さな罪悪感は一瞬にして消え失せる。

着替えを済ませて、冬夜はベッドに転がった。もうパソコンを起動する気にはなれなかった。眠ろう、と目を瞑る。しかし、なかなか眠りにつけず、冬夜は身を起こした。無駄に長く、精密な走馬灯だな、思わず皮肉を零し、空腹を訴えかける胃を恨みながらも、階段を下りる。何か無いだろうか、とインスタント食品を探していると、母がリビングに顔を出した。

「お腹空いたの？」

その通りだったので、冬夜はうなづく。すると、母は「ご飯にする」と台所にやってきて、尋ねる。

「何がいい？」

冬夜は「何でもいい」と返した。実際、空腹を満たすものなら、何でも良かった。そのため、調理が簡単なインスタント食品を探していたのだ。結局、炒飯を作ることにしたようで、母は冷蔵庫から野菜を取り出していた。

料理ができるまで、冬夜はぼんやりとテレビを眺めながら考える。ここまで走馬灯が長引くことなんてあるのだろうか。それを知るには、走馬灯を経験した人に聞くしかない。しかし、そんな稀有な体験をした人は身近にいるはずもない。

ただ、冬夜にとって走馬灯とは、人生のダイジェストを一瞬で眺めるようなイメージだった。しかし、これは違う。時の流れすら正確なのではないかと思うほど、精密な世界が存在した。記憶に無い箇所が、ぼんやりと霞んでいるわけでもなく、目を凝らせば全てを

見てとれる。当時、絶対あんなところを見ていない、と言い切れる箇所にも目をやっても、そこに何かがあるのか、はつきり見えるのだ。過去の記憶から推測して、世界を作り上げているのだろうか、と冬夜は考える。それなら、それでいい、と冬夜はため息をつく。

それとは別に、こうも長々と走馬灯を見るのは、今も自分の身体が集中治療室で手術を受けており、生死をさまよっているのではないだろうか、とも考えた。それなら、さっさと殺して欲しいものだ、と冬夜は小さく息を吐く。どうせ生き延びたって、退屈な時間を過ごし、結果的に死刑になるのだから。たとえ、無期懲役だったとしても、そんな退屈な時を過ごすぐらいなら、首を吊ってでも死んでやる、呟いた。

はい、と母が皿を持ってきた。そこに乗った黄色い米が、良い匂いを放つ。いただきます、と言って、冬夜はスプーンで炒飯をすくった。熱い、そして美味しい。玉ねぎの風味が程よく残り、口内に広がる。精密な走馬灯で良かった、と冬夜は炒飯を一気にかきこんだ。

程良く胃袋を満たし、しばらくすると眠気がやってきた。ぼんやりとテレビを眺めるのも久しいことだったが、平日の昼間に興味を引くような番組は無かった。暇だ、と呟いて、冬夜は席を立った。そのままリビングを後にして、自室へと向かう。散乱した服を構うことなく踏んで、ベッドに横たわった。

現状に関する仮説は二つある。実際は三つあったのだが、それはあり得ない、と冬夜は一番最初に切り捨てた。

まずは一つ目、現状はこの仮説の上に行動を取っている。この世界は走馬灯だ。今頃、生死の境をさまよっている自身の身体を医者たちが必死にいじり回しているのだろう——ぞつとする。

ただ、この世界は本当に走馬灯なのだろうか、と疑念が湧いてきているのも否定できない。味覚、聴覚、触覚、視覚、嗅覚。それら全ての情報が生々しかった。走馬灯クオリティとは、そんなものなのかもしれない。今まで脳に蓄積された感覚の全てを動員して、走

馬灯のクオリティを底上げしているのかもしれない。だとすると、人の脳は凄いものだ、と冬夜は素直に感心した。

しかし、それでも一つだけ解消されない問題がある。この走馬灯仮説を根本から揺るがす問題——それは冬夜が自由に振る舞えていることだ。冬夜は、ここまでで既に記憶とは、かなり違った行動を取っている。走馬灯とは、そんなものなのだろうか、と経験の無い冬夜は考えるも、やはり走馬灯で済ますには、どこか納得がいかなかった。

だから行動方針を変えるべきか、と冬夜は思案する。もう一つの仮説に従って動けば、無難にはなる。しかし、それはそれで退屈になるだろう、と冬夜は思わずため息をついた。二つ目は、一度は死んだと思っていた世界は夢でした、と言う仮説だ。冬夜は人をたくさん殺してきたが、それは全部夢の中だった、と言うことになる。こんな馬鹿な話があるか、と冬夜は思う。この仮説には決定的な欠陥があり、それを見つけるのも、そう苦労しなかった。

痛みだ。幾度と無く銃で撃たれ、刃物で切りつけられ、警棒で殴られ、とたくさんの痛みを経験してきた。あれらの説明は脳が自動再生しました、では済ませられない。度を超す痛みには熱さを感じると知ったのは、あちらでの経験だ。つまり、蓄積された感覚から、それを再現する力はないはずだ、と冬夜は考える。それに夢とは痛みを感じないものだ。それだけは冬夜も確信を持って言える。幾度と無く夢を見てきた中で、銃で撃たれることもあったし、刃物で突かれることもあった。しかし、そこに痛みはなかった。目覚めた際に少し気分が悪い程度だった。

二つの考察を終えて、残った一つが異様な存在感を放っていた。あり得ないと分かっている、笑い飛ばせるぐらい、ぶっ飛んだ仮説であることを理解しながらも、冬夜はそれを無視できなくなっていた。しかし、それは無い、と再び否定する。

時が遡った、だなんて。

「……下らん」

小さく呟いて、冬夜は目を閉じた。布団が温まり、眠気に抗いたいものになっていた。それに身を委ね、試行を停止させた。

*

やがて、冬夜は目覚めた。否、騒がしい物音に起こされたと言っべきだろうか。不機嫌そうに眉をひそめながら、冬夜は身を起こそうとした。しかし、その瞬間を見計らったかのように、腹部に衝撃を受ける。それで冬夜の意識は一気に覚醒する。重い掛け布団を無理矢理はがし、中腰になって構えた。しかし、襲撃者を見て、一気に力が抜ける。

「兄ちゃん、祐介さんを蹴ったんですって!？」

夕夏は冬夜の袖を掴み、わめく。目は血走っており、不用意な発言は控えるべきだ、冬夜は一瞬で悟った。

「やっと学校に顔出したと思ったら、何してんのよ!」

無駄だとは思いつつも、冬夜は事実を告げてみる。

「いや、先に殴りかかってきたの、あいつだぜ?」

実際、先に殴りかからせるような挑発をしたのは冬夜だが、それは意図的に言わなかった。しかし、それを聞いた夕夏の反応は予想外だった。

「知ってる」

「知ってるの?」と呟きながらも、冬夜は思わず耳を疑った。

「祐介さんが言ってた。先に殴りかかった俺が悪いから、兄ちゃんを責めないでくれ、って」

完全に悪者じゃねえか、と冬夜は内心で苦笑を漏らす。ただ、そこまで気にすることはなかった。その程度で罪悪感を抱くほど、冬夜は弱くなかった。否、弱くないと言うよりは、健常ではない——異常だった。

「でも……何で?」

夕夏は叫ぶ。目尻に涙が溜まっていた。それは今すぐにでも溢れ

出しそうだった。思わず冬夜は目を逸らしそうになった。事実を話すべきか、と冬夜の心が揺らぐ。上村を恨んでいる、と言うべきか一瞬だけ迷った。

しかし、夕夏の後ろに母の姿があつたので、出かかっていた言葉を全て飲み込んだ。恐らく、母は騒ぎを聞きつけて、やってきたのだろう。あまり事態を理解できていないのか、顔を青くしながら冬夜と夕夏を見つめていた。

「……部活の件でもめてな」

「知ってる、辞めるんでしょ」

聞いたのか、と冬夜が呟くと、夕夏は小さくうなづいた。

「祐介さんの言うとおりだよ、勿体無い。今まで兄ちゃんのことを知ってるから、辞めてほしくないんだよ」

なのに辞めるの？ と夕夏は尋ねた。それに冬夜は迷うこともなく、うなづく。

「辞める。できれば学校も辞めたいな」

もう何もかもやめたい、と喉元まで出かかったが、それは飲み込んだ。しかし、それは冬夜にとって偽らざる本音だった。

しかし、部活だけでなく、学校も辞めたいと言っただけで、夕夏と母は固まった。それを見て、その後の言葉を飲み込んで良かった、と冬夜は心密かに胸を撫で下ろした。

「冗談だよ」

学校は、と冬夜は最後に付け加えた。ただ学校を出たところで、本当に自分のためになるとは思えなかった。逃亡生活中に見てきた世界は、不景気のどん底を突き破って、更に奥深くに沈んでゆくように見えた。学校を出ていれば、多少はマシだろう。しかし、結局はその程度だ。マシなだけで苦しいことには変わらない。

それに対し、冬夜は気が向いた時に人を殺し、それが発覚するまで住居とお金を自由に使い、気ままに生活していた。時に警官に追われたりもしたが、平和な日常に振りかけるスパイスとしては上質なものだった。

どれほど憎まれようと、冬夜は決して不幸な人生を歩んできたとは思わなかった。ただ、そう思う時点で、既に人として大事な部分を失っているのだろうな、と冬夜は理解した上でのことだった。既に自分は壊れている。大事なネジを失ってしまったのだ。

「話がある、って」

夕夏がぼつりと呟いた。自由気ままな生活に思いを馳せていたため、冬夜は少し反応が遅れた。

「は？」

「だから、祐介さんが話したいって言ってたの」

夕夏はじつと冬夜の瞳を見つめたまま続けて言う。

「祐介さんが怒るなって言ったから、私は何も言わない。けど、祐介さんとはちゃんと話をして、絶対」

もう既に怒ってたじゃねえか、と冬夜は小さく呟く。「何？」と夕夏に凄まれて、冬夜は目を逸らした。

「今晚十九時、河川敷の公園で待つて、って」

話したって無駄だと思う。むしろ、そんな人気の無いところに誘い出して、上村は何を考えているのだろうか、と勘ぐった。しかし、このときの上村は冬夜に殺されるだなんて、夢にも思っていなかったのだろう。殺しやすいか、と冬夜は小さく息を吐きながらも了承する。

「分かった」

「ちゃんと謝ってよね」

分かった、と冬夜は再び返事をした。謝るところか、これから上村を殺そうと考えているのに。

二人が部屋を出ていき、足音が遠ざかるのを確認してから、冬夜は部屋の扉をそつと閉めた。そして机の引き出しをかき回す。何か武器になるものはないか、と必死に探す。その顔に笑みが浮かんでいることは、本人の冬夜すら気づいていない。

やがて、冬夜の手が止まる。そつと引き出しから抜いた手には、大きなハサミが握られていた。裁縫などで布を切る際に使うハサミ

で、切れ味はそこそこある。突きには向いていないことを認めつつも、これは使えると冬夜は確信していた。硬すぎず、柔軟性に富んでいることから、折れにくいだろう。ただ相手の攻撃を受ける際は、この柔軟性がどんな働きをするのか、クセを見極めて使う必要がある。

大体の考察を終えて、冬夜はそれを机の上に置いた。そして宙に向かって手を伸ばす。最初は酷く鈍い動きだった。しかし、徐々に速度が増し、動きも鋭くなってゆく。手を振るう度に、僅かに床が鳴く。しばらく身体を動かして、冬夜はまじまじと自らの両腕を見つめた。違和感があった。何とも言えない違和感が。イメージ通りに身体が動いてくれず、冬夜は少し苛立った。乱暴にベッドに腰を下ろし、壁に掛けられた時計を見た。随分と眠っていたらしい。時計の針は十七時を示していた。

*

「……で、何でお前まで来るんだよ」

尋ねるのではなく、責めるような口調で、冬夜は隣の夕夏に言った。

「ちゃんと謝るか、心配だし」

しれっと夕夏は答えるも、その心配はある意味で的中していた。冬夜のポケットには、引き出しにあったハサミが入っている。家を出る前に多少の改良を加えて、これから試し斬りだ、と冬夜は胸を躍らせていた。しかし、夕夏がついてくるとなると、話が変わってくる。がつくりと肩を落としながらも、夕夏を帰らせる方法を考える。

「絶対に謝る」

もちろん嘘だが、冬夜はさらりと言ってみせる。それどころか、反省の色を見せずに殺しに向かっていているところだ。

「なら、私が一緒しても問題無いでしょ？」

うん、確かに、と冬夜は思わずうなづいてしまった。

それから会話はなく、アスファルトを淡々と踏みしめながら、待ち合わせの河原へと向かった。その後を続く夕夏の足音だけが冬夜の耳に届いた。

街灯がいくつも並び、近くを通り過ぎる度に電磁波を放っているような音が聞こえた。実は街灯の中に特殊な電波照射機が組み込まれていて、知らぬ間に洗脳されているのかもしれない、と冬夜は考えてみたが、どうでも良かった。

既に日は沈み、星が空で瞬いていた。昼間は随分と暖かくなってきたものの、夜はやはり寒い。夕飯を食べたばかりで身体が火照っているせいか、外気の冷たさがより沁みた。少し忠実に再現しすぎだよ、走馬灯さん、と内心で呟いてみるも返事は無く、寒さが緩和されることもなかった。

やがて、道は緩やかに上り、二人の視線の先に堤防が見えた。そこを越えれば河川敷の公園がある。ふと耳を澄ませると、何かの音が聞こえた。懐かしい音だった。二回続けて音が聞こえて、しばらくの静寂。そしてまた音が二度続けて、静寂が訪れた。それは堤防に近づくにつれて大きくなっていった。音の主は言うまでもない、上村だ。冬夜がやってくるまで、ボールを蹴っているつもりなのだろう。

結局、夕夏を振り切ることもできず、ここまで来てしまった。どうしたもののか、とあまり悩む様子もなく、冬夜はぼんやりと考えていた。

既に冬夜と夕夏は堤防のすぐ傍までやってきている。そこで唐突にボールの音が止んだ。代わりに怒声が二人の下まで届く。一瞬だけ夕夏と顔を見合わせて、冬夜は堤防を駆け上った。河川敷を見下ろすと、街灯のか細い光の下に上村の姿があった。その近くに人影が三つほど視認できる。冬夜は状況を把握するために目を凝らし、耳を澄ませた。

「お金なんて持ってません」

上村の声は少し震えていた。なるほど、と腕を組みながら、冬夜はのんびりと光景を見下ろしていた。これなら手を出すまでもなく、上村は死んでくれるかも、と薄い笑みを浮かべながら。

ああいった輩が取る行動は限られている。まずはお金を要求、持つていなければ八つ当たり——つまり、リンチだ。多人数で暴力を振るう場合、歯止めが利かなくなる。外から冷静に見て、止めに入る者がいなければ、被害者が帰らぬ人になることも珍しくない。さて、どうなるか、と冬夜が見つめていると影が動いた。一斉にだつた。

「死ぬかもな」

隣に夕夏がいることを考えると軽率な発言だったと言える。しかし、笑わなかったただけマシだと冬夜は言えた。今にも腹を抱えて、転げ回リたかったが、それは辛うじて堪えた。

「……っ、悠長なことを言ってる場合じゃないよ!？」

夕夏は堤防を下りていこうとする。それを冬夜は止めた。無造作に腕を掴んで、ぐいと引き寄せる。

「馬鹿か、お前。輪姦^{まわ}されてえのか？」

びくりと夕夏の肩が震えた。

「で、でも！」

それでも冬夜の手を振り解こうと、夕夏は腕を振る。しかし、冬夜は更に力を込める。

「な……兄ちゃん、痛い！」

「言っても分からんのなら、痛めつけるしかないだろ」

さらりと冬夜は言った。それを見て、夕夏はぞつとした。兄の顔があんな醜く歪むのを初めて見たのだ。

「まあお仕置きは、これぐらいで」

冬夜は手を離し、夕夏はバランスを崩して尻餅をついた。しかし、そちらを一瞥することなく、冬夜は河川敷に向けて一歩踏み出した。

「そこで見てろ。何かあったら大声を出せ」

「は？　ちよつと、兄ちゃん？」

夕夏の呼びかけを無視し、くるぶしほどまで生えた草を踏んでゆく。しかし、僅かな音しか立てず、冬夜はそつと男たちに近づいた。上村のリンチに夢中になっているのか、男たちは冬夜の接近に近づかない。悪魔のような笑みを浮かべた――否、本物の悪魔が音もなく近づいていることに気づかない。

まずは一人、後頭部に蹴りを叩き込んだ。しかし、一撃で仕止めきれなかった。男はよろめきながらも、倒れることはなかったのだ。やっぱり何かがおかしい、と冬夜は訝りながらも続けて拳を振るう。男は体勢を崩していたため、受けることもでなかった。冬夜の拳を受けて、無様に伏す。しかし、まだ動きがあった。しぶといな、と冬夜はポケットに忍ばせたハサミに思いを馳せる。やっちまうか、と思ったところで、他の二人が冬夜に気づいた。

「何だ、てめえ」

低く威圧するような声に、冬夜はわざとらしく肩を竦める。

「そいつ、俺の獲物なんだよね。勝手に殺されたら困るんだよね」

上村を指さしながら、冬夜は言った。男たちは一瞬黙ったが、すぐに「何を言ってるんだ」と吠えた。

同時に二人、無理だな――武器なしでは。冬夜は今度こそ迷わずに両手をポケットに突っ込んだ。そしてハサミを取り出す。しかし、右手に見える刃は一つだけだった。そして対の手にはもう一つの刃が握られていた。

そして男たちと交錯し、両手を振るう。それは淀みのない綺麗な動きで、手にしたハサミが銀色の一閃となった。右手で一人、左手でもう一人を斬った。

冬夜に躊躇いはなかった。世界の仮説も、夕夏や上村が見ていることも、そして再び殺人の罪で追われることも全て眼中に無かった。ただ渋い顔で、やっぱりおかしいと呟き、首を傾げた。やがて「ハサミではこの程度か」と、冬夜はため息を漏らす。

「今ので手首落とす予定だったんだけどな」

男たちは啞然と冬夜を見つめ、やがて自らの手首に目をやった。僅かな街頭に照らされて見えるのは、ぱっくりと開いた赤い口だった。やがて、そこからじわりじわりと血が流れ出す。男たちは手首を押さえたまま、冬夜を見つめた。男たちの額から、どっと汗が噴き出し、瞳には畏怖の色が浮かんでいた。

「さすがに骨は断てないか。それなら最初から動脈を狙ったんだけどな」

もし狙われていたら、と思うと男たちはぞっとした。本物の恐怖とは、こういうものなのか、と痛感する。そして今更ながら自分たちの行動を後悔した。

「なあ、まだやるか？」

刃を空に放り投げながら、冬夜は尋ねた。刃は回転しながら落ちてきて、再び冬夜の手に残まる。刃は街灯の光を鈍く反射していた。まだ血が僅かに残っている刃を弄びながら、冬夜は男たちに迫った。冬夜の態度は、ファミリーストラップで注文の確認をする店員のような薄っぺらい笑顔を持ち合わせながらも、拭いきれない恐怖があった。

しばらくの沈黙。やがて、男たちは冬夜を警戒することなく、背を向けて走り去っていった。あんまり派手に動くと出血が酷くなるのに、と小さく呟きながら、冬夜はその後ろ姿を見送った。

やがて、音もなく振り返る。上村は街灯の下で啞然と冬夜を見つめていた。そして冬夜は微笑む。ハサミの取っ手のところに指を引っかけて、刃を勢いよく回した。

「さて――」

「兄ちゃん、祐介さん！」

どうやって苦しめてから殺そうか、と恍惚の表情で考えていたところを、夕夏の声で現実に取り戻された。軽く舌打ちを漏らし、冬夜は振り返る。草を盛大に踏みならしながら、夕夏が堤防を駆け下りてくるところだった。

「今は何も言わない」

夕夏に聞こえないよう、冬夜は小さく告げた。その際に見せた冬夜の眼光は鋭く冷たかった。その視線に射竦められて、上村は静かにうなづいた。

*

翌日。暇を潰すために、冬夜は再び学校を訪れた。しかし、登校と同時に職員室に呼ばれ、昨日の教師と上村に対する暴行の叱責を受けた。それで結局、一時間が潰れて、二時間目から授業に参加することになった。しかし、退屈な時間が過ぎるばかりで、冬夜は寝て過ごすしかなかった。

やがて、昼休みになり、冬夜は一人で弁当をつつく。四月前半の不登校から復帰したものの、クラスメイトの大半が冬夜の変貌に困惑していた。どう接するべきか悩んでいるようで、時折向けられる視線に、冬夜はうんざりとしていた。明日から学校に来るべきかどうかを悩みながら、冬夜は空になった弁当箱を鞆にしまった。

しかし、冬夜にとって予想外の事態が起きる。上村がやってきたのだ。顔は絆創膏やガーゼ、瞼の上は青く腫れ上がっていた。「この程度で済んで良かったな」と冬夜は嫌味っぽく笑いかけた。

上村がやってきた理由は分かる。昨晚のことだろう。冬夜は上村を引き連れて、教室を後にした。階段を上り、音楽室や美術室の並び階を目指した。この時間、特別教室の周辺は人気がないからだ。聞かれたくない話をするには最適だし、殺すにしても邪魔が入りにくい。ただ、こんなところで殺したら目撃者多数ですぐさま犯人確定だろう。しかし、そんな細かいことを気にする繊細さなど冬夜は既に捨てていた。

「説明する義務はないね」

こいつは本当に死にたいのか、と冬夜は半ば苛立ちながら、上村に言った。今は夕夏というストッパーがない。今なら簡単に殺せるだろう。しかし、あまりにも軽率な行動ばかり取る上村を哀れに

思つのも、また事実だった。自分が殺すまでもなく、勝手にどこかで死ぬんじゃないかと思えたのだ。

「確かに義務はない。けど、何であんなこと——」

「だから、それに答える義務も無いだろ」

流石に二回目になると、冬夜の語気が強まった。冬夜はポケットに入っている二本の刃に手を伸ばす。刃同士が触れ合い、音が鳴った。それだけで上村は理解したようで、一步下がった。結構です、と言わんばかりに首を横に振りながら。

「でも、部活を辞める理由って——」

「関係ねえよ」

完全に無いとは言い切れない。ただ、上村は納得がいけないと言った様子だった。まるで捨てられた子犬のような目をして、冬夜を見てくる。「ああ、面倒くさい」と冬夜は頭を掻いて、乱雑に言う。

「お前が気に入らんから、部活は辞めたんだ」

突き放す一言としては充分だったはずだ。しかし、上村は引かない。少し悲しそうに目を伏せた後に顔を上げた。それは、どこか決意の見える顔つきで、冬夜は思わず身構えた。

「夕夏と付き合い始めたからか？　だったら今は別れる。お前が納得してくれるまで待つから」

俺にとってはお前も夕夏等しく大切なんだ、と上村は冬夜に迫る。冬夜が刃を持っているのも気にせず——否、気にする余裕がなかったのだろう。それは冬夜も理解できた。何て必死な顔で、すがりついてくるんだよ、と冬夜は顔を引きつらせた。

「離れる、殺すぞ」

上村ははっとして、一瞬で冬夜から離れた。顔色は青い。そんな上村を見て、冬夜は苦い表情で首を横に振った。

「お前にだけは絶対に教えねえ」

そう一言残して、冬夜は上村に背を向けた。

お前がそんなだから——良いヤツすぎたから、俺が狂うしかなかったってのに。良心と嫉妬の狭間で、どれほど俺が苦しんだかも知

らずに。

冬夜は一度も振り返ることなく、教室へと戻っていった。残された上村は、ただ悲しそうに冬夜の背中を見送った。

表と裏

不本意ながらも、冬夜が上村を助けてしまった日から三日も経った。走馬灯にやってきてから、三日でもある。

昨日、冬夜は学校をサボってみた。ベッドで横になっていると、時計の針が一秒一秒を正確に刻む音が、静かな部屋ですっと続いた。冬夜は動かない。呼吸の音すら立てず、静寂の一部と化す。もはや心臓すら止まっていて、目を開けたまま死んでいるのではないかと思えるぐらいに、冬夜は不動だった。

やがて、その静寂を破って、冬夜は身を起こす。

「腹、減ったな」

面倒くさそうに後頭部を掻いてから、冬夜はリビングに向かった。仮説その一、この世界は走馬灯だ。仮説その二、殺人を繰り返す世界が夢だった。この二つの仮説は、冬夜の中で徐々に溶けて、形を留めないどころか、排水口に流れ込みつつある。それを気にする様子もなく、冬夜は朝昼兼用の食事を平らげた。相変わらず嗅覚と味覚が良い仕事をしている、と冬夜は満足げに息を吐いた。

仮説がどうでも良くなりつつあったのは、この世界の自由度のせいだろう。どの仮説だろうと関係ない。自分が考えて、それがベストだと思う選択、行動を取っていけばいい、と考えたのだ。その結果、人が死ぬかもしれないし、死なないかもしれない。ただ、冬夜からすれば、どうでもいい話だった。たとえ、時を遡って、人生をやり直すチャンスを手に入れたところで、真面目にやり直すつもりなど、さらさら無かった——と言うよりも、やり直すと言う選択肢が、元より冬夜の中に無かった。

暇だ、と小さく呟いて、冬夜は背伸びする。背骨が小気味の良い音を奏でた。そして自室に戻って、再び布団に潜り込んだ。そして食後の満腹感から訪れる眠気に身を委ね、重くなってゆく瞼を下ろした。結局、三日目は食っちゃ寝を繰り返したただけだった。そして

三日が経つたのであった。

四日目に入つたばかりの頃、冬夜は目を覚ます。暗闇の中、ぱちちりと開いた両眼が怪しく光った。そろりと音を立てないように布団を抜ける。途端に冷気が服の隙間から忍び込み、布団の温もりが恋しくなった。それを振り切つて、冬夜は冷たい服に袖を通していった。下は動きやすいジャージに、上は風を通さないナイロン生地 of 黒いパーカーを羽織る。首筋に引かつたフードが冷たく、冬夜はそれを慌てて払つた。

家の鍵と二本の刃をポケットに忍ばせて、そつと廊下に出た。既に家族は寝ているのか、音はない。靴下をはいた足でフローリングを滑るように進み、階段も無音で下りていった。

一階に下りると、冬夜の予想通り、リビングに明かりは無かつた。それを見て、少しだけ安心しながら、冬夜は玄関に向かう。二つの鍵を音もなく開け、そつと扉を押した。重厚な扉が僅かに鳴く。それでも寝ているなら気づかれることもあるまい——冬夜は身を滑らせて表に出た。鍵を閉めて、大きく息を吐く。家を抜け出るだけで一苦労だつた。

空気は冷たく、澄んでいる。見上げると、空に浮かぶ星は鮮明に映つた。何をするにしても、人は一日一回は空を見上げるのではなからうか。空には不思議な魅力がある。綺麗な星空なら、それに見惚れる。またどんよりと曇つた夜空なら、どこか不気味な印象を受けるだろう。晴れは見ていて爽快だし、昼間の曇りは雨の心配をして、空を眺めてしまう。たとえば、どんな天気であろうとも、人は空に惹きつけられる——そう考えると、自分も俗物になつてしまったような気がして、冬夜は不機嫌そうに顔をしかめた。

そして、アスファルトを蹴る。最初はゆっくりとしたペースを心掛けて、冬夜は走り出した。

何かしら特別でありたい、と冬夜は思う。日本人は特に目立つのを嫌う。しかし、それは自分が特別で無くてよい、と言うわけではない。ただ、衆目に晒されて、恥をかくことを極端に嫌っている

だけなのだ。つまり、恥をかかないのなら目立ってもよい。誇れる物があるならば、それを認めてほしいと人は願う。承認欲求は誰もが持つものだ。そう考えると、やはり自分は俗物なのかもしれない——そんな結論にたどり着いて、冬夜は路肩に唾を吐き捨てた。緩やかな坂を上り、堤防に差し掛かる。河川敷には下りず、そのまま堤防の上を走り続けた。息が荒れる。部活に行かなくなつて、二ヶ月ぐらいだろうか。体力が少し落ち始めた頃なのだろう。酸素不足を全身が訴えてくるも、冬夜は足を止めなかった。

上村を助けた時にも感じた違和感の正体を、冬夜は掴みつつあった。圧倒的に体力が不足しているのだ。長い逃亡生活で培われた体力と筋力は馬鹿にできない。基本的には殺人を繰り返す中で培われた筋力なので、純粹に人を殺すための筋力になるのだろう。それが今の身体には一切無かった。

そのため、腕を振るう際もイメージ通りに身体が動かず、毎度苛立った。全ての動きがワテンポ遅い。今後どんな生活を送つてゆくにしても、これだけは一番最初に解消しておきたい問題だった。

何があるか分からないしね、と早口で漏らしながら、冬夜は両手を振るつた。走っている途中で、ただでさえ酸素不足で苦しむ中、更に振るい続ける。

基本的に苦しいことは好きではない。それはどんな人だって同じだろう。しかし、自分の身を自分で守れないと言つのは、冬夜が現在感じている苦しみよりも遙かに大きいことだった。力が無ければ落ち着かない、とでも言うべきか。強迫観念のように、自らの弱さに迫られた結果、夜に家を抜け出してトレーニングに勤しむことを決意したのだ。

短く息を吐いて、右手を放つ。長袖が空気を搔いて、ばさりと派手な音を立てた。まだまだ遅い、と冬夜は息を荒くしながら、左手を振るつた。

格闘技に詳しくない者が見れば、シャドーボクシングなんて言葉を思い浮かべただろう。しかし、冬夜の動きはボクシングとはかけ

離れた物だった。武器があることを前提とした一撃必殺。ボクシングのように素早く腕を戻すようなことはしない。一発放って、硬直緩やかに腕を引きながら、逆の腕をまた放つ。その作業を繰り返した。

やがて腕が上がらなくなってくる。それと同時に足も止まった。冬夜は空を見上げたまま、荒く息を吐いて、空気を貪り食った。今、襲われたら一溜まりもないな、と冬夜は軽く笑った。周囲に人の気配はない。ポケットの中の二本の刃を使う必要は無さそうだが、少し残念に思いながらも、家に向かって再び走り出す。息は充分に整った。アスファルトをほとんど音もなく蹴り、冬夜は闇に溶けていった。

*

「兄ちゃん、学校！」

トレーニングを終えて、帰ってきたのは二時。それからシャワーを浴びて、寝たのは三時だった。

そんな事情を知らない夕夏は容赦なく、冬夜の身体を揺らす。昨日は全力で無視したが、今日は無視し続けることができなかった。

「ちよ、痛いから、揺らすなって」

身を捻ると背中中の筋肉が悲鳴を上げた。夕夏の手を振り払うと、その腕が痛む。上半身を主に、酷い筋肉痛だった。

「ど、どうしたの、大丈夫？」

「俺のことは気にするな……さっさと行け」

遅刻するぞ、と付け加えても、「兄ちゃんは？」と尋ねられて、じつと瞳をのぞき込まれる。冬夜は目を逸らすことなく、「後から行く」と告げた。もちろん、行く気はない。嘘だ。しかし、それを見透かしたように夕夏は言う。

「嘘ついたら？」

「針千本——」

あの懐かしのセリフを自然と口ずさんで、しまったと冬夜は後悔した。

「分かった。来なかったら、針千本ね」

綺麗なウィンクを決めて、夕夏は部屋を出ていった。本当にやるはずがない、と思いながらも、冬夜は身を起こし、掛け布団から抜け出た。そしてノロノロと支度を始める。どうせ遅刻は免れないのなら、精一杯ゆっくりとしていこう。ささやかかつ幼稚な反抗をしながらも、着実に準備は進んでいくのであった。

リビングに下り、母の用意した朝食を平らげ、弁当を手には家を出る。まだ八時半頃だったので、学生服を時折見かけた。ただ、冬夜と同じの遅刻組であることは間違いなかった。

ペダルを踏むも、背筋が痛み、両足の重みも酷い。学校に向かうだけで、何故これほどの苦行に陥っているのか、と本気で悩みながらも、冬夜はペダルを回した。

程なくして学校に着く。一昨日、冬夜が学校をサボった日に降った雨で、桜の花びらは散っていた。散らばる花びらは数々の人に踏まれ、黒ずんで汚らしかった。咲いている時は、あれほど綺麗だったのに。不思議なものだ、と小さく呟いて、冬夜は職員室へと向かった。

遅刻届けを書きながら、冬夜は考える。桜が綺麗に咲き誇っている時よりも、散った後の汚れた花びらの方が目を引いた。自分はつくづく壊す側の人なのだな、と改めて思う。創造と破壊は表裏一体なんて言葉を冬夜は聞いたことがあった。しかし、表と裏は絶対的に違う。表と裏と言う関係で繋がっているだけで、それらが顔を合わせ、意気投合するなんてことは絶対にあり得ない。一セットであっても、永遠に対となり、混ざり合わないのが、表と裏の関係なのだ。

この手で何かを作り上げることなんて、一生できないことなのかもしれない——ボールペンを握った手を見つめながら、冬夜は小さくため息をついた。そして、遅刻理由の欄で止まっていた手を再び

動かした。

それを記入して、冬夜は教室へ向かった。階段を上る際に、全身の筋肉が悲鳴を上げる。今すぐに保健室に駆け込みたい衝動に刈られるも、何とか堪えた。ようやく階段を上りきり、誰もいない廊下をふらふらと歩く。そして大きく息を吐きながら、教室の扉を開いた。

「遅れて、すみません」と冬夜はこれ以上は無いと思える棒読み具合で、遅刻届けを教師に差し出した。今回は気の弱そうな教師で、曖昧な笑みを浮かべながら、冬夜の遅刻届けを受け取った。

冬夜は席について、教科書を机の隅に置く。本当に申し訳程度の行為で、授業を真面目に受けるつもりなど、さらさらなかった。両腕で枕を作り、そこに顔を埋める。今日は一日休む、そう心に誓って、再び眠りについた。

しかし、眠りが浅い上に、野暮な教師は冬夜を起こしにやってくる。その都度、教師を睨みつけ、追い払う。以前のボールペン効果が出ているようで、ほとんどの教師が逃げるように去っていった。

そして退屈な時間が過ぎ、ようやく昼休みになる。弁当をさつと平らげて、再び休眠モードに入った。冬夜は、できるだけ身体のリハビリに努めたかった。

やがて、昼の授業も終わり、放課後になった。それでも目覚めない冬夜の前に、一人の少女が現れた。彼女は人差し指で冬夜の腕を突いた。反応は無い。くすり、と笑みを漏らして、今度は少し強めに突いてみる。それでも冬夜は動かない。もう少し強めに、と彼女が指を動かしたところで気づく。僅かに頭が上がっていることに。腕と顔の間に僅かな隙間があり、そこに見える冬夜の瞳は剣呑な光をきざしていた。

「お、おはよ」

それに気圧されるように、彼女の声が震えた。冬夜はそれを黙殺して、再び顔を腕の中に沈める。

「あ、ちよつと」

今度は指ではなく、両手で冬夜の肩を揺さぶった。冬夜は反射的に両手を払い、顔を上げた。

「何だよ」

「もう放課後だけど」

にこりと少女は微笑む。なるほど、と冬夜は席を立った。

「起こしてくれて、ありがとう」

先ほどまで寝ていたとは思えない切り替えの早さで、冬夜は教室を出ようとする。それを少女は遮った。冬夜の前に立ち、出口を塞ぐ形で。

「遅れてきて、ずーっと寝てたけど、南雲くんは学校楽しい？」

「全く」

少女を押し退けて、強引に帰ろうとするも、少女は冬夜の腕をしっかりと掴んでいた。

「……何」

「ん」

冬夜の問いかけに、少女は行動で示す。冬夜の目の前に差し出されたのはアンケート用紙のような物だった。

「文化祭の出し物、同票で決まってるの」

うちのクラスは奇数人数なのに、と少女は微笑む。

「俺か」

「そう、南雲くん」

「お前が入れた方にしといてくれ」

文化祭なんて顔を出すつもりもなかった冬夜は、再び強引に突破を試みる。しかし、少女は粘り強く、冬夜は苛立ち始めた。

「それじゃあ私の独断で決めることになっちゃうし」

委員長の私にそんなことできません、と困ったように少女は言う。この小さい女、委員長だったのか、と冬夜は顔に出すことなく、驚いた。冬夜より頭一つ分ほど背の低い少女は、ぱっちりとした二重の目で冬夜を見上げていた。

「選択肢」と冬夜は言った。しかし、その意味を飲み込めなかった

のか、少女は目を丸くして首を傾げた。

「え？」

「だから、同票になった選択肢を教えてもらえないと、投票できないだろ」

あ、そっか、と少女は慌てて別の紙を取り出す。それを見て、冬夜は眉をひそめた。

「恋愛とお笑い？」

「うん、演劇することになったんだけど、どっちがいいかな、って」
演劇、と冬夜は小さく漏らす。元々は不登校になり、文化祭にも顔を出さなかった。これまた面倒くさいことになりそうだな、と冬夜は頭を掻いた。

「どっちでもいいよ、本当に勝手に決めといてくれて」

「えー、ノリ悪いなあ」

少女は口を尖らせた。それを無視して、冬夜は横を通り過ぎようとする。

「あ、ちよつと待ってって！」

慌てて冬夜の横に並ぶ少女。後ろで一つに束ねた髪が揺れた。そんな少女を突き放すために、冬夜は言う。

「文化祭とか参加するつもりないし」

「え、サボる気なの？」

当然と言わんばかりに、冬夜はうなづく。しかし、それで引き下がってくれる気配は無かった。

「皆でやらないと意味ないよ」

少女の言葉に、冬夜はぴたりと足を止めた。その瞳は再び剣呑な光を宿す。衝動に任せて口を開こうとするも、寸前で堪えた。言葉を飲み込み、代わりに大きく息を吐く。冬夜の気分は、少し落ち着いていた。

俺がいなくても文化祭やたくせに——飲み込んだ言葉を反芻する。冬夜が不登校だった頃は、彼一人の不参加で文化祭の出し物を自粛したなんて話を聞いた覚えはない。つまり、冬夜を欠いたまま、

このクラスは何かしらの出し物を行ったはずなのだ。それなのに今更だ。冬夜の噛み締めた奥歯が悲鳴を上げた。

「本当に勝手にしてくれ。あとは俺を巻き込まないでくれ」

「……何だか、不貞腐れてる？」

下駄箱を前にして、冬夜の足が止まった。少女を睨みつけながらも、吐き出す息を堪える。膨張した感情を少しずつ抜くように、冬夜は小さく息を吐いていった。

「別に」

苛立つてるだけだ、と最後に付け加えて、下駄箱へと向かう。自らの靴が入っているところへ手を伸ばす。そこで再び少女が割り込み、前を遮った。

「そんなイライラしてて楽しい？」

「楽しくないから、サボるんだ」

少女を押しつけて、靴を履き替える。そして、そのまま駐輪場に向かった。

そこまで少女はついてこなかった。一瞬だけ下駄箱の方を振り返ってみると、そこに少女の姿は無かった。恐らく、諦めて戻ったのだろう。冬夜は小さくため息をついて、自転車に跨った。

*

午後二十時。冬夜は腕時計を見つめていた。

町は明るい。まだ営業中の店の看板が煌々と輝いている。赤や黄と夜の闇に吞まれない光が、冬夜の瞳を染める。それを見ているだけで、冬夜は落ち着いた。心の芯まで溶けてゆくかのような安心感と、言い知れぬ高揚と矛盾した感情が渦巻き、混ざり合ってゆく。しかし、心は静まらなかった。

ポケットに突っ込んでいた右手を抜く。何度か握ってみて、筋肉痛がマシになっているのを確認すると、冬夜は静かにうなづいた。口角が僅かに上がる。

黒いパーカーに黒に近いジーンズと今日も闇に溶け込むような服装だった。とは言え、この通りはネオンの光が派手で、冬夜の姿を隠しきれほど闇は濃くない。それを気にすることなく、ゆっくりと通りを歩いた。スーツに身を包んだ中年、男女のカップル、馬鹿騒ぎしながら過ぎてゆく男の集団など、通りは未だ活気に満ちていた。これなら必死に探さずとも、すぐに見つかるかもしれない——うつむいていた冬夜の顔が恍惚で満ちてゆく。

雑踏に混じり、冬夜は目だけを動かす。何か無いか、と血走った眼で。その様子に気づく者がいれば、まるで薬物中毒者を連想しただろう。しかし、冬夜の動きは小さく、うつむき加減のため、ほとんどの人が気づかなかった。雑踏は炸裂寸前の爆弾に気づくことなく、過ぎてゆく。

やがて、冬夜は足を止める。彼の耳に僅かな音が届いたのだ。流れを急に止め、幾人かが冬夜を睨み、避けて過ぎて行つた。それを気に留めることなく、流れに逆らうように足を進める。そして細い路地に踏み込んだ。

すえた臭いと湿気がこもった臭いが鼻をつくも、冬夜の頬は自然と緩んだ。ここが俺の世界だ、と小さく呟き、迷うことなく奥へと進む。雑踏とは違う不自然な音を捉えた。大通りで客を呼ぶような声ではない。低く怒鳴るような声だった。それに惹かれるように、冬夜は路地へと踏み込んだのであった。

大通りの雑踏が遠ざかり、怒声はよりはっきりと聞き取ることができた。それにうなづきながら、冬夜は嬉々として足を運ぶ。いつしか早足になっていることにも冬夜は気づかず、音に誘われるがままに足を動かし続けた。幾度か角を曲がり、雑踏は遠くに消えつつあった。

やがて、冬夜は現場にたどり着いた。身を隠して、観察するようなことはしない。堂々と、その場に踏み込んだ。三人の男が一人の女性に迫っていた。こんなことがあるんだな、と冬夜は呆れ半分、期待半分で音も無く地を蹴った。

「……あ？」

それに一人が気づき、声を上げた。しかし、時既に遅し。冬夜は既に距離を詰め、振り向きざまの男に容赦なく蹴りを叩き込んだ。蹴り足は顎に入り、男の頭は不自然に揺れた。そして、受身を取ることもなく地に伏せた。頭を中心に血が広がる。恐らく、鼻を打ったのだろ。まだ身体が言うことを利かないのか、男はアスファルトの上でもぞもぞと動いていた。

「な……何だ、てめえ！」

もう二人がようやく気づき、冬夜に吠える。しかし、吠える間があったら攻撃しろよ、と冬夜は呆れた。広がってゆく血を蹴り、もう一人に迫る。驚愕で目を大きく見開いた男は、なす術も無く、冬夜に殴られた。

軽い――拳に伝わる感触に、冬夜は不機嫌そうに眉をひそめた。

男はぐらりと体勢を崩しかけながらも、倒れることはなかった。まずい、と距離を取るうと地を蹴るも、二人目の男の襲撃を躲すには少し遅かった。しかし、モーションが大きい男の拳を避けるのは容易い。それを片手で綺麗に受け流して、カウンターで一撃放り込む。続けざまに蹴りを腹部に叩き込んで、二人目は苦しそうに崩れていった。

「く、そ」

残った一人が唇から流れる血を拭い、ポケットに手をつ込んだ。冬夜はそれを黙って見つめる。その瞳はもはや濁った色で満たされていた。出てきたのは刃渡り十センチもない上に折りたたみのナイフだった。冬夜は失望したかのように肩を落す。

「おもちゃかよ」と漏らす冬夜自身の装備も、そう優れた物ではない。それでも男の持つ小さなナイフに比べれば、幾分かマシな自信があった。

でも、まあ、と冬夜は微笑む。

「お前が先に抜いたんだからな」

両のポケットに手をつ込み、刃を引き抜く。それをくるくると

回しながら、冬夜は男に迫る。並べてきた言葉とは裏腹に、狂喜に満ちた笑みで。

「さあ、遊ぼうか」

雲は月の明かりを遮り、大通りの華々しいネオンの光も届かない。闇夜に銀の閃光が走った。カビとすえた臭いの充満する汚れた世界に、もう一つ臭いが混ざる。そこでようやく、冬夜は故郷に帰ってきたかのような心地に包まれ、心が静まった。

三人の男がひれ伏す光景を冬夜は見下ろした。ここが俺の世界だ、と残された女性を気にすることなく笑った。その声が大通りに届くことはなかった。

日常、時々、異常

来るんじゃないかった——冬夜は後悔しながら、大きくため息をついた。原因は目の前の少女にある。

「ほら、南雲くん、こっちこっち！」

少女は冬夜に手を振っていた。そんな手を振るような距離ではないし、目立つから止めろ、と叫びたいものの、叫ぶという行為の方が更に目立つため、冬夜は言葉を飲み込んだ。最近、言いたいことが言えていないような気がする——そう小さく呟いた。

冬夜は不機嫌そうに眉をひそめながらも、ようやく少女に追いついた。文句の一つぐらいいは言ってやろうか、と口を開こうとしたところで、先手を打たれた。

「ここでもいいよ、ありがとね」

少女は微笑んだ。冬夜は指示通り、運んできたダンボールを置いた。さつさと帰ろうと、冬夜は教室を出たところで、少女に捕まり、荷物運びをさせられたのだ。無視して、強引に振り切っても良かった。しかし、また下駄箱までついてこられるのも面倒くさい、と考え、一度だけ付き合ったのだ。

「もう、これ以上は手伝わねえぞ」

「うん、もういいよ。本当にありがとね、助かった」

少女の笑みは止まない。冬夜はそれを見て、何かしら嫌な予感を覚えた。何か裏がある、と確信し、その場を去ろうとした時には遅かった。少女にがつちりと腕を掴まれ、冬夜の頬が引きつった。

「これからさ、演劇の練習するから見ていってよ」

「遠慮しとくぜ」

「遠慮なんていらなから」と少女は半ば強引に冬夜を引きずってゆく。本気で抵抗しなかったとは言え、あの小さな身体はどこにこんな力があるのか、冬夜は不思議でならなかった。演技をほとんど見ずに、人体の不思議についてぼんやりと考えてしまった。

「ねえ、どうだった？」

尋ねられたことを理解するも、ほとんど見ていなかった冬夜は曖昧にうなづく。僅かに残る記憶を総動員するも、素晴らしいとはお世辞でも言えない出来だった。しかし、高校生が文化祭で行う演劇にしてみれば、充分以上の熱意があったのではないか、と思い、素直に「凄いいんじゃないか」と零した。よくぞ、ここまでクラスメイトを引っ張ることができたな、と言う意味で。

「本当？」

冬夜は黙って、うなづく。少女はしばらく冬夜の顔を覗き込んだ後、「そっか」と零して微笑んだ。

「今の言葉に嘘はなさそう」

「おい、待て。一体どういう判断したんだ」

思わず冬夜は突っ込む。大体、この少女に対して一度たりとも嘘をついたことはない。ただ、そこに嘘をつきたくなかった、と人らしい感情はない。嘘をつく必要性や機会が無かったただけだ。必要があれば、嘘をついただろう。それこそ、さらりと息でもするように。それに対し、少女は微笑みながら「分かるんだ」と言う。

「南雲くんの言葉が、演劇のクオリティに対する感想じゃないことぐらいは分かっちゃうんだ」

少し苦い笑みを浮かべた少女に、冬夜は眉をひそめた。何を根拠に、と冬夜は尋ねる。しかし、少女は何となく、と答えるだけだった。

やがて、冬夜は興味を無くしたのか、無言で教室を出た。クラスメイトの視線を背中に感じながらも、賑わった廊下を歩いてゆく。どのクラスも文化祭の準備を進めていた。

「ち、ちよつと待ってよ！」

いつものように少女に腕を引かれて、冬夜は顔をしかめる。登校拒否を真剣に検討したい、と冬夜は小さくため息をついた。

「まだ何かあるのかよ」

不機嫌そうな冬夜を、少女は戸惑いと悲しみの色が混ざり合った

瞳で見つめた。

「本当に文化祭、来ないの？」

「多分」

「なら来るかもしれないんだね？」

多分の意味を分かって言っているなら大したもんだ——冬夜は皮肉ではなく、純粹に思う。

「前も訊いたけどさ、本当に楽しくないの？」

冬夜は一瞬だけ考えて、静かにうなづく。そこに嘘は無いはずだ。その返事を聞いて、少女は悲しそうに目を伏せる。

「嘘じゃないんだね」

「むしろ、何で楽しめるんだ？」

冬夜は純粹に尋ねる。嫌味ではなかった。むしろ、そこから得た答えで何か変わるかもしれないと思いつつも、期待外れの答えに身構えた。期待という行為にはリスクが伴う。期待すればするほど、それを裏切られた時の反動が大きくなる。だから、冬夜は期待を打ち消すように、頭の芯を冷やし、少女の返事を待った。しかし、彼女は困ったようにうつむき、腕を組んだ。

やはり、少女にとっても大した理由ではないのかもしれない——そう解釈した冬夜は、そつとため息をついて、少女に背を向けようとした。

「何が楽しくないの？」

質問に質問を返すなよ、と思いながらも、冬夜は返答を考える。

「全体的に楽しくないから、何が楽しいのか、何で楽しめているのか尋ねたんだが」

「友達と喋るのも楽しいかな。あ、もちろん、勉強はあんまり楽しくないけど」

少女は照れたように舌を覗かせた。

「私は体育も好きかなあ。結構、嫌う人も多いけどさ、身体を動かせるって結構すっきりしない？」

すっきりするものか、と冬夜は返しそうになったのを堪える。い

つまで経つてもイメージ通りの動きに到達できない冬夜は、苛立ちを覚えるばかりだった。とは言え、トレーニングを開始して、まだ一週間と経っていない。結果が出ないのも当然だと、冬夜は理解していた。

「そう言えば部活も辞めちゃったんだっけ？」

冬夜は答えない。

「何で辞めたの？」

「別に、理由なんてない」

「嘘」

あまりに早い宣言に、冬夜は思わず顔を上げた。その顔は明らかに苛立ちの色が浮かんでいた。

「確かに嘘だ。それが何か？」

「……うわぁ、開き直ったし」

それでも少女は楽しそうに笑った。冬夜にはよく分からなかった。「とりあえずさ、手伝えとは言わないよ。だから、毎日学校には来てほしいな。南雲くん、明日から学校来ないつもりだったでしょ？」

私、しつこいもんね、と少女は苦笑を漏らす。冬夜はうなづいてやりたかったが、寸前で堪えた。

「演劇の感想が欲しいの。私たちは皆、製作に携わってるから、外からの冷静な意見が欲しいんだ」

「で、放課後の自由な時間をどれくらい束縛してくれるんだ？ 結果、俺が何か得をするのか？」

手伝うまいと、冬夜は早口でまくし立てた。少女は困ったように肩を竦める。

「さぁ、私には分からないよ。それは南雲くんが見つけるべきだと思う」

「俺が？」

そう、と少女は柔らかに微笑む。

「楽しくないってのはね、きっと南雲くんの思い込み。それがきつと目を曇らせているんだよ。だから、その思い込みを無くすことが

一番」

色んな場面に自分を置いて、そこで楽しみを見出す努力をしてほしいの——少女はそう言って締めくくる。いつしか、二人は下駄箱までやってきていた。

「じゃあね、南雲くん」

また明日、と少女は小さく手を振る。冬夜は振り返ることもなく、「気が向いたらな」と返して、去っていった。

自転車置き場までやってきて、視線が無くなった。そこで冬夜は一度だけ校舎の方を振り返る。表情は無かった。ただ、冬夜の口が僅かに動く。ここは俺の世界じゃない、と自分に言い聞かせるように何度も唱えてから、やがて校舎に背を向けて自転車に跨った。

その晩、冬夜が夜の街に出ることはなかった。自宅でトレーニングを済ませて、日付が変わる頃にはベッドで眠りに落ちた。

*

翌日、冬夜は学校に行った。一日授業を終えようと、少女に捕まらないように学校を去った。そして行ったり行かなかったりと、本当に気分で一週間を過ごす。逃げることに失敗し、少女に捕まることもあった。その度に席に座らされ、クラスメイトのやる演劇を眺めることになった。

そして文化祭の前日になる。冬夜は明日、学校を休むことを少女に告げようとやってきたのに、今日も演劇を最後まで見るハメになった。つくづく恐ろしい女だ、と冬夜は頬杖をつきながら、演劇を一通り眺める。劇的な変化はない。ただ、熱意のようなものは以前に増して感じられた。

「どう、かな？」

全てが終わって、少女が尋ねる。冬夜は「良くなった」と当たり障りのない返事をした。それ以外に何とさえいいのだ、と冬夜は内心で叫ぶ。クラスメイト全員にじつと見つめられて、感想を求め

られる側の気持ちも考えろ、と少女を睨み付けた。少女は苦笑で応じた。

「じゃあ、帰っていいよな」

冬夜は席を立ち、教室を後にする。何とも言えない気まずい雰囲気から逃げるように、冬夜は早足になった。

「ちよつと待つてよ！」

いつものように追いかけてくる少女に、冬夜は足を止めて振り返った。呆れたように息を吐き、少女が追いつくのを待つ。

「……ごめん、何も考えてなかった」

少女は頬を赤く染めながら言った。

「あの場じゃ、良かったって言うしか無かったよね」
気を遣わせてごめん、と少女は頭を下げた。

「別に」

冬夜は感情のこもっていない声で返し、再び足を進めた。少女に頭を下げさせている光景が無駄に視線を集めるので、それから逃げるように冬夜は足を進めようとした。それに気づいて、少女は慌てて冬夜に並ぶ。

「で、本当のところ、どうだった？」

「一週間で、あそこまで変わるんだな、と正直驚いている」

冬夜は素直に感想を述べた。

「でしょでしょ！ 感情のこもった演技ができてるでしょ」

少女は嬉しそうに言った。しかし、そこで冬夜は首を傾げる。感情という言葉が妙に引つかかった。

「悪いが、それは分からなかった」

皆、真剣に演技をしているから、その熱意だけは分かった、と冬夜は続けて述べた。

「えー、感情、届いてないのかなあ」

少女は肩を落として、がつくりとうな垂れた。それを見て、冬夜は口を開く。

「いや、観客が悪かったんだろ。原因は恐らく俺にある」

そうか、感情か。冬夜は内心で苦笑を漏らした。

「あ、何か良くないこと考えてる」

「……何故分かるんだ、お前」

「前も言っただけど、何となくなんだよ」

それより、と少女は区切って眉をひそめる。

「お前って呼ぶのい加減やめてほしいなあ」

そう言われて、冬夜の目が泳ぐ。少女の頭から靴の先まで、さつと見た。

「まさか、と思うんだけどさ」

少女は頬を引きつらせながら、続けて言う。

「もしかして私の名前、覚えてないの？」

結局、外見から名前の情報を探し出すことはできなかった。冬夜は負けを認めるように、視線を逸らす。

「マジですかい」

「ほとんど不登校だったからな」

苦し紛れの言い訳をするも、ここまでに何度か学校を訪れている。その間に覚えるチャンスだってあったはずだ。しかし、億劫だと、冬夜は調べることもしなかった。その後ろめたさが顔に出たのか、少女は不機嫌そうに眉をひそめた。

「西浦　かなみ！　それが私の名前です、ちゃんと覚えてよね？」

「了解、西浦さんだな」

冬夜は、あまり覚えるつもりもなかった。しかし、その名前はすっと胸に落ちていった。何度も帰り際に捕まった印象が強すぎて、むしろ覚えないうという行為の方が難しくなっていたのだ。

「ねえ、私以外のクラスメイトの名前、覚えてる？」

それに冬夜はワザとらしく肩を竦める。言うまでもないだろう、と言わんばかりだった。それに少女は再び肩を落とす。

「もう五月だよ」

「さっきも言っただが、四月の半分以上は休んでいただろうに」
階段をゆっくりと下りながら、冬夜は言い返した。

「で、だ。一応、話を戻すぜ。感情云々はつきり言おう。俺の欠陥だ」

「欠陥、って……もつと別の言い方無いかなあ？」

西浦は苦笑で言うも、それ以上に相応しい言葉は——と考えて、冬夜は適切な言葉が思い浮かんだ。

「壊れた」

「え？」

「俺は恐らく壊れてるんだ」

冬夜は、そんなことを無表情で言う。西浦はしばらくきよんとしていた。そんな彼女の反応を見て、冬夜は少し後悔した。言ったところで、きつと分らないのだろう。それなら言わなければよかった。自らの欠陥を晒して、俺は何がしたいんだ、と冬夜は自身に腹を立てた。

感情——それらは冬夜にとって邪魔な物でしかなかった。感情があるせいで頭が腐りそうになるほど悩み、結果的に狂気を抑えきることができなくなった。

恐らく、あれから冬夜は感情を殺し続けてきたのだろう。どれほど殺しても、傷つけても、踏みにもしても、蹴散らしても、冬夜の感情は揺れない。もはや、感情の殺し屋と呼んでも間違いないだろう。そして、それは逃亡生活の中で罪悪感に押しつぶされないように、更に成長を続けた。いつしか、どんな状況であろうとも、無意識に感情を押し殺すことができるようになっていたのだ。だから、冬夜自身もどんな感情が渦巻いているのかも知らずに、いつの間にか綺麗さっぱり処分されていた。

決定的な欠陥を目の当たりにして、冬夜は静かにうつむいた。瞳が陰り、濁る。自分の世界は暗く、臭い路地裏でなかったか、と自問自答する。こちらは自分の世界ではないのだ、と割り切って、冬夜は止まっていた足を再び進めだした。

その時だった。

「なら直そうよ」

「は？」

踏み出そうとしたところで足を止め、冬夜は即座に振り返った。

「壊れてるんなら直す努力しようよ」

「決定的だぜ？」

「粉々？」

そこで冬夜は返答に困る。一体どう言えば、西浦は納得するだろうか。冬夜は逡巡する。

「ん、大丈夫、絶対直るって」

悩んでいる冬夜を余所に、西浦は微笑んだ。その根拠は一体どこから、と言いそうになるも、冬夜は言葉を飲み込んだ。その代わりに吹き出す。失笑と苦笑の混じったもので、冬夜はそれを噛み殺すことができなかった。それぐらい気楽に考えられたら、自分も狂うこともなかったのだろうか。その思いが胸に僅かな痛みをもたらした。

「な、何よ」

少女の頬は僅かに赤い。

「お気楽でいいよな、って」

「考えすぎるより、マシでしょ」

ポジティブがいいんだよ、と西浦は言うも、不機嫌そうに顔を背けてしまった。

でも、まあ、と西浦は冬夜を見つめ、口を開く。

「笑えるんだったら、大丈夫だと思うよ」

やんわりと西浦は微笑む。大丈夫——その言葉が冬夜の心の中に落ちていった。そして、奥の何かが暴れる。蓋をして、無視してきた何かが騒ぎ出す。それが殺してきた感情なのかな、と冬夜は静かに考え、蓋を強く押し付けた。

「……だったら、いいな」

冬夜は西浦に背を向けて、階段を下りた。そのまま廊下を抜けて、下駄箱にたどり着く。

「それじゃ、また明日」

西浦は、冬夜の返事を待たずに去っていった。そこで思い出す。
「……明日って、来るつもりないんだけどな」
結局、明日、文化祭を休むと言えずに、冬夜は学校を後にした。
そして文化祭前のせい、少し雰囲気の違いから学校を遠くから眺めて、
冬夜は思う。何のために俺は学校に来たんだろう——冬夜は帰路の
途中で大きなため息をついた。

*

冬夜が家に着いたと同時に、夕夏も表に出てきた。顔は青く、いつものように「学校は？」などと声をかけてこない。それほどに余裕が無い夕夏を見るのは久しぶりだった。

「どうかしたのか？」

冬夜は思わず尋ねた。穏やかに刺激しないように心がけたのに、夕夏の焦りは消えない。

「祐介さんがつ……！」

上村が、と冬夜も口ずさむ。

「入院したの！」

「は？」

冬夜は訝しむように眉をひそめた。何故、と続けて尋ねる。

「複数の、人に襲われた、って」

これから病院行ってくる、と夕夏は自転車に跨った。その後ろ姿に、冬夜は最後の質問を投げかける。

「どこの病院？」

「県病！」

夕夏はそれ以上は何も言わずに、自転車を漕ぎ出した。冬夜は、それを呆然と見送る。漠然とした嫌な予感に包まれていた。やがて、自転車の方向を変えて、冬夜も自転車を漕ぎ出す。向かう先は言うまでもない。夕夏の言った県立病院だ。

*

「……お前まで来るとは思わなかったよ」

上村は軽く笑ってみせる。しかし、顔はミイラのように包帯でぐるぐる巻きにされていて、冬夜は笑えなかった。何があった、と尋ねるも、僅かに首を横に振るだけだった。

足が吊られている。分厚く固められた上村の右足を見つめ、冬夜は思わず吹き出した。

「ちょっと……何がおかしいのよ？」

じろりと夕夏に睨まれて、冬夜は目を逸らした。本当に自分が手を下さなくても、いつか死んでくれるような気がした、なんて口が裂けても言うつもりはなかった。

やがて、沈黙が流れる。冬夜は静かに病室を後にした。上村の視線を、その背中でひしひしと感じた。

病室から少し離れたロビーで空いている席に腰を下ろした。ブラウン管の分厚いテレビがニュースを流している。しかし、高校生一人が集団暴行を受けて、入院したという情報は無かった。冬夜は背もたれに身を預けて、そつと息を吐いた。

そのまま、ぼんやりとニュースを眺め、夕夏を待つ。ニュースが終わり、次の番組が始まった頃、ようやく夕夏がロビーに姿を現した。どこか不機嫌そうで、冬夜は身構える。

「……兄ちゃんに用があるって」

ぼそり、と夕夏は言った。

「分かった。すぐ済ませてくるから、待ってる」

「先、帰る」

「待ってる」

「何——」

「何度も言わせるな」

冬夜の眼光に気圧されて、夕夏は息を飲んだ。やがて、小さくうなづく。それを見て、冬夜はロビーを抜け、上村の病室に向かう。

「よう、色男」

先ほどは夕夏がいて、言えなかった皮肉を吐きながら、冬夜は病室に踏み込んだ。上村の横までやってきて、彼の顔をのぞき込む。

「夕夏を待たせてる。だから、さっさと教える。何があつた？」

「お前にしちや賢明じゃないか」

「お褒めの言葉は今度でいい。さっさと教え」

冬夜は、上村の右足をデコピンしながら言った。上村は顔色一つ変えない。むしろ、冬夜の指が痛かった。

「お前に助けられた日、あつたろ？」

「ああ……あいつらなんだな？」

「そうだ、と上村は小さくうなづく。

「まったく……小さいことをやるもんだな」

「今回は三人じゃない。もっとたくさん人がいた」

「そう、と冬夜は素っ気なく返す。しかし、上村の瞳に浮かぶ焦りを見て、眉をひそめた。

「まだ何かあるのか？」

「あいつらは、お前の住所を知りたがつてた」

「教えたのか？」

「馬鹿野郎、そんなことしねえよ。結果がこれだ」

上村は腕を広げてみせる。どこかが痛んだのか、上村は小さく唸った。

「じつとしてろよ。馬鹿か、お前」

「それはいい……それよりも、俺の学校はバレた。あいつらは念のために、学校に行くって言ってやがったんだ」

「ほう、と冬夜は返した後に、小さく唸る。

「今日は、それらしきを見てないな」

「たぶん、明日、だと思う」

上村の目は笑っていない。どこか苦々しげな色を浮かべていた。「文化祭となると、外のヤツが自由に出入りできるからか？」

冬夜が尋ねると、上村は「そうだ」と答えた。

「そこまで賢い連中かね？」

「だからと言って、無警戒で過ごすのも馬鹿らしいだろうが」

上村の声が少し荒れた。そして激しく咳きこむ。その背中をさすることもなく、冬夜は冷たい瞳で、上村を見下ろす。

「で、俺を呼んだ用件は？」

「……何かあった時、夕夏を守ってほしい」

「馬鹿か、お前」

再び同じセリフを吐いて、冬夜は苦笑で返す。

「妹を守らない兄が、どこにいる？」

「そう……だな」

上村の瞳に安堵の色が浮かぶ。そして眠いと小さく呟いた。

「寝ろ」

ついでに死ね、と心の中で呟き、冬夜は病室を後にした。

さて、どうしたものか——冬夜はロビーで待たせている夕夏の下に向かいながら、考える。

ベストの選択肢は、明日の文化祭に夕夏を参加させないことだった。つまり、自宅謹慎が楽で確実だ。念のために冬夜も家で待機しながら、サボれるという特典付きだが、ハードルが高い。高校に入って、初めての文化祭を休めと言われて、夕夏が受け入れるような気がしなかった。こればかりは上村の力を借りても難しいのではないかと思えるほど、夕夏は文化祭を楽しみにしているのだ。

案の定、ロビーで待っていた夕夏に尋ねてみるも、一蹴される。

「嫌だよ、行きたい。祐介さんと一緒にできないは悲しいけど」

「その上村のお願いなんだが」

冬夜が言くと、夕夏は少し悩んだ。

「……だったら、何で私に直接言わないわけ？」

しまった、と冬夜は内心で舌打ちを漏らす。こうなると、もう一つの手段しかなかった。しかし、それを思うと、冬夜は憂鬱になった。

二人は病院を出て、それぞれの自転車に跨った。行くつもりなん

て無かつただけどな、と冬夜は呟く。それは町の喧噪に吞まれて
いて、夕夏は気づかなかった。どうやら、今回の文化祭は参加し
なければならぬようだ。

文化祭

太陽が顔を出した。地平線から溢れんばかりの光を発し、町の闇を一瞬にして消し去ってゆく。その光が町を起こすかのように、喧噪は広がっていった。人が動き始め、自動車が走り出す。

そんな中、冬夜は自室で膝を抱えてベッドに座っている。一時間ほど前には既に目覚めていた。しかし、その体勢になってからも、まるで眠っているかのように静かに息だけをしていた。ただ、眠っていないことを示すのは、血走った両眼だった。

守るために戦う——それは冬夜にとって初めての行為だった。おかしい話だった。何故、自分は上村の頼みを聞き入れているのか。また、夕夏を家に閉じこめておけば、簡単に話が済む話なのに、難しい手段を選んだのか。多数の感情が絡み、冬夜は胸に締め付けられるような痛みを覚えた。しかし、それも刹那的で次の瞬間には忘れ去っていた。相変わらず血走った眼で、小さく同じ言葉を呟いている。守る戦いだ、と。

湧き上がる高揚は消し去っても、すぐにまた顔を出す。その作業を繰り返す内に、湧き上がる高揚の量が減ってきたように思える。幾分か落ち着くことができたと確信を得るまで、冬夜はそれを繰り返した。

やがて、冬夜はゆらりとベッドから下りて、立ち上がった。眠そうな目に気だるげな動作で、ゆっくりと着替えをする。上は黒いパーカー、下は学校指定の長ズボンで、パーカーのポケットには刃を一本ずつ放り込み、ズボンのポケットには財布と家の鍵を放り込んだ。

静かな部屋に衣擦れの音と時を刻む音だけが響く。ふと時計に目をやると、六時半だった。そろそろ出なければならぬ。冬夜は音もなく、部屋を抜けた。そして、玄関は特に気を遣うことなく、派手に音を立てて出た。その代わりに素早い動作で自転車に跨り、ペ

ダルを踏み込む。冬夜は振り返ることもなく、家を離れてゆく。その際、背中に視線を感じることは無かった。

ペダルを踏む身体は軽い。昨晩は負荷のかかるトレーニングを避け、ストレッチだけで済ませた。お陰で、現状ではベストに近いコンディションだった。とはいえ、筋力がつくほどの時間は経っていない。自分の体力を過信してはいけないだろう——軽く考察を終えて、冬夜は思考を切り替える。

時計はまもなく七時になる。文化祭が始まるのは十時。それまでに、やることはたくさんある。

冬夜はまず学校に向かった。まだ七時を回ったばかりなのに、文化祭当日とあってか、早くから来て作業をしている生徒も多かった。そのためか、冬夜の姿を見て、少し怪訝そうな顔つきになる同級生もいた。あれほど文化祭の準備に対し、非協力的だった冬夜が、こんな時間に登校しているのが不思議だったのだろう。仕方ないことだ、と冬夜は割り切って、下駄箱に向かった。もう誰も下駄なんて履いてないのにな、と冬夜は不意におかしくなって吹き出した。冬夜は自分の教室に向かわなかった。職員室に向かい、外来用のパンフレット一冊を手にとった。ざっと見て、どのクラスがどんな出し物をするのか目を通す。やがて、冬夜の口角が僅かに上がる。一見すると嬉しそうに目を細めているようにも見えた。しかし、よく見ると、その瞳の濁りは酷かった。

パンフレットを元の場所に戻し、今度こそ階段を上る。しかし、冬夜の教室のあるフロアを通り過ぎて、更に上のフロアへと向かった。そこは一年生の教室が並ぶ廊下だった。ずらっと並ぶ九個の教室、この中の一つが夕夏の教室なのだろう。そう言えば夕夏を巻き込まないように戦うには、このフロアは避けなければならない。つまり、二年生と三年生のフロアを主戦場にするしかない。冬夜は足を止めることなく考える。パンフレットの内容を思い返し、優位に戦える構図を作り上げていく。

よし、と小さく息を吐き、冬夜は学校を後にした。やるべきこと

は、まだまだある。

*

時計の針が九時半を回った。ようやく外来が校内に流れ込み始めた。喧噪が一際大きくなる。父兄だけでなく、他校の生徒も私服で混じっていた。

そこに険しい表情の男が十人ほど、流れに混じって校内に侵入した。目配せをして、散り散りになってゆく。目的は言うまでもない。しかし、冬夜はまだ学校に戻っていなかった。

*

「本当に来なかったね」

一人の少女が言った。教室はしんみりとした空気が充満していた。「準備も一切手伝わなかったんだ。当日だけ楽しみにきてたら、笑えないぜ」

また一人、今度は男子が口を開いた。しんみりとしていた教室に、喧噪が渦巻く。そこで西浦が声を上げた。

「はいはい、そこまで！」

ぴたりと喧噪が止み、クラスメイトの視線が西浦に集まった。

「だったら参加しなかった南雲くんを後悔させちゃうぐらい、私たちが楽しもうよ」

微笑みながら言うも、西浦の心はずきりと痛んだ。こんなこともあるかもしれない、と覚悟していたつもりだった。結局、覚悟なんて仰々しい言葉を使えるほどの心は固まっていなかったのだらう。崩れてゆく心が痛かった。

時計の針が十時を示す。まもなくして校内放送が、文化祭の開始を告げた。しかし、校内に冬夜の姿は無いままだ。

*

「……いないっすね」

文化祭が始まって、三十分ほど経った。分厚い携帯電話を耳に当て、男は辺りを見渡す。

「やっぱり違う学校だったんすかね」

安直な考えだったか、と男は反省するも、リンチした男が情報を吐かなかったため、可能性としては、この学校ぐらいしか無かった。ただの通りすぎりだったのだろうか。否、あの男は言った——俺の獲物だ、と。つまり、あの二人は何かしらで知り合いなのだ。リンチで瀕死にするのではなく、じわじわと痛めつけ吐かせればよかった、と後悔しながら、男は自らの手首を見つめた。包帯が巻かれ、無理に動かせば血が滲む。それほど深い傷をつけられた。それを見る度に、男の腸は煮えくり返る。絶対に許さない——男は人の流れを逆らうように廊下を進んでいった。

*

「お前ら、文化祭を見に来たんじゃないだろ」

二人の男の後ろに忍び寄り、冬夜はささやいた。男たちは瞬間的に振り返るも、遅かった。冬夜は片方の男の振り向きざまに合わせ蹴りを叩き込んだ。男はぐらりと揺れ、そのまま廊下に倒れた。

「お、前……！」

もう一人が拳を振りかぶる。遅い、と冬夜は距離を詰めて、みぞおちに肘を入れる。苦悶に顔を歪め、前かがみになる男の後頭部に再び蹴りを放つ。体重を乗せた蹴り下ろしで、廊下に伏せた男はぴくりとも動かなかった。

周囲は、その光景を啞然と見ていた。冬夜は、まだ意識のある男の髪を掴んで起こした。

「なあ、何人で来てるんだ？」

「誰、が……づう!?」

冬夜は無表情で男の手の小指を掴んで、無造作に骨を折った。小気味良い音は喧噪に吞まれる。男のうなり声だけが廊下に響いた。

「あと九本」

ぞつとするほどの無表情で冬夜は薬指を掴んだ。

「じ、十二人だ!」

「そう。で、お前らみたいにペアで動いてんの?」

「そつだそつだ! 待て、全部しゃべるから!」

冬夜が手に力を込めると、男は青ざめて全てを話した。とは言え、大した情報は無かった。やはり、冬夜を狙って、やってきたらしい。「あのな、これは俺にしては珍しい親切心からの忠告な」

冬夜はやりわりと微笑んで、男に言う。

「次やったら、学校ごと皆殺しにするからな」

「そ、そんなこと——」

「残る十人」

冬夜は男の言葉を遮って両手の指を広げた。十本の指が男の眼前に並ぶ。脂汗を流しながら、男はそれを見つめていた。

「俺は全員をノーダメージで狩る。それぐらいは簡単にできるんだ」
相変わらず冬夜は微笑んでいる。これ以上、ここにおいては危険だ、冬夜は腰を上げた。そして最後に告げる。

「携帯で仲間に教えてやれよ。逃げるなら今の内だぜ、って」

それと同時に冬夜はゆつたりとした足取りで、その場を去った。

しばらくして騒ぎを聞きつけた教師が、血相を変えてやってきた。気絶した男と、手を押さえて苦悶の表情を浮かべる他校の男たちを見て、教師は首を傾げた。

*

時計の針は十一時に差し掛かるところだった。僅か一時間ほどで狩る側と狩られる側が逆転してしまったことに、冬夜は少し落胆す

る。もう少し計画性を練って、挑むべきだろう、と大きなため息をついた。

やがて、また二人組の男を見つめた。しばらくは遠目から観察する。ただ、間違えて襲ったところで、冬夜の良心は一切痛まないだろう。しかし、無駄な犠牲は避けるべきだ、と冬夜は男たちの後ろ姿を追った。男たちの視線の動きは、出し物を見ている気配はない。人を探すように顔を左右に振っている。そして、その表情は険しい。恐らく当たりだろう。冬夜は人の間をすり抜けて、二人に迫った。しかし、廊下の混み具合が酷く、なかなか進まない。これほど人が来ることは想定していなかった。

ただ、予想外にも男二人は足を止めた。耳に携帯を押し当てて、何やら言っている。その隙に冬夜は二人の後ろに迫った。

「はぁ、逃げろってどういうことだ？」

真後ろに立った冬夜にまでスピーカーの音が届く。「あいつはヤバイ」と言う声が聞こえた。

「だからって、お前——」

「何、君ら。俺に狩られたいの？」

電話している男が、ようやく振り返った。驚愕と怒りが混ざり合った表情も、次の一瞬で消え去る。冬夜は、男の振り向きざまに合わせて腕を振るった。固い肘が男の顎に砕く。顎を押さえたまま、男は悶絶した。

冬夜は転がっていった携帯電話を拾い上げ、もう一人の男に投げる。

「まだ通話中だぜ、出てやれよ」

男は反射的に携帯を受け取るも、ぶるぶると震えながら首を横に振った。

「出ないの？」

「す、すまん、俺が悪かった」

よく見れば、この男も手首に包帯が巻かれていた。

「あーお前さんか」

冬夜は柔らかに微笑んで、男と肩を掴んで強引に引き寄せた。そして耳元で小さくささやく。「お前を抜けば、あと八人」と。

「すんません、本当にすんません」

男の顔は既に血色を失い、青かった。そんな様子を見て、冬夜は大きくため息を漏らした。萎えてしまったのだ。

「こんなことする馬鹿は一度死なないと直らないと思うんだが」

ポケットに入っている刃を、男の腹部に押しつけながら冬夜は微笑む。

「もう、二度としません、から」

がたがたと歯を鳴らしながらも、男は言葉を紡ぐ。つまらん、と冬夜は男を解放した。

「残る八人、全員呼べ」

「……は？」

「その携帯で連絡取って、全員呼べって言ってんだ。場所はそうだな。この校舎の三階にある二年一組で」

冬夜はそれだけ言い残して、男の前から姿を消した。

*

十一時、教室で演劇の順番を待っていた西浦たちは、小道具を持つて移動を始めた。そこで予想外の人物と遭遇する。

「南雲くん？」

学生服ではなく、黒いパーカーを羽織り、革の手袋と黒縁の眼鏡を装着した冬夜と、階段ですれ違ったのだ。

「よう、これからだな」

冬夜の声は、いつになく明るい。僅かに笑んでいた。しかし、目だけ笑っていなかった。

「う、うん、午前の部の最後だから」

どことなく雰囲気の違い、西浦は何と云えばいいのか分からなかった。

「そうか、頑張れよ」

「え？」

冬夜の口から、あまりにも似合わない言葉が飛び出し、西浦は耳を疑う。

「あれだけ必死に頑張ってきたんだから、頑張れよって言うてんだ」
冬夜はそう言って、クラスメイトとは正反対の方向に進み始めた。
「ち、ちよつと南雲くんは？」

西浦は慌てて叫ぶも、冬夜が振り返ることはなかった。ひらひらと手を振り、そのまま去ってゆく。しかし、追って、説得している時間があるだろうか。いや、ある。西浦は冬夜の後を追うべく、階段を上り始めた。

「先に行つてて、すぐ追いつくから」

クラスメイトの返事を待たずに、西浦は駆け出す。遠くなつてゆく冬夜の背中を見失わないよう、必死に駆けた。

*

「待つて、南雲くん！」

西浦は冬夜の腕を掴むも、反射的に手を離してしまった。冬夜の無表情が、いつになく恐ろしく見えた。

「早く行けよ、遅れるぞ」

それだけ言つて、冬夜は奥の教室へと向かう。そこに逃げ道など無い。校舎の隅に二年一組の教室があるだけだった。

「最後、見届けてよ」

西浦は一瞬怯んだのを取り繕うように、再び冬夜の袖を掴んだ。しかし、その力は弱々しく、遠慮がちだった。

「無理だ」

「何で？」

即答する冬夜に、西浦は質問を浴びせる。何があっても、冬夜を連れていこう——西浦はそう心に決めていた。

「やることあるんだ」

さらに冬夜は返事をして、二年一組の教室に踏み込んだ。西浦もその後を追う。

「何を？」

「いいから、さっさと行け」

冬夜の口調が強まった。睨みつけるのとは少し違い、冷たい視線が西浦を射抜く。しかし、それに怯むことなく、西浦は「何で？」と尋ね続ける。

「納得する理由が必要か？ それを求めている間に、自分の身に危険が迫るとしても、それを知るべきだと思えるのか？」

最後の忠告だ、と冬夜は言った。冬夜は、西浦をまっすぐと見つめていた。西浦は不意にくすりと笑った。

「何だか、南雲くんと目を合わせたの、初めてな気がする」

「そんなことはどうでもいい。さっさと行け。じゃないと安全は保証できないぜ？」

「何をする気なの？」

西浦の質問に、冬夜は腕を組んで考える。やがて、彼は静かに口を開いた。

「害虫駆除かな」

毒をもって毒を制す、と冬夜は笑った。

「よく分からないよ」

「ああ、もうすぐ分かるよ」

タイムアップだ、と冬夜は西浦に歩み寄った。そして腕を引く。教室の隅まで引つ張っていき、そこで彼女の両肩を掴んだ。

「絶対に、そこを動くな。心配とか要らん。途中で入ってきたら、容赦なくぶっ飛ばす。分かったら、体育座りでもしてな」

冬夜は西浦の両肩に体重をかけて、無理矢理座らせる。西浦はワケが分からない様子で、眉をひそめていた。

その瞬間、教室の扉が開いた。冬夜は西浦に背を向けて、来場者に微笑みかける。

「よう、いらつしやい……って、随分と人数減ったみたいだが、どうかしたのか？」

そんな冬夜に、四人の男たちは憎々しげな視線を向ける。

「誰のせいだと思ってやる」

男は静かに口を開いた。威嚇するようで、低く唸るような声だった。

「勘違いされちゃ困る。先に手を出したのは、そっちなんだぜ？」

俺はリンチされている可哀想な友人を助けるために、仕方なく動いたんだ」

「それは先ほど聞いた。その件については純粹に悪いと思う。すまんかった」

しかし、と男は続けて言う。

「今回も正当防衛と言い張るつもりか？」

「間違っちゃいないはずだ。お前らは最初から俺を目当てでやってきたんだろう？ 撃退されても、文句は言えないだろうに」

「それでもやりすぎだと思わんのか」

男の言葉を、冬夜は軽く笑い飛ばす。

「一人をリンチして、今回も同じように複数でやってきたヤツらが何を言ってるんだよ。寝言か？ ちゃんと起きてから学校に来いよ」

冬夜は楽しそうに返すも、後ろで見えている西浦は冷や冷やしていた。このまま話だけで済むとは思えなかったのだ。

「まあ無差別に他の奴らを襲わなかったことに関しては、認めよう」
上から目線の冬夜に、男たちの殺気が膨らむ。

「まあ六人は戦闘不能にさせたし、二人は戦意喪失させた。残るは四人。ここまで来れば、後は作業だからな」

四人目を解放した後に、冬夜は四人の男たちが何やら怪しげな会話を行っているのを見つけた。そこで男たちにワザと見つかつて、事前に調べておいた三年の出し物、お化け屋敷に誘い込んだ。中は暗く、机などを並べて通路を作っているため、複雑な構造になっていた。そこで冬夜は四人に襲いかかり、一気に数を減らしたのであ

った。

暗闇は目撃されるリスクも少なく、冬夜のテリトリーだった。数的優位は一瞬で覆る。一人目はそつと背後に回り、首を締めて落とした。そこで三人に気づかれるも、冬夜はすぐさま闇の中に溶け込んだ。残された三人は、ようやく誘い込まれたことに気づき、お化け屋敷を抜けようとするも、背後から冬夜に襲われ、一人、また一人と狩られていった。最後の一人はお化け屋敷を抜け出た途端、暖簾から伸びてきた腕に引き戻された。その後、小さな悲鳴が漏れて、男が二度と姿を現すことはなかった。

つまり、残りが四人であることを冬夜は把握していた。そして、さつさと済ませようと、残りを誘い込んだのであった。お化け屋敷には少し申し訳ないことをしたな、と思う。しかし、罪悪感を抱くほどではなかった。

「まあ、話で解決できんか？」

散々、挑発するような言葉を並べてきた冬夜が、そんなことを言った。西浦も男たちも「こいつは何を言ってるんだ」と本気で眉をひそめた。

「ここまでやってきておいて、話で済ませられるとでも？」

男は唸るように吐いた。

「ああ、思ってるよ。八人はデモンストレーションさ。賢明なヤツなら引くだろう。既に人数の半分以上を削られてるんだぜ？」

それに、と冬夜は付け加える。

「話で済んだ方が、再発防止に繋がると思っし」

冬夜はにこりと微笑んだ。その笑みを見て、男たちは思わず息を飲む。

西浦は、それが見えない。じつと息を潜めて、状況を見守ることにできなかった。

「どうする？」と冬夜は気軽に尋ねた。

「分かっているのか？ 現状は四対一なんだぞ？」

男の返事は穏便な気配がなかった。冬夜は、それに首を傾げる。

「それがどうかしたか」

「それでも、お前は勝てる自信があるのか？」

「勝つ、ね……ちょっと違うかな。四対一だと手加減ができない。お前ら全員、壊すことになると思う」

冬夜は淀みの無い動作で、両側のポケットから刃を抜いた。

「まあ、お前らを壊すことが、俺の勝ちだと言えるなら、それでも構わない」

くるりと刃を回しながら、冬夜は言う。

「本当にいいんだね、最後まで壊しても」

冬夜の口が横に裂ける。今までに見たことのないほどの驚喜を滲ませた笑みだった。瞳の濁りが消え、鈍い光が宿る。

男たちは何も言えなかった。ただ、冬夜の瞳に吸い寄せられて、言葉を失っていた。空虚を思わせる瞳の色に、希望の全てを吸い込まれたかのようなだった。

「ねえ？」

冬夜が一歩進んだ。それに応じるように四人が一斉に後ろに下がった。四人が一人に圧倒されていた。

「俺のおもちやになつてくれるんだろう？」

冬夜は笑みを崩さぬまま、更に一歩進む。そのプレッシャーに耐えきれなくなつたのか、四人の内の一人が吠えた。そして冬夜に突っ込む。

「馬鹿野郎、来るなら全員で来い」

冬夜は一瞬で無表情になる。そして、刃を上にはり投げ、カウンター気味に拳を打ち込んだ。拳を振り抜き、男を突き放す。派手に転がり、机を巻き込みながらも、三人の足下でようやく止まった。そして落ちてきた刃を、冬夜は綺麗にキャッチする。

「俺が手加減しなくていいように、四人を呼んだんだ。全員で来いよ」

冬夜はいつまで経っても、かかってこない三人に言った。それでも反応はない。冬夜は呆れたようにため息を漏らし、近くにあった

机に腰をかけた。

「何なんだよ、お前ら。結局、何がしたいの？」

男たちは思う——何で俺らが怒られているんだ、と。自分たちだって仲間の敵を討つという理由があったはずなのだ。しかし、圧倒的な恐怖の前に、その心は折られてしまった。

一体、何のために、ここまで来たのだろうか——男たちは、その理由すらも恐怖に吞まれて見失っていた。

「用が無いなら、さっさと帰ってくれねえか？」

冬夜は刃をポケットにしまい、机に腰掛けたまま、ぶらぶらと足を振った。

やがて、男たちは、冬夜に背を向けて静かに教室を去っていった。
「おい」

最後の一人が出ていく間際に、冬夜が呼び止める。びっくりと肩を震わせながらも、男はゆっくりと振り返った。

「次はないからな」

何が楽しいのか、冬夜は笑みを浮かべて、手を振っていた。そして男たちは姿を消した。

「これにて、一件落着」

啞然としている西浦を一瞥して、冬夜は倒れた机を直し始めた。

どこが落着なんだ——西浦は内心で叫びつつも、それを表に出すことはなかった。ゆっくりと立ち上がって、冬夜と同じように机を直し始めた。

「おい、もう始まっちまうぜ？」

時計を見ると十一時十五分を回っていた。開演は、確か半からだっただけだ、と冬夜は思い返す。

「ん……間に合うと思う」

それより、と西浦は続けて言う。

「どうということなの？」

「だから害虫駆除だつて」

「どういう意味なの？」

「上村がリンチに遭って、入院したって知ってるか？」

朝礼で先生が言ってた、と西浦はうなづく。

「犯人、あいつらな」

「えっと、だからって——」

「詳しく説明するのは、面倒くさい」

最後の机を立てて、冬夜は小さく息を吐いた。

「頑張れよ、演劇」

「南雲くんは、どうするの？」

「はしやぎすぎた。目撃者も多いだろうし、とりあえず帰る」

そう言いながら、冬夜は眼鏡と手袋をズボンのポケットに突っ込んだ。

「演劇……見ていけないかな？」

「まだ言うか」

冬夜は苦笑を漏らす。先ほどと違って、妙な威圧感は無かった。

「……悪いが無理だな」

やがて冬夜が答えた。

「頑張つて成功させてくれ」

冬夜はそのまま静かに教室を後にした。下駄箱で靴を履くと、冬夜は自転車置き場の方に向かった。しかし、そこに冬夜の自転車は無かった。フェンスをよじ登って、学校の敷地を出た。

少し派手にやりすぎた。正門と裏門は恐らく教師が見張っているだろう。そこまで想定して、冬夜は学校から少し離れた雑貨店の駐輪場に自転車を置いていた。

冬夜は細道を進み、しばらくすると雑貨店が見えた。伊達眼鏡も手袋も、ここで揃えた。ただ、開店が十時だったので、少し出遅れたのであった。

自転車の鍵を外して、冬夜はペダルを踏む。帰路を悠々と帰ってゆく真つ黒な後ろ姿は、やがて見えなくなっていった。

行き先は孤島

結局、文化祭は多少のごたごたがあったものの、大きな問題はなく終えることができた——そういうことになっているらしい。それを聞いて、冬夜は胸を撫で下ろしたくもあり、また平和ボケしすぎだろう、と教師を笑い飛ばしたくもなかった。

冬夜の目撃情報はいくらかあったのだが、噂程度で落ち着いたらしい。学校側としても、生徒が問題を起こしたことにしたくないのか、必要以上に詮索することもなかった。

それから一ヶ月ほど経った。中間テストを終えて、時は六月——梅雨入りして、湿った空気独特の臭いにも慣れつつあった。

今は幸い、雨は降っていない。しかし、空を見上げると、今にも泣き出しそうな空模様だった。黒い雲が一面に広がり、日が遮られているせいか、肌寒い。

船を操縦する船員は、「一雨来るな」と呟いた。冬夜は、それを聞き逃さなかった。むしろ、聞き流していた方がよかったかもしれない。これからのことを考えると憂鬱になった。

冬夜はため息をついた。もう今日で何回目になるか分からない。それほど鬱々とした気持ちで、船に揺られていた。結果、島に着く頃には船酔いの症状が現れた。気分が悪く、地面がゆらゆらと上下に揺れているような感覚が続く。冬夜は何度も地面を強く踏み締めるも、更に気分が悪くなるだけだった。

そのうち治るさ、と船員は笑った。本当に短い渡航時間だったのだ、酔った冬夜を随分と珍しそうに見ていた。

あんたらは三半規管が馬鹿になってるんだよ——冬夜は小さく呟いて、船に背を向けた。しかし、帰る時に再び乗ることに気づくと、心底嫌そうに顔を歪めた。

「大丈夫？」

そんな冬夜の背中を手を添えながら、西浦は言った。大丈夫だ、

と短く返して、冬夜は自分の荷物を背負った。

「……やっぱり、来るんじゃないかった」

執拗に西浦に迫られて、冬夜は渋々ながらも課外学習に出てきた。しかし、出鼻を挫かれ、早くもギブアップ宣言の一手手前まで駒を進めていた。

全員が船から降りると、島の広場まで歩く。そこで点呼を行った。三百五十以上の同級生が、島の広場を埋め尽くす。船酔いと密集地の二重攻めで冬夜の吐き気は堪え難いものになりつつあった。

しかし、無情にも生徒代表が施設の方々に挨拶を始める。それに続いて、施設の代表者が話し始めた。もちろん、聞いている余裕がない冬夜は、終始空を見上げて吐き気を堪えていた。

それを終わると、今度は教師がマイクを手にとった。冬夜はいい加減にしろ、と立ち上がった。教師の制止も振り切つて、トイレの看板に向かって駆けてゆく。逃亡生活中でも、ここまで速く走れたことがあつただろうか、と冬夜は考えながら、和式のトイレに胃の中の物、すべてをぶちまけた。

吐き終えると、冬夜はふらりとトイレを抜けて、蛇口を求めた。

口に水を含み、酸味と一緒に吐き出す。それを何度か繰り返して、冬夜は顔を上げた。青い顔が鏡に映った。

「本当に……先が思いやられるよ」

冬夜にしては珍しく弱々しい声で呟いた。

一日目の昼から夕方にかけて、本来はマリンスポーツを体験する予定だった。しかし、冬夜は「健康上の都合で」と教師に告げて、コテージで寝て過ごした。実際、体調が悪かったなので、西浦の嘘宣言もなかった。

静かなコテージの中で、冬夜はやってられん、と呟いた。やがて意識は闇に吞まれていく。冬夜はそれに抗うつもりもなかった。眠った方が楽になれるはずだ。眠気に身を委ねて、冬夜は静かに目を閉じた。

*

やがて、冬夜は目を覚ました。あれほど静かだったコテージに喧噪が訪れている。何かと冬夜が身を起すと、コテージで一緒に泊まる十人のクラスメイトが着替えていた。

「あ、悪い。起こしたか？」

一人が冬夜が起きていることに気づいて、言った。

「いや、勝手に目覚めた」

冬夜はゆるゆると頭を横に振って、状態を確かめる。揺れは治まり、吐き気も随分とマシになっていた。

「大丈夫か？」

クラスメイトの言葉に冬夜はうなづき、ベッドから抜け出た。

「これから夕飯だけど、どうする？」

そんなに時間が経っていたのか、と冬夜は小さくため息をついた。

「大丈夫だ、行く」

コテージを出て、食堂のある本館へと向かう。施設の収容人数の問題上、男子は点在するコテージ、女子は本館の部屋を借りることになっていた。

本館に向かう途中、何人かの男子が大きな声で言う。

「夜、本館に忍び込もうぜ」

その呼びかけに何人かが同意して、妙な熱気に包まれた。そこから抜け出すように、冬夜は自然と早足になる。馬鹿らしい、と小さく呟くと、何人かのクラスメイトが冬夜の横を全力疾走で駆け抜けていった。その後を教師が喚き散らしながら追いかける。どうやら先ほどの侵入計画がバレたらしかった。追われるクラスメイトと追う教師。それを横目で見ながら、冬夜は小さく息を漏らした。

*

十九時ギリギリまで冬夜は食堂に残っていた。バイキング形式で、

好きなだけ食事を取ってよかったからだ。吐いた分を取り戻すように、冬夜はタンパク質を中心に食らう。むしろ、これが目的でやってきたのだから、食わねばなるまい。今朝も家を出る前に、しっかりとトレーニングを行ってきた。本来は運動後すぐにタンパク質を摂取したかったが、そこまでの贅沢は言うまい。自らの傷ついた筋肉を癒すために、冬夜は時間ギリギリまで食べ続けた。

その後、冬夜はコテージに戻り、しばらくクラスメイトの行っているランプを眺めていた。冬夜はそれに加わることもなく、こっそりとコテージを抜け出た。すると目の前をいくつかの影が通っていった。冬夜が目を凝らすと、同級生であることだけは分かった。

「よう、南雲。お前も行くのか？」

どこことなく聞き覚えのある声に、冬夜はどこに行くんだ、と尋ね返す。

「何だ、違うのか……今宵、俺らは伝説になる」

男は本館の方を指さして言った。ああ、馬鹿か、と冬夜は静かに呟いた。

そこで冬夜は思い出す。彼は一年生の間、サッカー部と一緒に汗を流し、現在は同じクラスメイトの斉藤だった。気さくで明るく、上村とはまた違った意味で、クラスでも部活でも中心人物だった。彼と冬夜は宿泊するコテージが違うので、隣のコテージを今まさに抜けてきたところなのだろう。

「俺は行かん」

「そうか、臆病者め」

勝手に言ってる、と冬夜は背を向けて、コテージの裏側へと回った。やがて、人の気配は無くなり、静かになった。あんなに音を立てていたら、一発で見つかるだろうな、と冬夜は苦笑を漏らした。

コテージの裏に回ると、そこはテラスになっていた。薄いカーテンから漏れる光がテラスに降り注いでいるため、程良い明るさがあった。そこで軽くストレッチを行ってから、両手を着いた。そして、ゆっくりと腕立て伏せを始める。一定の回数になると腹筋に移り、

背筋も行った。二セット目を終えて、三セット目に移る。息が乱れ、額から汗が滝のように流れていった。それでも冬夜は四セット目に移る。

「おい」

四セット目の腹筋で、不意に声がした。鋭い光を向けられ、冬夜は手で遮った。

「もうすぐ就寝時間だぞ……って、お前何してんだ？」

教師は汗だくの冬夜を見て、怪訝そうに首を傾げる。

「……これ、終わったら、戻ります」

「ああ、そういうことか。さっさと済ませろよ」

教師は寛大な判断で、他のコテージの見回りに向かった。全身の疲労感とはつきり言って物足りない。しかし、仕方がない、と冬夜は四セット目を終わらせて、コテージに戻った。そのままシャワーを浴び、就寝時間を迎える。教師が再び戻ってきたのか、暗いコテージの中に懐中電灯の光が躍る。しん、と静まったコテージ内を確かめると、懐中電灯の光は遠ざかった。そして、一斉にクラスメイトが息を吐く。

「行ったか？」と誰かが小さく呟く。誰かがベッドを這い出て、窓から外の様子を伺った。やがて、一人が「大丈夫だ」と声を出すと、何人もが一斉に起きあがった。もちろん、冬夜はベッドの中にいた。「勇者、斉藤からの連絡が届いた」

え、あいつらたどり着いたの？ と冬夜は思わず身を起こした。

そして、「しつかりしりよ、教師」と思わず呟いた。

「現在、女子を引き連れて、こちらに帰還しているらしい……皆、意味は分かるな？」

暗闇の中、何人かがうなづいた。

「これより計画通り、山頂にある神社まで肝試し大会を行う」

よっしゃあ、と男子の歓喜の聲が上がった。その光景を冬夜はぼんやりと見つめていた。そして扉が開かれて、人の気配が遠ざかってゆく。冬夜はコテージに残った人の気配を探る。冬夜を含めて三

人だった。他の七人は、どうやら冒険の旅に出たらしかった。

*

冬夜は怒鳴り声で目覚めた。一体何事だ、と一瞬で跳ね起きて身構える。

「おい、七人もいないぞ！ どうしたんだ！」

ああ、その件か、と冬夜は頭を掻き、緊張の糸を緩めた。

「さあ、知りませんよ」

寝てたし、と残る二人に助け船を出してやった。首が落ちるんじゃないかと思うほど、二人は全力で首を縦に振った。

「どこに行きやがった……まあいい、もうすぐ朝礼だ、本館に集まれ」

教師は慌てて別のコテージに駆けていった。そして冬夜は「何じやこりゃあ！」と叫ぶ教師の声を聞いた。

後に冬夜は耳にする。隣のコテージには誰一人いなかったらしい。これも勇者の牽引力なのだろうか、と冬夜は小さく笑った。

*

笑いは一瞬にして払拭される。異常な光景が広がっていた。

ほぼ満席になるはずの食堂を後ろから眺めると、空席が目立ったのだ。合計するとークラス分を超える人数がいらないのではないだろうか。ここまで来ると、勇者の力は実在するのではないかと思えてきた。

しかし、同時に湧き出た疑問も無視できなかった——何故、朝になっても戻ってこないのか、と。こうも公になってしまえば、夜に忍び込んだ意味も無い。

教師は慌ただしく食堂を出入りしていた。その顔にも焦りの色が浮かぶ。冗談では済まなくなってきたらしい。冬夜自身のクラスも

男子は合計で七人しかいない。全体の半分だけだった。コテージに残った三名に、教師に見つかって、一晚正座の刑に処せられた者が四名だった。正座組の四人の顔はやつれ、捕虜生活をようやく抜け出した帰還兵を思わせた。

そんな冗談を抱くぐらいに余裕があったせいか、冬夜自身の危機感是非常に薄いものであった。

そして、教師数名と施設の職員数名で島全体を搜索することになった。二日目の体験学習は、全員が見つかるまで中止となった。冬夜は朝食をゆつくりと頬張りながら、不意に天井を見上げる。騒がしい中、屋根を打つ何かの音を確かに捉えたのだ。

「雨、か」

「え、雨？」

すぐ隣から反応があり、冬夜は視線を隣に戻す。いつの間にか西浦の姿があつた。彼女は、どうやら勇者の隊列に加わらなかつたらしい。

「雨が降ってきたな」

「え、本当？」

冬夜は静かにうなづいた。喧噪の中、断続的に続く音は、やがて激しさを増していく。いつしか誰もが聞き取れるぐらいの雨音になつていた。

「本当に雨、降ってきたね」

西浦は感心したように、天井を見上げていた。

「いや、耳を澄ませば、誰でも分かつたはずだ。ほら、皆、お喋りに夢中だろ？」

冬夜は、既に冷めてしまった肉を口に放り込んだ。

「よく食べるなあ」

西浦は冬夜の皿を見て、呟いた。

「食わないと大きくならないからな」

次に冬夜は小魚を一匹、口に放り込んだ。

「ふうん……でも、そんなに食べて太らない？」

私は脂肪が天敵だし、と西浦は遠くを見つめながら呟いた。

「運動すればいいだろう」

「えー……疲れるし」

「俺が部活を辞めると言ったとき、お前にだけは反論されなくなっただけ」

「うっ、と言葉に詰まり、西浦は視線を逸らした。冗談だ、と冬夜は付け足した。」

それから三十分ほど経ち、朝食が下げられた。冬夜の腹も十分に満たされていたので、眠そうに頬杖をついていた。

「ねえ、皆見つかるかなあ？」

数秒してから自分が問いかけられたのだと、冬夜は気づく。

「……ああ、大丈夫だろ」

心配するだけ無駄だ、と冬夜は笑った。

「あの斉藤が無事じゃない光景を、俺は想像できんな」

「うん、まあ……確かに」

西浦も苦笑を漏らした。

「昨晚、私たちの部屋にもやってきたんだよ。凄いやね、先生たちがずっと巡回してたのに、その僅かな隙を縫うようにして、やってきたんだって」

「へえ、と冬夜は返す。あまりに雑な返事に、西浦は不機嫌そうに頬を膨らませた。」

「おーい、南雲。ちゃんと、かなみの話を聞いてやってよね。後で、とぼつちり受けるの私らなんだから」

他の女子が楽しそうに言った。冬夜は大袈裟に肩を竦めてみせる。

「ちゃんと聞いているさ」

「本当？」

「ああ、もちろん。勇者、斉藤が教師陣営の包囲網をくぐり抜けて、お城の宝物にたどり着いたんだらう？」

「まあそういうことだけ」

西浦は、そっぽを向いた。

「何で南雲くんは来なかったの？」

「まだ体調が悪かったから」

「夕飯、あんなに食べてたのに？」

「食べて治そうとした」

嘘だ、と西浦ははつきりと断言する。そうだった、こいつ、感覚的に嘘を見抜くんだった、と冬夜は思い出す。西浦はじつと冬夜をのぞき込んでいた。それに言いしれぬプレッシャーを感じ、冬夜は息を飲む。

「行かなかった理由なんて、どうでもいいだろ」

「……まあそうだけどさー」

どこか納得がいかないと言った様子で、西浦はしばらく不機嫌だった。

*

いつの間にか冬夜は眠っていたらしく、机からゆっくりと顔を上げた。目をこすり、時計を探す。あれから一時間も経っていた。冬夜は背伸びをして、周囲を見渡した。食堂を満たす喧噪に衰えはない。人一人あたり、どれほど喋るネタを持っているのだろうか、と真剣に考えた。

「おはよ」と声がかかる。対面の席に座っている女子や、隣の西浦だった。何とも不思議な心地になりながらも、冬夜は返す。

「おはよう……なあ、まだ帰ってこないのか、搜索に出かけた人」

「ん、そうみたいだね……どうしたんだろ」

西浦の表情は、明らかに不安の色が濃くなっていた。それを見て、冬夜は小さく息を吐く。そして腰を上げた。

「え、ちよつと南雲くん？」

西浦の呼びかけを無視して、机と机の合間を縫うように進んでゆく。向かう先は職員と教師が集まっている大きなテーブルだった。

「おい、席に戻ってろ」

一人の教師が冬夜に気づき、言った。しかし、冬夜は更にテープルに近づく。

「何かあったんですよね」

教師の焦り具合を見て、冬夜は一瞬で察知する。

「……連絡、つかなくなったとか？」

「この雨だ、携帯が故障したのかもしれない」

ふうん、と冬夜はワザとらしく、うなづいてみせた。

「いくらも携帯があつて、その全てが故障ですか」

冬夜の記憶が正しければ、教師一人一つの携帯を持っていた。

首から下げていた分厚い携帯を思い出す。そして、搜索に出ていった教師は五人——つまり、学校の経費で買った携帯五台を雨で壊してしまったことになる。そんなに間抜けだろうか、と冬夜は考えた。

「コール音は鳴るんですか？」

「それを知つて、どうする？」

教師の不機嫌そうな声に、冬夜はワザとらしく肩を竦めながら答える。

「携帯の生死ぐらいは分かります。コール音が鳴ったら、少なくとも携帯は壊れていない。本人が出られない状況にある、と考えるべきです。コール音が鳴らなかったときは、携帯そのものに電波が届かなかつたとき——つまり、携帯の電源が落ちているか、壊れている、もしくは地形的な問題で電波が遮られているのかもしれないですね」

そもそも孤島で携帯が繋がるのだろうか、と冬夜は首を傾げる。この頃の携帯普及率は高くない。そのため、中継のアンテナの数も圧倒的に少なかった。地上にいても電波の届かないところがあるぐら이다。

ちらりと机に置いてある携帯を見やった。辛うじて電波を拾っているのか、一本だけアンテナが立っていた。

「コール音は——」

やがて、一人の教師が小さく呟いた。

「鳴ってました」

異形

何かが起きていることだけは分かった。冬夜は激しい雨の中、コテージに帰りながら考えた。恐らく、斉藤たちと捜索隊が帰ってこないのは、何かしらの関連があるだろう。それは当然だ、と冬夜は苛立つて頭を掻いた。

無視していた胸騒ぎが酷くなってくる。ほんの少し昔は、簡単に感情を捨てることができたのに、最近になって感情がヘドロのように絡み付いてくるようになった。それを振り払うように、冬夜は首を横に振った。

傘をさしていても、膝から下はぐつしよりと濡れ、靴は妙な重さを主張していた。

一度コテージに戻って、そこで待機、との指示が出た。この状況に加えて、容赦なく降り注ぐ雨のためか、外に人の気配はない。シヤワーで身体を暖めてから、窓の外を覗いた。

「何があっただろうね」

クラスメイトが不安そうに呟いた。もう一人も落ち着きがなく、膝を小刻みに震わせていた。

「さあな」

捜索隊との連絡すらつかなかった、とは言わなかった。無駄に不安を煽っても仕方ないからだ。

コテージ内に静寂が広がる。屋根や地面を叩く雨音だけが、長々と続いた。

しばらくすると雨音が弱まった。冬夜は窓際に寄って、外を眺めた。やはり、人の気配は無かった。

今なら抜け出ても咎められることはあるまい——冬夜は鞆から刃を抜き出して、こつそりとポケットに放り込む。上に黒いパーカーを羽織り、濡れた靴を履いた。

「どこか行くの？」

「隣のコテージの様子を見てくる」

隣にはクラスメイトの四人がいるはずだ。実際はそれだけでなく、あちこちのコテージを回ってみるつもりだった。

冬夜は木の扉を叩く。しばらくして返事があり、扉が開いた。

「南雲か、どうしたんだ？」

「……いや、何でもない」

大丈夫か、と冬夜は胸を撫で下ろして、もう一つ隣のコテージに向かった。そこは二組の男子がいるはずだ。更に奥にコテージが並んでおり、三組、四組、と順番にコテージを使っている。そこで、ふと足が止まる。目の前にしたコテージに違和感があったのだ。

明かりがついていない。冬夜は恐る恐る扉に近づき、ノブを引いた。鍵はかかっていなかった。そっと開けて中に忍び込むも、雨で濡れた靴がぐじゅりと鳴いた。一瞬にして緊張感が全身を満たす。誰かがいたら完全にバレていた——否、誰かがいる。冬夜は確信を持って、二本の刃を抜いた。フローリングに気を遣うこともなく、土足で踏み込む。壁に背を沿わせ、ゆっくりとコテージの中を見渡した。しかし、先ほど感じた気配は無くなっていた。

冬夜の頬を一筋の汗が流れた。それを拭わずに、冬夜は来た道をゆっくりと戻る。コテージの外に出て、更に奥のコテージに目をやった。同じように明かりが落ちていた。

まずい、と冬夜は駆けだした。先ほど四人のクラスメイトがいるコテージに向かって。数秒でコテージの入り口にたどり着き、扉を開いた。その瞬間、明かりが消えた。

「うわ、何だ!？」

明かりが消えたことと、冬夜が突然入ってきたことで、コテージ内は軽いパニックに陥った。しかし、まだ無事だった、と冬夜は胸を撫で下ろす。

「何だ……南雲か」

「黙ってる」

冬夜は全力で飛び、扉から大きく距離を取った。何かが来る、と

直感が告げ、冬夜の背筋に悪寒が走ったのだ。

扉がゆっくりと開き、蝶番が奇妙な声で鳴いた。

「誰だ、てめえ」

冬夜は刃を構えたまま言った。しかし、返事はない。ただ、そこに誰かがいる気配だけは確かにあった。

「誰だって聞いてんだよ」

「おい、南雲。ちゃんと扉が閉まってなかっただけじゃ——」

「絶対に違うな。俺はドアノブが回るのを、この目で見た」

冬夜は扉から目を離すことなく、答えた。不意に気配が動いたコテージの側面を通り、後ろに回ってきた。コテージの裏側はテラスになっており、大きな窓がある——つまり、相手は侵入経路を変更したのだ。

それを察知して、冬夜は窓際にいた二人を引つ張った。それと同時に窓ガラスが派手な音を立てて、砕けた。宙を舞うガラスの破片の輝きと一緒に、一陣の影が走る。赤い何かコテージ内に侵入したのを、冬夜は見逃さなかった。

「つらあ！」

冬夜は、その影に蹴りを叩き込んだ。カウンター気味に入った蹴り足には、じんと痺れた。しかし、即座に構え直す。カーテンの向こうで揺れる影は即座に立ってみせたのだ。

瞬間的で、完全に姿を視認することはできなかった。しかし、確実に分かることが一つだけあった。

「お前だな」

隣のコテージに漂う僅かな血の臭いで、何かが起きていることに気づいた。そして、目の前にいる影が放つ強烈な死臭に、確信する——こいつが犯人だ、と。

「な、何だよ、これええええ！」

クラスメイトの一人が叫んで、扉から出ていった。不意にカーテンの影が消えた。しまった、と思うも遅かった。あの影は逃げた一人を狙いに行ったのだ。

「死にたくなかったら、俺についてこい！」

残る三人に叫んで、冬夜はコテージを出た。そして視界に飛び込んだ光景に絶句する。逃げた一人の首筋に噛みついた、あれは何だ——背骨は凍ってしまったかのように、固く冷たい。しかし、脳髄は冷えず、思考はまったくまとまらなかった。

それは人の形をしているも、表面は血の色のように真っ赤で、てらと光っていた。クラスメイトの首筋を大きな口で捉え、その傍にぎよろりと動く両眼があった。白目と黒目があるも全体像が異形で、冬夜は「化け物」と小さく呟いた。

「俺が全力で食い止めるから、お前らは逃げろ」

後ろの三人に言って、冬夜は地を蹴った。異形に飛びかかり、刃を振るう。しかし、それは空を切るだけだった。速い——冬夜は何とか振り返って、刃を交差させた。そこに異形の手が突っ込み、綺麗に裂けた。異形は叫ぶ。目の前で叫ばれた冬夜は、思わず顔をしかめて、後ろに飛ぶ。その際に刃を両方とも振り抜き、肘あたりまで肉を削り取った。更に吠えるも、既に距離を取った冬夜は何食わぬ顔で刃を構える。

「行け！」

それと同時に冬夜は吠えた。三人は一瞬、反応が遅れながらも、駆け抜けていった。遠ざかる足音を聞いて、冬夜はひとまず息を吐く——これで足手まといはいなくなった、と。

「何人、殺しやがった？」

返事はない。

「おい、言葉が通じねえのか？」

言葉が通じない相手に我ながら愚かな問いかけた、と冬夜は思う。しかし、念のために尋ねてみた。しかし、予想通り返事はなかった。「はん、言語を解する知能もないってのか」

冬夜は鼻で笑い、地を蹴った。もう殺し合うしかあるまい。

「うるさい、日本語ぐらいは分かる」

異形は流ちょうな日本語でようやく返した。冬夜は足を止める。

安い挑発に乗ってくるもんだ、と冬夜は少しおかしくなって吹き出した。

「……何がおかしい」

「いや、別に」と冬夜は返した。しかし、冬夜の振るう刃は、ことごとく空を切った。それでも冬夜は動きをやめない。

「……その程度で、僕に勝つつもりなのかい？」

「ん、まだまだペース上げれるけど？」

冬夜は軽やかに地を踏む。先ほどより更に速いテンポを刻んでいた。

「ほう、人の子にしては、やるじゃないか」

「まだ余裕か。なら、もう少し」

更に冬夜は続けざまに刃を振るった。楽しそうに刃を振るうも、やがて冬夜の表情から余裕が消えてゆく。

やがて、冬夜の両手が止まる。そして、肩を上下させながら、冬夜は荒い息をついた。結局、一発も相手の身体に刃は届かなかった。

「……そこまでか」

異形は残念そうに呟く。そして、冬夜に迫った。その直線的な動きに合わせるように、冬夜は刃を突き出す。異形は刃の寸前で止まり、冬夜の喉元に伸ばしていた手を引っ込めた。

「まだ、そんな反応ができるんだ」

「……チツ、今ので決めたかったんだが」

先ほどまでの荒い息は嘘だったかのように整っている。実際、嘘だったのだろう。異形は、それを見抜いたのか、「狡いね」と漏らした。それに冬夜は無表情でうなづく。

「化け物相手に余裕を見せられるほど、俺は強くないんでな」

ぴくりと異形の肌が動いた。分かりやすいな、と冬夜は内心で微笑んだ。

「もつと自信を持てばいいのに。単体で、そこまでの戦力を有する人の子と出会ったのは初めてだ」

「まるで自分は人じゃないみたいだなセリフだな」

「人の子も言つたじゃないか、化け物と」

自嘲するように異形は言った。それと同時に地を蹴る。今度は横に飛び、異形の姿は木々の中に消えていった。しかし、気配が遠ざかることはない。異形は、ここで冬夜を殺す気なのだろう。

かさり、と後ろの葉が揺れた。しかし、冬夜は動かない。ぎし、と木の枝が軋む。その音に反応して、冬夜は地を蹴った。そのまま前転して、即座に身を起こす。それと同時に振り返って、再び刃を構えた。先ほど冬夜が構えていた場所に異形の姿があつた。

「騙されないんだね」

異形は肩を落しながら呟いた。恐らく、一回目の葉擦れの音のことを言っているのだろう、と冬夜は理解した。

「どうせ、木の上から小石でも投げたんだろ？」

「うん、正解」と異形はうなづいた。そこで冬夜は構えを解いた。

「なあ、何故、俺らを襲うんだ」

「ん、襲うことに理由が必要？」

異形は自らの身体を見せつけるように、腕を広げてみせた。

「だから、人の子は皆、僕を化け物と呼んだんだ」

「そうか、残念だ」と言いつつ、冬夜は微笑んでいた。

「言つてることと表情が一致してないよ」

異形の突っ込みに、冬夜は微笑みは苦笑に変わった。

「結局、俺も人の子じゃないってことさ」

染み着いた技術は、すべて殺人へと向かう。人を殺す鬼だ、と冬夜は呟いた。

「殺人鬼ね」

異形の反応は軽かった。特に気に留めている様子すらない。

「なら、同類か」

「……は？」

異形の言葉に、冬夜は首を傾げる。

「僕は吸血鬼だ。血を吸えばいい。死体の血でも構わない。だから、君が人の子を殺し、僕はその死体から血を啜ればいい。鬼同士

が殺し合う必要なんて無いんだよ」

冬夜の考えていた結果とは、かなり違った方向で和解の話が進みつつある。話の通じる相手であることが分かり、冬夜は少し安心した。しかし、異形の提案を飲むことは難しい。冬夜は逡巡もせず、首を横に振った。

「悪いが、その提案には乗れないな」

「人を殺す鬼のくせに、人の子を守るつもりなの？ 鬼のくせに、君は人の子を恨んでないの？ 虐げられてこなかったの？」

異形——吸血鬼の言葉が胸に突き刺さった。それは重く、心を縦に裂いてゆく。そして、奥にあつた本音が漏れだした。

「憎んでいる、妬んでいる、恨んでる」

噛みしめた奥歯が、ぎしりと鳴った。何故こんなに力んでいるのだろう、と冬夜は雨で冷えた頭で考える。何かが冬夜の中でせめぎ合っていることに、ようやく気づいた。しかし、何と何がせめぎ合っているのかまでは分からなかった。

いつになく感情をコントロールできず、冬夜は胸が熱くなるのを感じていた。堪えきれぬ感情は、地を蹴る足に伝わる。冬夜は考えもなしに、全力で突進した。

「……ッ」

吸血鬼が息を飲んだ。その目がぎょろりと動く。その瞳には、焦りの色が浮かんでいた。しかし、そんなことはどうでもいい——冬夜の頭の中は真っ白になった。

腹の底から吠え、一瞬にして声が掠れた。しかし、獣の如き敏捷性で、吸血鬼を追いつめていく。

「残念、だよッ！」

吸血鬼は両腕を振るい、冬夜も同じように刃を振るった。

びちゃり、と水たまりに何かが落ちた。赤くてらてらとした表面の何かが転がってゆく。

「ぐっ……クッ！」

吸血鬼は再び木々の中に姿を消していった。気配はどんどん遠く

なつてゆく。それを追うこともなく、冬夜は雨の中に呆然と立ち尽くした。そして、遠くなつてゆく吸血鬼の気配の方に目をやりながら、呟く。

「俺らつて、一体何なんだろうな」

やがて、転がっていた吸血鬼の赤い腕は、蒸発するように煙を吐き、消えてしまった。

*

「何があつたのか、事実を教えてくれ」

教師は青い顔のまま言った。

「あれは自分のことを吸血鬼と言いました」

それが事実なのだ。しかし、教師は拳を握り、肩を震わせている。額に浮かんだ青筋を見て、噴火寸前だな、と冬夜は思った。

「あのな、南雲。そんなのが本当にいたら、今の日本はヤバいことになっているぞ？」

「でしょうね」

あれは殺さないと――冬夜は無表情で呟く。それを聞いて、教師は顔を引きつらせた。

「いい加減にしろ！」

教師は力任せに机を叩き、食堂の喧噪が一瞬にして消え去った。背中に多数の視線を感じながら、冬夜はワザとらしく肩を竦めた。

「本当のことを話せ。三組は半分、二組は男子全員が消えてるんだ。もう冗談で済むような状態は、とっくに過ぎてるんだ」

「だから、冗談かどうかは、俺と一緒にいた三名に聞いてみるよ。確かに化け物がいたんだ」

これ以上は何を言っても無駄だ、と冬夜は教師に背を向ける。教師に呼ばれても、冬夜は無視した。自分の席に腰を下ろして、一息吐く。

「信じてくれないだろ？」

逃がした三名の内の一人が、冬夜に向かって小さい声で話しかけた。

「そつだな」

冬夜は気を悪くした様子もなく、いつもの無表情で小さくため息をついた。

「なあ嘘発見機」

「名前で呼んで！」

西浦は顔を真つ赤にさせて抗議の声をあげた。それを無視して、冬夜は口を開く。

「吸血鬼はいた」

「…… 本当なんだね」

西浦は目を丸くした。一組を中心に喧噪が広がってゆく。「うるさい」と教師の叱責が、食堂に響きわたった。

「ただ斬り落とした腕が、その場で再生するような最上級の化け物じゃないだけ、壊すのも楽だろ」

少し嫌な記憶が冬夜の中で蘇る。臭い物には即座に蓋をした。

ただ——と冬夜は続けて言う。

「一本、折れちまった」

冬夜はポケットから刃を取り出すも、もはや刃と呼んでいいのか分からない代物になりはてていた。半分ほどで綺麗に折れており、武器としての役目を果たさないことだけは、確かだった。

「結構、速いんだよな、あいつ。受け流しきれなかった」

まるで友達のことを言うように、冬夜の口調は軽い。何かいい武器無いか、と天井を見つめ、冬夜は言った。そんな様子に、クラスメイトは顔を引きつらせるばかりだった。

「前から思ってたんだけどさ。何で、あんなに強いのか？」

「確かに…… 何で、あんなのと戦えたんだ？」

西浦と助けた男子の質問に、冬夜はしばらく考える。

「自然と身体が動くんだよな」

嘘ではない。逃亡生活の中で磨き続けられた技術は、いつしか身

体に染み込み、反射的に迎撃してしまうのだ。

「むう……嘘じゃない」

西浦は納得がいかない様子で、しばらく考え込む。恐らく、嘘のつきにくい質問を考えてるのだろう。やがて、彼女は顔を上げた。

「どんな経験をしたら、そんなに強くなれるの？」

「警察に追い回されてたら、勝手に強くなるぜ」

それも嘘ではない。冬夜の周りにいるクラスメイトは再び顔を引きつらせた。

質問攻めも面倒くさくなってきたので、冬夜は「寝る」と宣言して瞼を下ろした。

自分は鬼だ。たくさんの人を殺してきた。それは確かな事実だった。しかし、今はどっつかず——人の子と鬼の狭間を行ったり来たりと繰り返していた。実際、人の子として生まれ、後に鬼を心に宿したのだろう。そして、冬夜は自らの感情を殺し、人を殺す鬼となった。

そんな自分が何故、人を守るために戦っているのだろうか——冬夜は自問する。文化祭の時も、そうだった。気の赴くままに人を壊し、結果的に殺してゆくのが自分ではなかったか。

冬夜は分からなかった。湧いてきた感情は認知する前に消し去られる。過去の自分に対し、どんな感情を抱いているのか分からなかった。そして現状の自分に対しても、それは同じだった。

やがて、本当に眠気が訪れる。それに身を委ね、冬夜の意識は闇に底に沈んでいった。その場で思ったとおりに動けばいい——それだけが唯一の答えだった。

*

不意に悲鳴が響き渡った。冬夜は一瞬で起きあがり、声の方角を探った。

「南雲くん、待って！」

すぐ横に座っていた西浦が叫ぶ。しかし、それを振り切って、冬夜は駆けだした。食堂の扉を乱暴に開けて、廊下に出る。血の臭いが微かに鼻をついた。そう遠くはない。冬夜はポケットから刃を抜きながら、廊下を慎重に進んだ。

助けを求める声はない。それは被害者が既に絶命している可能性を示した。

「おい、南雲、待たんか！」

冬夜の後を追って、一人の教師がやってきた。冬夜は肩を掴まれるも、それを一瞬で振りほどいた。緊張のためか、一筋の汗が冬夜の額から流れ落ちた。

「死にたくなかったら離れてろ」

冬夜は教師を睨みつけた。それに気圧されてか、教師の瞳に怯えが浮かんだ。

血の臭いが酷くなる。冬夜は再び刃を構えて、ゆっくりと進んだ。後ろの教師が、がみがみと怒鳴っているのを「うるさい」と一蹴する。更に教師の叱責が酷くなった。

「うるせえって言うてんだよ。音が拾えねえ。もし、か細い声で助けを求めていたら、どうする？ それも聞こえないだろうが」

既に生きている可能性は低いものの、教師を黙らせるには良い理由だった。それ以降、教師は口をつぐんだ。

しばらく、廊下を進むと、角に差し掛かった。冬夜は壁に身を寄せて、気配を探る。水の滴る音が、遠くから聞こえてくる。それとは別に何かの足音が聞こえた。湿り気の酷い足音で、べちゃりべちゃりと不快な音だった。そこで冬夜は刃を構え直し、廊下の中央に躍り出た。

予想通りの光景だった。赤くてらてらとした表皮の異形が、一人の少女の首に噛みついていていた。少女の顔は青く、瞳に生氣はない。やはり、と冬夜は小さく息を吐いた。

「……また君か」

異形の吸血鬼は、ため息をついた。

「それは俺にも言わせてほしいな」

冬夜も大袈裟に肩を竦めてみせる。

「な、何だ、お前はああ!」

冬夜の後ろについてきていた教師が吠えた。そこに教師の威厳はない。異形に対する畏怖だけが滲み出ていた。

「もう少し待ってね。すぐ吸い終わるから」

教師の言葉を見殺して、吸血鬼はじゅるりと音を立てた。びくんと少女の身体が跳ねる。そして僅かに漏れた声を、冬夜は確かに聞き取った——助けて、と。

「待てねえな」

たん、と冬夜は廊下を蹴る。一瞬で吸血鬼との距離を無にし、刃を振るう。吸血鬼は少女の首筋から離れ、天井に張り付いた。冬夜の刃は少女を傷つけることなく、ギリギリで止まった。

少女は支えを失い、倒れてゆく。冬夜は、それを左手だけで受け止めて、勢いを殺す。そして、廊下に転がした。乱雑な動作だったが、そのまま倒れて頭を打つようなことはなかった。

右手に握った刃は、ずっと吸血鬼の方に向いていた。

「……何だ、斬らないんだ」

僕の時みたいにな、と吸血鬼はつまらなさそうに言う。

「君は本当に鬼なの？ ただの人の子にしか見えないんだけど」

「さあな、俺もよく分からなくなってきたところだ」

冬夜は思わず苦笑を漏らした。腕を斬り落とされても、冬夜を同類と呼べる吸血鬼の器は大きいのもかもしれない。

しばらく睨み合いが続くも、吸血鬼が落ちてくる気配はない。重力を軽やかに無視して、天井に張り付いたままだった。

「先生」と冬夜は振り返らないまま、後ろの気配を呼んだ。

「この子を頼む」

「そんな隙を与えと思う」

異形の口が歪んだ。それを見ても、冬夜は顔色一つ変えない。「作るさ」

言つと同時に、冬夜は唯一の武器である刃を、吸血鬼に向かつて投げた。それを吸血鬼は軽やかに躲し、刃は天井に突き刺さった。

「今のは危なかった。まさか投げてくるとは思わなかったよ」

くるりと空中で一回転して、吸血鬼は着地した。

「何が危なかった、だ。余裕じゃねえか」

冬夜は既に踏み出していた。着地した吸血鬼に蹴りを放つ。それも躲されるも、その勢いを利用して、更に逆の足を振るう。少し型が崩れた後ろ回し蹴りだった。

吸血鬼は片腕で、それを防ぐも、蹴りの勢いに押されて身体が後ろに流れた。しかし、冬夜も無理な体勢から後ろ回し蹴りを放つため、追撃を加えることができなかった。

お互いの距離が開き、二人は体勢を立て直した。

「それじゃ、僕に勝てないよ」

吸血鬼は笑う。しかし、冬夜は無表情のままで、答えなかった。

じつと睨み合いが続く。どうしたものか、と冬夜は考える。先ほど隙を作ったのに、教師が動いた気配は無かった。そして、まだ近いところに少女も倒れている。極めつけは武器がない、と来た。詰みに近い状況だった。

それにも関わらず、冬夜は落ち着いていた。今度こそ、ちゃんと死ねるかな——その思いは冬夜の中に沈んでいき、不思議な安心感をもたらした。

しかし、吸血鬼は再び飛び上がって、蜘蛛のように天井に張り付いた。そのまま、下りてこようとはしない。

冬夜は首を傾げ、口を開く。

「丸腰なんだが？」

「君のことだ、何の考えもなしに武器を捨てたりしないだろう？」
勘ぐりすぎだ、と返すも、吸血鬼は下りてこない。天井に張り付いたまま、ぎょろりと動く両眼で冬夜を捉えていた。

「いや、ここは引く。君の言葉は信用できないからね」

信用ねえなあ、と冬夜は苦笑を漏らす。しかし、それを無視して

吸血鬼は遠ざかってゆく。気配が完全に消えたのを確認して、冬夜は息を吐く。また死に損ねた、と小さく零した。

すぐ後ろで倒れている少女を抱き起こす。青い顔をして、今にも死にそうに見えた。しかし、脈も呼吸もある。急いで治療すれば助かるかもしれない。しかし、この島で何ができるだろうか、と冬夜は考える。何よりも、まずは輸血が必要なはずだ。

「聞こえるか？」

冬夜の呼びかけに、少女は僅かにうなづく。目を薄く開き、唇が僅かに動いた。

「――が」

冬夜は耳を少女の口元に近づけると、聞いたことのない名前を告げた。

「一緒にいたのか？」

少女はうなづく。

「殺されたのか？」

再び、うなづく。少女の目に涙が浮かんでいた。

「分かった。でも、お前は助かる」

らしくない――そう思いながらも、冬夜は少女を励まし、抱き上げた。青い顔で屍餅についている教師の姿が、冬夜の視界に入った。それを一瞥して、通り過ぎ、食堂を目指した。

決着

血を吸われた少女は、まもなくして息を引き取った。食堂を満たすのは、すすり泣く声だけだった。空気は鬱々として、更に重みを増していった。

冬夜の隣で西浦も泣いていた。何でこんなことに、と西浦は小さく零す。冬夜は何も言えなかった。

「これから一体どうなるんだよ……」

一人の男子が呟いた。その一言が、一瞬で食堂内に広がる。恐怖の伝播は早った。騒ぎは徐々に大きくなってゆく。このままでは収集がつかなくなると感じた冬夜は、先手を打つ。

「耳を塞いでてくれ」

西浦や聞こえる範囲に冬夜は言った。意味が分からないと視線を向けられるも、西浦や数人が冬夜の指示通り耳を塞いだ。

そして、大きく息を吸う。一寸だけ息を止めて、次の瞬間、音と共に全て吐ききった。

「黙れ！！」

僅かに声が掠れた。それでも食堂に響きわたった冬夜の声は、充分なポリウムだった。

「焦ったって仕方ないだろ。落ち着け」

「人が死んでるのに、落ち着けるわけないだろ」

「だったら、ずっと取り乱して、判断を誤って、死ね」

生きたいなら、黙って考えろ、と冬夜は最後に付け加えた。それで充分だったのか、食堂内は幾分か静かになった。

「お前らは、じっとしてろ」

それだけ言い残して、冬夜は食堂を後にした。教師の制止は無かった。

武器が必要だ。冬夜はあちこちを回って、何か武器になりそうな物を探した。まずは先ほど吸血鬼と対峙した場所に戻り、天井に刺

さった刃を見つめた。近くにあった棒を拝借し、冬夜は跳ねながら、刃を叩いた。あまり深く刺さっていなかったため、三回ほど叩くと落ちてきた。それを受け止めて、とりあえずは安堵の息を漏らす。

しかし、一本だけでは、あまりに心細い。他に無いかと冬夜は本館を抜けて、倉庫に向かった。中にはマリンスポーツの用具があり、海水独特の臭いが充満していた。櫂がいくらかも並んでいた。重量はそこそこあるものの、一撃必殺にはなりにくい、と判断し、冬夜は手放した。

更に奥に進むも、これと言って目を引く武器は無かった。

倉庫を出て、冬夜は本館に戻った。絶対に何かあるはずだ。冬夜は本館にある物置部屋などを探した。一階のフロアを回って、それらしき部屋を見つける。許可を取る必要も無いだろう、緊急事態なのだから。冬夜は迷うことなく扉を開けた。

バケツ、モップなどの掃除用具が目についた。それらを蹴って、更に奥へと進む。草刈りの鎌があった。錆びているものの、殺傷性は高い方だろう、と冬夜は手に取った。そこで更に別の物が視界に飛び込んだ。冬夜は一瞬固まり、それを見つめた。まるで隠された勇者の剣を見つけた時のような高揚が、冬夜の中で渦巻いた。

冬夜は、それを手に取る。鉈だった。刃渡りは三十センチ無い。

しかし、今まで冬夜が使ってきた刃とは比べるまでもない。鉄独特の光沢があり、錆びはなかった。片手で扱うには少し重い。他の武器と組み合わせることはできないだろう。冬夜は錆びた鎌を放り捨てた。

鉈を手にも、冬夜はしばらく物色を続けた。しかし、それ以上は武器になりそうな物を見つけることができなかった。

鉈があれば充分だろう――冬夜は部屋を出て、食堂に戻った。扉を開くと、時間が止まり、同級生の視線が注がれる。僅かに悲鳴も聞き取れた。

それを無視して、冬夜は自分の席に向かった。そこに腰を下ろして、目を瞑る。鉈は椅子に立てかけておいた。

臉の裏に浮かび上がったのは、赤くてらてらと光る吸血鬼の姿だった。勝ち誇ったかのような笑い声まで脳内再生される。夢見が悪くなりそうだ。

*

トイレ以外に勝手な行動を取ることは許されなかった。また、トイレに行く際も集団で向かうことになった。

残った教師陣は、辛うじて繋がる携帯電話で本土と連絡を取ったらしい。一時間後には数名の警官がやってくるそうだ。しかし、吸血鬼、化け物と説明しても警官は鼻で笑った。教師は怒り狂い、携帯に向かって怒鳴っていた。

その声に反応して、一度だけ冬夜は目覚めた。俊敏な動きで鉈を握り、周囲を見渡すも、赤い姿はどこにもなかった。隣の西浦に「落ち着いて」と涙声で言われて、冬夜はようやく鉈を下ろした。

「警察が来てくれるんだって」

少し希望が見えたのか、西浦の声は明るい。食堂に広がる喧噪も幾分か軽くなっていた。しかし、冬夜は反対に不機嫌そうに舌打ちを漏らす。敵め、と憎々しげに呟いた。

吸血鬼も敵、警官も敵——何だか敵だらけだった。

それからの一時間は非常に長かった。何度時計を見ても、針は進んでいない。あの時計は止まっているのではないかと疑った瞬間、分針が僅かに動いた。

先生が引率して、数名がトイレに向かった。しばらくして無事に帰ってくるのを、冬夜は横目で見ていた。

あと五十分——隣の西浦が呟いた。どうやら一時間をカウントしているらしい。

「そんな時間ジャストに来ないぞ」と言ったら、西浦は不機嫌そうに頬を膨らませた。フォローのために「早いかもしれない」と告げると、西浦は少し安心したように口元を弛めた。

二十分が過ぎて、再びトイレに行く者が現れた。他にいないか、と教師が呼びかけると、何人かが立ち上がった。緊張のせいかな、ほぼ十分置きに、誰かがトイレに行きたい、と手を挙げた。

三十分が過ぎた。この時も、やはりトイレに向かう者が現れた。その隊列を横目で見やり、冬夜は小さくため息をついた。

このまま警官の到着を待っていれば、問題は解決するのだろうか。冬夜の中で疑問が渦巻く。冬夜は、拳銃を撃ち慣れない日本の警官と吸血鬼の対戦を想像する――吸血鬼の圧勝だった。

やはり、自分で何とかするべきだ――結論にたどり着いたと同時に、何回目か分からない悲鳴が響きわたった。それに反応して、冬夜は立ち上がる。

「南雲くん！」

西浦は冬夜の服を引っ張った。服の裾を掴んでいる手が僅かに震えている。

「退治してくる」

「で、でも！」

西浦は不安そうに、冬夜を見つめる。冬夜はやっぱりと微笑んで、西浦の頭を撫でた。

「俺を信じろ」

西浦は何か言いたげに口を動かすも、冬夜の裾を離した。それと同時に冬夜は駆け出す。右手には鉈が握られていた。

勝手な行動をするな、と教師の言葉が響く。それを無視して、冬夜は食堂を出た。血の臭いが酷かった。今までにない濃度の臭いに、冬夜の脳髓が痺れる。瞳に凶悪な光が宿り、口角がつり上がった。角を折れ、すぐにトイレが見える。その前に一人が倒れていた。それを飛び越えて、冬夜はトイレに飛び込んだ。トイレの床一面に血が広がっていた。その中央に三人の男子が沈んでいる。首には、ぱっくりと赤い口が開いていた。

恐らく、吸う手間を省くために、切り裂いたのだろう。しかし、トイレの中に気配は無い。僅かに痙攣している男子がいるだけだっ

た。あれは助からない、と割り切って、冬夜はトイレを出た。隣の女子トイレも覗いた。ここも死体が転がっているだけで、気配は無い。「おかしい」と呟き、冬夜は上下左右を見やった。しかし、そこに赤い姿は、どこにも無い。

冬夜は、集団で行動していれば安全だと考えていた自分を呪った。吸血鬼の戦闘力を把握しておきながら、何故そんな楽観的に考えることができたのだろうか――歯を食いしばって、壁に手を叩き込んだ。その音が静かな廊下に響いた。

しかし、連続して悲鳴が上がる。食堂の方だった。まさか、と冬夜は駆け出すも、血に濡れたスニーカーが滑り、出遅れた。食堂の方から漏れてくる騒ぎは酷い。もし、吸血鬼による大虐殺が行われていたら、と思うと、冬夜はぞっとした。恐らく、理性など一瞬で吹っ飛ぶような光景になっているだろう。

ようやく、冬夜は食堂にたどり着いた。しかし、悲鳴は止み、すすり泣く声が響いていた。ぱっと見て、人が減っているようには見えない。冬夜は僅かに息を吐いた。

「な、南雲……」

クラスメイトの女子が泣き崩れながら、冬夜にすがりついた。どうした、と冬夜は尋ねる。

「かなみと彩香が……」

連れ去られた――彼女は、そう言った。

*

悲鳴の後、冬夜が食堂を出たのを見計らったかのように、赤い影が舞い降りた。食堂のど真ん中に降り立った赤い異形を見て、誰もが首を傾げた。ただ一人、吸血鬼の姿を目撃している教師だけが、悲鳴を上げた。

その悲鳴を聞いて、ようやく空気が動き出す。次々と悲鳴が上がリ、吸血鬼から少しでも離れようと足を動かした。しかし、数名だ

け例外がいた。

吸血鬼が着地した机に座っていた四名だ。西浦を含め、すべて冬のクラスメイトだった。あまりにも唐突に現れた吸血鬼に対し、恐怖を抱くよりも、驚いてしまった四名は、ただ呆然と吸血鬼を見上げている。

やがて、吸血鬼が一人の少女に手を伸ばした。彼女の名は橘 彩香——クラスだけでなく、学年で有名で綺麗な少女だった。

吸血鬼の腕が、橘の首に伸びてゆく。そこで、ようやく橘は動いた。しかし、後ろ向きに派手に転んだ。それでも、必死に床を這い、吸血鬼から距離を取ろうとする。

「い、や」

吸血鬼の手が、橘の襟を掴んだ。ひょいと引つ張って、橘を脇に抱える。その瞬間、橘の悲鳴が食堂内に響きわたった。

「待って」

そんな吸血鬼から距離を取ろうとせず、西浦は言った。

「その子、置いていって」

私が代わるから——西浦は青い顔で、ガタガタと震えながらも言いきった。

「ふうん……変わり者が多いんだね」

鬼っぱいのもいるし、と吸血鬼は小さく零した。

「左手、まだ空いてるからさ」

西浦をひょいと持ち上げ、脇に抱える。結局、二人とも捕まった。そして、そのまま吸血鬼は疾走した。本館を抜け、森を走り抜けていく。西浦と橘の二人を抱えて走るにしては速すぎる——かなみは過ぎゆく景色と遠ざかる光を見つめながら思った。

「……凄い」

「え？」

「いや、私たちを抱えて、こんなに速く走れるんですね、吸血鬼って」

いつしか、西浦の声から震えは消え去っていた。

「あの……君さ、僕に連れ去られているんだけど」

「あ、そうでしたね」

吸血鬼の常識的な突っ込みに、西浦は頬を赤くして笑った。

「雰囲気は南雲くんと似てるからかなあ、何だか変な感じなんです」
「そんな変わった人の子がいるのかい？」

吸血鬼は冬夜の名前を知らない。そのため、人の子も変わったのが増えたんだな、と純粹に思った。

「うん、かなりの変わり者なんですよ。それに、とても強いんです」
「強い？」

まさか、と吸血鬼は思う。

「ハサミを分解したような武器を使う子？」

「あ、そうです。知ってるんですか？」

吸血鬼はうなづいた。その瞳が鋭い光を宿す。それを見て、西浦はぞつとした。

「……同類だと思ったのに」

「え？」

何でもない、と吸血鬼は首を横に振った。ふと横に視線を向けると、彩香が泡を吹いて、気絶していた。

「あの」

西浦は尋ねる。

「私たちを殺すんですか？」

「……いずれは、そうなると思う」

ただ、と吸血鬼は続けて言う。

「君らは保存食だ。しばらくは生きれると思うよ」

保存食、と復唱し、西浦は顔を引きつらせた。

「共存できればいいんだけどね。生憎、この島は食料が豊富じゃない。だから、加減して血を吸っても、だんだん弱って死んじゃうんだ」

聞くんじゃなかった、と西浦は後悔した。しかし、死がすぐ待ちかまえているわけではないみたいなので、少し安心した。

しばらく、走り続けると吸血鬼は速度を緩めた。僅かに息が荒れているものの、二人を抱えた状態での凄まじい運動量に感服する。絶対に逃げられそうにないなあ、と西浦は苦笑を漏らした。

やがて、木々の合間に建造物の姿を捉えた。もっと近づくと、それが神社であることが分かった。小さいながらも鳥居があったのだ。更に近づくと、神社は今にも崩れそうなほど、ボロボロであることも分かった。

「悪いけど、ここにいてもらうよ」

廃墟の中に似つかわしくない分厚い鉄の扉があった。西浦と橘は、そつと置かれた。紳士だなあ、と西浦は連れ去られているのに、場違いな感想を抱く。

「じゃあね」

「え、ちょ——」

ばたん、と扉が閉まった。一切、光が入ってこず、自分の手すら見えないほど、闇は濃い。どことなく、すえた臭いが鼻につき、西浦は顔をしかめた。

急に不安になり、西浦は手探りで近くにいるはずの橘の身体を求めた。やがて、橘の身体が見つかり、手をぎゅつと握った。真つ暗闇の中、確かに伝わる命の温もりが、何とか西浦の精神を保った。

*

鉦を手に、冬夜は森を駆けていた。目は血走り、行く手を邪魔する枝葉を一瞬で切り払った。

吸血鬼の行く先なんて分からなかったし、今更追いかけたところで連れ去られた二人が無事である保証もない。それでも冬夜は走り続けた。肩で息をして、苦悶で顔を歪めても、足だけは止めなかった。

何故こんなにも必死になっているのだろうか——自問しても答えは出なかった。既に酸欠になっているため、脳が働かなかったのだ。

ただ、冬夜は明確な答えを求めているわけではなかった。二人が連れ去られたと聞いて、冬夜の身体は自然と動いていた。きっと思ったように行動したのだろう。だから、冬夜は苦しくても、自らの選択に従って走り続けた。

やがて、遠くから、何かの音が聞こえた。がたん、と不自然な音に反応し、冬夜は足を止めた。音の方角を目指し、足音を消しながら進んだ。

しばらくして森を抜ける。廃墟の前までやってきて、冬夜は立ち止まった。血の臭いとかの気配がする——冬夜は鉈を構えた。

「案外、早かったね」

冬夜は声の主を探す。廃墟の上に人影があった。

「二人は？」

冬夜は短く尋ねた。

「彼女たちは保存食だからね。まだ生きてるよ」

「怪我は？」

「無い。自分で鮮度を落としても仕方ないじゃないか」

吸血鬼は笑いながら、屋根から飛び降りた。

「もう遅れは取らないよ」

吸血鬼は、ゆったりとした足取りで冬夜に迫る。

「血は充分に補充した」

切り落としたはずの腕があった。冬夜は軽く舌打ちを漏らすも、一瞬で切り替える。

「再生できないよう、微塵切りにしてやるさ」

「できるものなら」

二人が交錯する。銀の閃光が二本走った。そして低く唸るような声が響きわたった。

「鉈に気を取られすぎだ」

冬夜は左手の刃をくるくると回しながら、呆れたようにため息をついた。刃の先は赤く染まっていた。

「お前、ガチの戦闘は素人だろ？」

「うるさい、黙れ！」

吸血鬼は右目を押さえたまま吠える。それを見て、冬夜は刃をポケットにしまった。

「片目の世界って遠近感が狂うよな。昔、片目を瞑って、机の上に置いてある物に手を伸ばしたことがあったんだ。一発では掴めなかったよ」

くすくすと冬夜は楽しそうに微笑む。戦闘中とは思えない、何かに陶醉したような笑みだった。

「ここからは、これだけで充分だ」

鉈を振り、冬夜は吸血鬼に迫る。鉈を持ち、微笑んで駆けてくる人の子を見て、吸血鬼は純粹に恐怖を覚えた。反射的に下がるも、やはり遠近感が掴めないのか、冬夜の鉈が吸血鬼の身体に食い込んだ。

「そいつ」

冬夜は軽い調子のかけ声で振り抜く。吸血鬼の右腕が、再び宙を舞った。血しぶきが冬夜の目に跳ねた。しかし、気に留めることなく、続けざまに鉈を振るう。

「ほいつ」

今度は左膝に鉈が食い込んだ。鉈の重みと勢いを利用して、強引に振り抜く。ごりごりと関節を砕く感触が、鉈越しに伝わった。左足が跳ね、転がってゆく。吸血鬼はバランスを崩し、地を這うことになった。

「うーん、良い切れ味だ」

冬夜は鉈についた血を指で払い、倒れたままの吸血鬼に迫る。馬鹿げている——こんな雑魚に何故あれほど手こずったのか、冬夜には分からなかった。戦闘において完全な素人の吸血鬼の背中を踏みつけ、押さえつける。

「本当に奇襲しか能が無いんだな」

そして冬夜は鉈を振りかぶった。狙うは頭——冬夜は容赦なく鉈を振り下ろした。頭蓋骨が割れ、脳漿が僅かに飛んだ。しかし、ま

だ吸血鬼は何か言っている。

「おー、まだ生きてるんだな」

冬夜は満面の笑みを浮かべて、今度は左腕を断った。いつしか右腕が肘まで生えてきていた。

「まだまだ壊せる」

続いて右足を断った。その頃には、割れた頭蓋骨の中に見える脳が再生し、頭蓋骨の割れ目も閉じようとしてた。

「ほう、凄いな。これが血液を補充した吸血鬼の再生力か」

ようやく、吸血鬼は、はっきりと言葉を発する——もう、やめて、と。

「まだまだ、色々と試したいことがあるんだ。付き合えよ」

再び吸血鬼の頭に鉦が突き刺さった。また脳漿をまき散らし、吸血鬼の意識は飛ぶ。少し時間を置いて脳が再生すると、吸血鬼は「ごめんなさい」と何度も呟いた。それを遮るように、冬夜の振り下ろした鉦が肺を突き破る。血を吹き、空気が抜けてゆく苦しみが続的に吸血鬼を襲う。そこで吸血鬼は、ようやく理解した——彼が本物の鬼であることを。

生えてくる四肢を細めに切断する。切断された箇所が蒸発しなければ、今頃吸血鬼の輪切りが、あちこちに転がっていただろう。

ぶつぶつと呟く吸血鬼の頭に、再び鉦を叩き込んだ。言葉が止まる。脳漿が跳ね、黒いパーカーにへばりついた。もはや、返り血を浴びすぎて、冬夜の肌も赤く染まりつつあった。血走った眼だけが、ぎょろりと動く。

何度、壊しただろうか——冬夜は額から流れてきた汗を拭い、小さく息を吐いた。吸血鬼の両腕、両足は、もう再生してこない。これ以上の攻撃は殺してしまうだろう、と冬夜は休憩を挟み、吸血鬼の様子を伺った。

「なあ、まだ生きてるか？」

冬夜の問いかけに対し、吸血鬼は小声で何かを呟いていた。冬夜が耳を澄ますと、「ごめんなさい」と何度も繰り返し呟いているこ

とが分かった。少し、やりすぎたかな、と冬夜は苦笑を漏らした。
「ごめんなさい、痛いのは嫌です、暗いのも嫌です、ちゃんとしま
すから、ごめんなさい、ごめんなさい……」

冬夜は首を傾げる。吸血鬼のくせに暗いのが怖いのか、と尋ねた。
しかし、まともな返答は無かった。ただ、ごめんなさいと連呼する
だけだった。

「ん、そろそろ来そうだな」

冬夜は空を見上げて、僅かに微笑んだ。そして吸血鬼の耳元でさ
さやく。

「大丈夫だ、もうすぐ明るくなるぞ——ほら」

雲の合間から太陽が顔を覗かせた。久しぶりの日光に、冬夜は気
持ちよさそうに背伸びした。

「どうだ、明るいだろ。これが最後の実験……って、あら」

吸血鬼の身体から煙が上がる。あまりにも予想通りの結末に、冬
夜は少し落胆した。このまま消滅するのかな、と思い、最後まで見
守る。すると、煙を吐ききったミイラのような物が、その場に残っ
た。

それを拾い上げて、まじまじと観察する。まだ、ごめんなさい、
と呟いているのが聞こえた。

「凄いな……まだ生きてるのか」

冬夜は嬉しそうに吸血鬼のミイラを振り回しながら、神社に踏み
込んだ。日陰に入ったせいか、ミイラの声が少しだけ大きくなった。
「お、あれが良さそう」

冬夜は大きな鉄の扉を見つけ、そこに歩み寄った。門を外し、手
前に引張る。中に人の気配があった。

「誰かいるのか？」

冬夜が尋ねると、闇の中で二つの影が動いた。

「な、南雲くん？」

「西浦か、無事だったんだな」

ほっと胸を撫で下ろしながらも、冬夜は優先すべき作業を遂行す

る。

「外で待つててくれ」

「え……うん」

西浦は、もう一人を引つ張って、扉の方へと向かう。冬夜は、西浦とすれ違つて、暗闇の奥に進んだ。やがて、コンクリートの壁にぶつかつて、冬夜は足を止めた。湿気が酷く、すえた臭いが酷かつた。

「それじゃ、お別れだな」

ミイラを壁に押しつけて、冬夜は微笑む。空いている手でポケットから刃を取り出し、それを握る。それをミイラに突き立てた。小さな悲鳴が漏れ、ミイラは再び「ごめんなさい」と連呼し始めた。

「一生、謝つてろ」

冬夜はミイラから手を離した。刃で壁に縫い止められても、ミイラはずっと謝り続ける。冬夜は完全に興味を無くして、ミイラに背を向けた。扉の外で西浦ともう一人の少女の姿を確認してから、鉄の扉を閉める。そして門をかけて、神社を出た。

「さあ帰ろつ」

冬夜は橋を背負い、西浦と並んで下山した。暗闇に一人残されたミイラは、呪詛のように謝罪の言葉をつぶやき続けた。

後日談

結局、島から無事に帰ってみると、二クラス分ほどの人数が減っていた。男子五十三名、女子十四名、教師六名、施設の職員五名——計七十八名が吸血鬼の犠牲となった。

最初の犠牲者である斉藤たちの死体は、神社の裏で見つかった。二組と三組の男子はコテージの裏に、また施設と正反対の海岸で、捜索に出た教師と職員の死体もあった。

あまりにも死者が出すぎたため、適当な言い訳で警察は納得しなかった。そのため、当夜は再び神社まで戻り、謝り続けるミイラを見せた。緊張感の無かった警官たちは、それを見て、言葉を失った。そして、ようやく吸血鬼の話信じた。

「これは我々が責任をもつて管理します」

帰りの船で、警官が言った。結局、あのミイラは詳しく調べることになり、ガラスケースの中に収められた。曇って日光が弱まっているせいか、ガラスケースから「ごめんなさい」と聞こえた。

課外学習から生還を果たし、数日すると新聞に載るぐらいのニュースになつていた。教師は毎日鳴り続ける電話の対応に追われ、三日ほど休校となった。

そして休校が明け、冬夜は何の気なしに登校した。二年一組の教室は酷く寂しかった。男子は数名、女子も半分ほどいなかった。隣のクラス——二年二組は、もっと酷かった。男子ゼロの女子数人だった。

しん、と静まった教室に踏み入れ、冬夜は後悔した。こんな状態なら来るんじゃないかった、と。しかし、西浦の姿を見つけ、冬夜は少し安心した。自分の席に腰を下ろして、息を吐く。しばらく、イスを引く音が教室に響くも、その後は不気味なほどの静寂が訪れた。やっぱり来なければよかった。怪我で課外学習に来れなかった上村を軽く恨んだ。

あれほど血生臭い世界から、学校に帰ってくると違和感が酷かった。今にも冬夜を追って、警官が教室に流れ込んでくるのではないかと、気が気でなかった。今回は正当防衛で、何の罪に問われないことも理解している。しかし、長年の逃亡生活の癖か、派手に血の臭いをかいだ後の冬夜は、過敏になっていた。

「ねえ南雲くん」

昼休み。弁当を食べて早退しようとして心に決めた冬夜を、西浦が呼び止めた。冬夜は平静を装うも、心臓の鼓動は自然と速まった。

「終わったばかりに訊くのも悪いと思うんだけど……あの吸血鬼さんと友達だったの？」

冬夜は首を傾げて、しばらく考えた。そして「違う」と返した。

「そう、なんだ」

どこことなく悲しそうに西浦は目を伏せる。そんな彼女の心境が読めず、冬夜は眉をひそめた。

「何故そんなことを訊くんだ？」

「ん、えっと、何て言うか……吸血鬼さんの口調がさ、友達の悪口を言ってみたかったんだ」

たぶん、私の勘違い、と西浦は苦笑を漏らし、去っていった。

同類、と呼ばれた。しかし、冬夜は吸血鬼は示した和解案は蹴った。決して親しいと言える間柄ではない。それどころか、最終的には拷問に近いことまで行った。

冬夜は腕を組んで考える。考えれば考えるほど、気分が悪くなった。結局、冬夜は早退した。

回想と事件

背景が白い。これは夢だ、と瞬時にして冬夜は確信する。少し幼い顔立ちの上村が笑っていた。しかし、冬夜は何も思わない。憎しみも妬みも恨みも湧いてこなかった。ただ、こんな頃もあったな、と静かに夢を眺めていた。

上村の後を二つの影が追っていた。一人は夕夏、もう一人は冬夜自身だった。二人もまだまだ幼く、微笑んでいた。今では考えられない光景だった。

この関係が壊れたのは、いつだっただろう——考えるまでもなく、答えは一瞬で出た。上村と夕夏が付き合い始めた頃だ。

上村の友人として、また夕夏の兄として、冬夜は喜ぶべきだったのだろう。実際、上村は性格も良く、異性からの人気もあった。夕夏と付き合うことを知って、冬夜は少し安心した。

それと同時に、何と表現し難い感情が腹の底から湧いてくる。その感情は嫉妬だった。冬夜からすれば、友人に妹を奪われたとも考えられた。冬夜が夕夏に対し恋愛感情を抱いていたわけではない。ただ、純粹に妹として見ていたはずだった。しかし、嫉妬は身体を焼き続けた。

表面的には「おめでとう」と祝ったものの、冬夜は上村を避けるようになった。良いヤツだと分かっているからこそ、上村に対して抱く暗い感情を冬夜自身が許せなかったのだ。

暗い感情を抱くぐらいなら、と冬夜は二人から距離を取るようになっていった。

*

「兄ちゃん」

いつものように夕夏が、冬夜の身体を揺らす。しかし、どこか控

えめだった。以前なら、もっと容赦なく、冬夜の身体を揺らしただろう。

課外学習の事件から、夕夏は少し大人しくなった。恐らく、冬夜に気を遣っているのだろう。それに気づかないほど、冬夜も鈍感ではなかった。

「そろそろ学校やバイよ？」

それは、ここ数日、夕夏が口にするセリフだった。遅刻するのという意味合いではなく、出席日数が足りなくなるよ、と言っているのだ。冬夜は渋々、身を起こす。夕夏は心配そうに冬夜の顔を覗き込んでいた。

「先に行つてろ」

今日は行く——冬夜がそう答えると、夕夏は僅かに微笑んだ。それも、どこか固い笑顔だった。

「まだ早いし、待つてろ」

そう言つて、夕夏は部屋を出て行つた。それを見送つて、冬夜は一息吐く。そして、緩慢な動作で着替えを始めた。

時計の針は、まだ七時を指している。そう急ぐ必要は無かった。しかし、着替えてしまった冬夜は、再びベッドに潜り込むのもどうかと思ひ、部屋を出た。朝食を済ませ、弁当を受け取り、家を出る。そこで冬夜は顔をしかめた。

照りつける日差しは酷かった。まだ朝の七時だぞ、と冬夜は文句を零す。日が昇りきつた時のことを考えると、憂鬱になった。吸血鬼で無くても、蒸発して溶ける光景を思い浮かべ、冬夜は思いつきりため息をついた。

ふと庭を見ると、夕夏の自転車があつた。今日も上村のリハビリに付き合っているのだろう。課外学習の数日前に上村は退院していた。しかし、まだ固定具が外せていないため、課外学習に顔を出すことはなかった。その固定具がようやく外れたので、上村は学校まで徒歩三十分かけて歩いている。夕夏も、それに付き合っているのだ。

まったく苦勞なことだ、と小さく呟いて、冬夜は自転車のサドルに手を乗せた。既に熱を帯び始めている黒いサドルに、思わずため息をついた。鞆を力ゴに放り込み、ペダルを踏んだ。自転車が身体を運ぶと、温い風が流れていった。僅かに汗ばんだ肌から熱を奪ってゆく。その瞬間だけが心地よかった。しかし、一旦足を止めると汗が噴出してくる。それを拭いながら、冬夜は自転車をこぎ続けた。

やがて、上村と夕夏の後姿が見えてきた。冬夜は、もちろん無視して追い抜くつもりだった。しかし、その前に振り返った夕夏に気づかれ、前を遮られた。

「荷物、お願いしていい？」と夕夏に迫られ、冬夜の自転車のハンドルに上村と夕夏の鞆が引っかった。ちなみに冬夜は返事をしていない。

「よう」

上村の呼びかけを、冬夜は軽やかに無視する。冬夜は夕夏に蹴られた。

「相変わらずか」

やや苦い笑みを零しながら、上村は言った。額から滝のように汗が流れてゆく。それを夕夏がハンカチで拭った。

久しく三人が揃ったというのに、誰一人口を開こうとしなかった。上村は短く息を吐きながら、歩くことに必死だった。それに対し、冬夜はぼんやりと遠くを見つめ、間の夕夏は不安そうに冬夜と上村を交互に見やった。

「大丈夫なのかよ？」

やがて、上村が口を開いた。その質問が何を指しているのか、すぐに分ならず、冬夜は首を傾げた。

「期末テストだよ」

「ああ、そうか」

まさに明日から期末テストが始まることを思い出し、冬夜はうなづいた。

「お前は？」

「勉強する暇なら、たくさんあつたからな」

上村は自嘲気味に笑う。足の骨を固定する器具は取れたものの、まだ筋力が戻っていないのか、片足を庇うような歩き方だった。

「まあ、結果は自信はさておき、受けるのと受けないのでは、全然違うからな。出席が貰えるし」

上村はポジティブに考えているのか、他意なく笑った。入院していたせいで、上村も冬夜と同じぐらい出席日数が危ないのだ。しかし、冬夜はどうしてもよさそうに頭を掻いた。

「冬夜はさ」

上村は静かに口を開いた。

「卒業する気、無いのか？」

「必要性を感じられないからな」

即答の冬夜に、上村は食いつく。

「何でだよ、就職するにしても中卒より高卒の方が遙かにマシだろ？」

「マシって程度だ」

未来に悲惨なリーマンショックが待ち受けていて、大学まで進んだ同年代が就職で苦労していることについては言及しなかった。未来のことを言ったところで信じられないだろう、と思ったのだ。早い段階で就職しておいた方が良いのに――冬夜は内心で小さく呟いた。

しかし、上村なら、とも思う。彼なら努力を積み重ね、しっかりと大学を卒業し、良い就職先を勝ち取るのではないだろうか。ただ、その前に冬夜に殺されることになるのだが。

「どうでもいいんだよ」

自棄になんなよ、と上村は苦笑で応じた。

蝉の鳴き声がうるさい。冬夜は過ぎゆく木々を見つめた。木の表皮が僅かに動く。よく見ると、蝉が何匹も木に止まっていた。虫が嫌いなわけではない冬夜ですら、ぞっとする。単体なら鳴き声だけ

で済むのに、群れると嫌悪感が酷くなった。木々の表面で時折動きながら鳴き続ける蝉から、冬夜は目を逸らす。ぼんやりと遠くを見つめることにした。

やがて、校舎が見えてくる。しばらく進むと、校門も見えてきた。そこで冬夜は眉をひそめ、足を止めた。

「ん、どうした？」

上村と夕夏が並んで、冬夜の顔をのぞき込んだ。それに応じるように、冬夜は指さした。校門の前に人だかりができていた。

「何だ、あれ？」

上村が首を傾げた。夕夏も不思議そうに見つめている。いつしか、冬夜の胸中にあつた嫌悪感は消え、代わりに悪寒が身体の中に滑り込んできた。

三人は無言で校門まで歩いた。冬夜は少し早足になり、上村がついてこれなくなった。夕夏は上村に付き添い、冬夜一人が先に校門にたどり着いた。教師が下がれ、と叫んでいた。

死臭——まだ微かに漂う血の臭いに、冬夜は顔をしかめた。思わず「またか」と呟いていた。冬夜の周囲にいた数人がびくりと肩を震わせた。

その場に居合わせた一年生や三年生は余裕があつた。しかし、二年生だけは違った。顔を青くしてガタガタと震える者もいたし、路肩に嘔吐する者もいた。課外学習での出来事を思い出したのだろう。冬夜は自転車を停めて、野次馬の一、三年生を押し退け、奥へと進む。邪魔な三年生を押し退けた時、睨みつけられるも、冬夜は無視して更に進んだ。

視界が開ける。そこには血の海が広がっていた。その中心に布のような物がかけられている。その膨らみから察するに死体だろう。しかし、どこか変だった。よくよく見ると何かが欠けていることに気づいた。

頭の部分に膨らみが無かったのだ。冬夜は血の海に吸い寄せられるように足を進めた。教師が何か言っている。それでも冬夜は足を

止めない。教師は冬夜の肩を掴んだ。それを一瞬で振り解き、腕を捻り上げた。教師が小さく悲鳴を上げる。それを解放して、冬夜は更に進んだ。

血液を踏んだ。また別の教師が冬夜を止めに入る。それを軽く受け流して、白い布に手を伸ばした。指先が布に引っかかる。それをそつと引っ張った。死んでいる――それは見て、すぐに分かった。その死体は思った通り、頭部が無かった。

回想と事件 その二

居場所が無くなってゆく——冬夜は、そんな危機感を抱いていた。上村を避けるようになってから、彼はやたらと冬夜に構った。純粹に心配されているのだ、と冬夜は理解しながらも、安息の地が無くなってゆくことに焦りを覚えた。

長い付き合いが災いして、上村は何度も冬夜の家を訪れた。その度に、冬夜は部屋にこもった。上村と顔を合わすことを断固として拒絶し続けた。

*

事件から三日が経つ。死体は三年生の女子だったそうだ。それを聞いて、冬夜は胸を撫で下ろした。

学校は再び休校となった。期末試験の日程は未定になり、それが良いのか悪いのか、冬夜には分からなかった。と言うよりも、どちらでもよかったし、どうでもいい話だった。

朝、日が昇る前に、こっそりと家を抜け出して、トレーニングを開始する。嫌な夢を見た。それを忘れるように、冬夜は必死に身体を動かした。

汗がすべてを流してくれる——やがて、頭の中が真っ白になり、冬夜は一息ついた。最後に走ろう、と冬夜は息を整えてから立ち上がった。いつものコースを淡々と駆けてゆく。日が昇ってきた。河川敷に差し掛かると、陽光が眩しく、冬夜は手をかざした。

両足は一定のリズムを地面に刻み続けるも、その音は僅かだった。静かに冬夜は駆けてゆく。河川が朝日を反射して、余計に眩しくなった。

ふと冬夜は足を止める。河川から視線を移した時、視界の端に何かを捉えたのだ。それが何なのかは分からなかった。ただ、嫌な予

感を感じるぐらいに、赤い何かであったことだけは確かだった。

冬夜は面倒事に足を突っ込む覚悟を決める。そして堤防を下りていった。膝の辺りまで伸びてきた雑草を踏みしめ、河川敷に下り立った。そして、赤い何かを目指す。

すぐ傍までやってきて、冬夜はやっぱりため息をつく。首のない死体が転がっていた。下が雑草の生えた地面で、血の海が広がっていることはなかった。河の臭いに混じって、血の臭いも僅かにあった。しかし、見渡しても首は無かった。

どうしたものか、と冬夜はしばらく考える。そして近くの民家にお邪魔して、電話を貸してもらった。腕時計が示す時間は六時で、起こされた側は至極迷惑そうに顔を歪めた。ただ、「人が死んでるんで、通報させてください」と冬夜が告げると、目を丸くして電話の子機を持ってきた。電話を終えて、ありがとうございました、と冬夜は民家を後にする。そして、河川敷にあるベンチに腰かけて、警官の到着を待った。

十分もせず、原付に乗った警官が二人やって来た。その後、続々と堤防の上にパトカーが並び始めた。それを忌々しげに見つめながらも、冬夜は手を振った。

「死体、あっち」

冬夜は指さす。その方に数名が走っていった。そして、ここまでの経緯を全て話す。

ランニング中に発見した、死体には触れてない、電話は近くの民家に借りた、と漏れることなく説明する。警官の目はどこか嫌な光を帯びていた。

「あの男の人に見覚えはないかな？」

そんな質問を投げかけてくる警官に、冬夜は思わず吹き出した。

「頭が無いのに、どう判断しろと？ まあ服装だけで判断するなら、全く知らん」

警官の頬が引きつった。

「さっさと犯人捕まえないから、こんなことになるんだよ」

冬夜はワザとらしく肩を竦めた。警官二人の表情が強ばった。

「ほら、ちよつと前に学校で首切り死体が見つかっただろ？ あれ
と同一犯の可能性が高い」

「模倣犯の可能性もある」

警官は、そんなことを言った。

「へえ、そりやまた凄い模倣犯がいたもんだ。そいつ、やべえぞ」

冬夜は軽く笑い飛ばす。警官二人は、もはや無表情になっていた。
「あの切り口を見たら分かるだろ？ あの綺麗な断面図。一撃でや
らなきゃ、ああも綺麗にはならんさ。それに死体を移動させた気配
がないことから――」

「待て」

警官の一人が険し表情で口を開いた。

「何？」

「何故、一件目のことも知っているんだ？」

「ああ、自分の学校で起きた事を知っていて、何か不自然か？」
なるほど、と警官はうなづきながらも、険しい表情を弛めない。

警官の額から汗が流れ落ちた。

「ああ、さっきの説明だけど、死体を動かした気配が無かっただろ
？ 死体を中心に血が流れていた。まあ今回は地面に吸われている
から分かりにくいけど、引きずって運んできたような痕跡がない」
二人で運んできたなら、色々と納得できるんだけどな、と冬夜は
付け加えた。

「しかし、二人で人を殺すメリットって、あんまり無いんだよな」
むしろ、手違いがあつた時にボロが出やすい。

「だから、まずは犯人を一人と仮定して話を進める。だとしたら、
この犯人は相当ヤバイと思う。何でだと思う？」

冬夜は尋ねた。二人は首を横に振った。

「例えば首を切るまでの行程を二段階に分けたとする。眠らすなど
してから、首を切るってことだ。そうなると、かなり楽に犯行を行
うことができる。しかし、手間が増える分、犯行時間も長くなる。」

そして二件目となると、誰かに見られている可能性がある。そこま
で手間をかけて殺す必要なんてあるか？ 普通に頸動脈を切るなり、
目を潰すなりすれば、人は簡単に壊れるのに。なら何故、首を切る
？ 首を切ることに意味がある。もしくは、首を切ることなんざ手
間ではないんだろ。前者なら、まだしも、後者なら相当ヤバイ」
全て推測だが――冬夜は最後にそう締めくくる。警官の表情は硬
かった。やがて、一人の警官が静かに口を開く。少し年輩の警官だ
った。

「あんまり深追いしない方がいい」
「は？」

冬夜は耳を疑った。警官の言うセリフではない。まるで脅すよう
な警官の言葉に、冬夜は肩を竦める。

「何だ、あんたら共犯なのか？」

「違う。違うが、君のために言っておく。深追いするべきじゃない」
命が惜しければ、と警官は最後に付け加えた。その顔は血色を失
い、青くなっていた。

「帰りなさい」

警官の声は震えていた。冬夜は渋々、ベンチから腰を上げて、河
川敷を去った。

何か危険なところに足を突っ込んでしまったと、冬夜は確信する。

回想と日常

これ以上、上村と顔を合わせたら壊れてしまう——そんな予感があつて、冬夜は怖かった。自分の中に渦巻く、黒いモヤが形をなしてきている。それが、いつ暴れ出すか分からず、冬夜は上村が去るのを、じつと待つしかなかった。

黒いモヤを落ち着けるために、冬夜は自身に言い聞かせる——あいつは良いヤツなんだ。夕夏と幸せになつてほしい。

黒いモヤはささやく——信じていた友人に妹を奪われて納得するのか？

違う、と冬夜は否定する——あいつは良いヤツなんだ。優しく、こんな俺を未だに心配してくれている。そこに他意は無いんだ。

黒いモヤは尋ねる——他意は無くとも、お前の居場所を奪っているのは誰だ？ ほら、耳をそばだててみるよ。

冬夜は両耳を塞いだ。しかし、一度言われてしまうと、意識は音にいつてしまう。叫びたくなつた。これ以上、聞きたくなかつた。

家族の団らんが聞こえてくる。夕夏や母の笑い声、低くも上機嫌な父の声、そして上村の声が。

続けて黒いモヤは言う——見るよ、お前の居場所、もう無いぜ？ 違う、あいつは——良いヤツ、なのか？

小さな疑念は、瞬く間に肥大していった。冬夜のあらゆる感情を食いつぶし、最後に残つたのはシンプルな答えだつた。

自分がいなくなれば、彼らは幸せなのだ。自分の代わりは上村が努めてくる——冬夜の両目から涙が溢れ出した。握りしめていた手から力が抜ける。ぱたり、と指先から血が落ちた。

「死のう」

冬夜は手のひらから流れる血も止めず、涙も拭わず、そつと部屋を出た。そして音もなく玄関を出て、ふらりと夜の町に姿を消した。

*

そうだ、と冬夜は小さく呟く。ベッドに横たわり、天井を見上げていた。

「あながち、お前の言葉は間違つてないな」

今は亡き、斉藤の言葉を思い出す。臆病者——確かに、そう言われた。その通りだ、と冬夜は苦笑を漏らす。

身を起こし、机の前に立つ。休んでいる間に溜まった資料が、机の上には散乱していた。それに目もくれず、引き出しを開いた。錆びたカッターナイフを取り出し、冬夜は生気の無い瞳で、それを見つめていた。

やがて、かちかちと鳴らして、刃を出す。それを自分の手首に当てるも、そこで冬夜の動きは停止した。

「相変わらずか」と呟き、冬夜はそつと刃を手首から離す。刃をしまつて、カッターを机の上に放り投げた。

「死ねねえなあ」

再びベッドに戻り、冬夜は寝ころんだ。開け放っている窓から、蝉の鳴き声が聞こえた。

何故、蝉は生きるのだろうか——冬夜には分からなかった。地中で退屈な時間を過ごし、ようやく出てきた地表で二週間程度しか生きながらえない。そんな人生——否、蝉生は何か楽しいことでもあるのだろうか、と冬夜は考える。

冬夜にとつて、今は地中だった。退屈で、時間だけが過ぎてゆく。地表に出たら、楽しいだろうか——逃亡生活を地表だと考えるならば、辛いことも多かったものの、比較的楽しい生活を送れたと思う。道を踏み外して、初めて冬夜は生きるということを実感した。

それは日々、命のやり取りを行ってきたことも原因の一つだろう。ただ、それを除いても、楽しめていたと思う。警官と追いかけてこし続け、いつしか人外に追われるようになり、最終的には一人の女に撃たれ、本望——死を迎えるはずだった。それで冬夜の人生は終

わるはずだった。なのに、冬夜は再び人の生を歩んでいる。

何故、生きるのだろうか。何故、生きられるのだろうか。退屈な世の中で、何事も成せず、社会の歯車になってまで生きる理由とは何なのか——冬夜には分からない。いつか、誰かに聞いてみたいものだ、と冬夜はため息をついた。

ふと我に返ると、母の呼ぶ声が聞こえた。朝食だろうか。冬夜は身を起こし、ゆったりとした足取りでリビングへと向かった。

*

「……何なんだよ」

「ん、何が？」

冬夜は不機嫌そうに、テーブルに頬杖をつき、眉をひそめていた。その対面に座る少女——西浦は対照的に笑顔だった。

「そんな顔してたら、戻らなくなるよー」

「うるせえ、そんなワケあるか」

冬夜は盛大にため息を吐いた。

話は今朝に戻る。母に呼ばれてリビングに下りると、冬夜は電話の受話器を差し出された。どことなく嬉しそうな母の表情に、冬夜は首を傾げつつも、電話に應對した。

「……もしもし」

自分に電話をかけてくるなんて、一体誰だろうか。クラスの連絡網なら、わざわざ冬夜を呼ぶ必要はない。母が應對し、そのまま次に回してもらえばよかった。

「あ、もしもし、南雲くん？」

高く、女の子のような声が返ってくる。冬夜は更に首を傾げた。

「突然、電話してごめんね。もしかして寝てた？」

「寝てたは寝てたが——」

それよりも気になることがある。誰だ、と冬夜は尋ねる。相手は絶句した。

「……あーごめん。名乗ってなかったよね、西浦かなみ、です」

ああ、嘔発見機か、と漏らしそうになったのを寸前で堪える。

「何で、うちの電話番号を知って——」

そこまで言いかけて、冬夜は気づく。クラスの連絡網だ。

「……何か用か？」

「……何だか凄く嫌そうね」

何故、分かるんだ、と冬夜は思わず尋ねた。

「結構、露骨だよ、南雲くんの声」

すぐに声が低くなる、と西浦は答えた。それは気づかなかった。

以後、気をつけようと冬夜は心に刻んだ。

「で、何の用なんだ？」

「あ、そうだった。今晚、クラスの皆で花火しない？」

「馬鹿か、お前」

冬夜は即答する。それと同時に、母が冬夜の頭を軽く叩いた。鬼のような形相の母と、殺意を滲ませる冬夜が睨み合った。

「先生が言ってたろ。学校の指示があるまで、自宅待機で、ってな」

「ふうん、こんなときだけ、先生の言葉を利用するんだ」

西浦の言葉に嫌味がこもる。しかし、それをさらりと流して、冬夜は肯定してやった。

「むー……でも、このままクラスがバラバラとか嫌だし。ね、ちょっとぐらいいいじゃん？」

「俺は何も言わん、勝手にやってくれ」

「出た、一匹狼宣言」

西浦は受話器の向こうでケタケタと笑う。冬夜は笑えず、無表情で電話に応じる。

「一人がいいんだ」

「ふうん、だから、いつも威嚇してるの？」

威嚇って——冬夜は顔を引きつらせた。動物みたいだな、と冬夜は思う。実際、狼は動物だった。

「それは、さておき、花火やろうよ」

冬夜の返事を待たずに、西浦はつらつらと予定を述べる。今晚、河川敷の公園に二十時集合らしい。

「でね、買い出し、手伝ってほしいの」

「はあ？ だから、何で俺が——」

「何事も受け身で楽しそうじゃないから、主催する側に回ってもらおうかな、って」

「勘弁してくれよ」

再び、母に叩かれた。冬夜は無言で睨みつけるも、母の気迫も負けてはいなかった。

「お願い、手伝って！」

受話器の向こうから、手を合わせるような音が聞こえた。冬夜は、しばらく考える。そして、ため息を漏らしながらも答えた。

「まあ暇だしな」

「本当！？ ありがとう！」

そして、花火を買うために、西浦と町を回った。現在、冬夜の隣にある戦利品の数々を見て、冬夜は苦い笑みを零した。

「で、今度はこれをどこに運べと？」

「……ごめんなさい、調子乗りました」

ファミレスで向かいの席に座っている西浦が素直に頭を下げる。

冬夜は花火だけで、あれほどの金額になったのを初めて見た。それぐらいの量の花火が、冬夜の横に積まれていた。持ってかえる際、店員に心配されたぐらいだった。

「そして予定も雑に立てすぎだろ。これから、どうするんだよ？」

冬夜は店内の時計に目をやった。昼過ぎに待ち合わせをして、花火を買い、まだ十五時だった。花火の時間まで、あと五時間はある。「それはその、普通に話してれば、数時間なんて、あつと言っ間だから……」

西浦の語尾は小さくなっていき、やがて「ごめんなさい」と呟いた。「もういいよ」と冬夜は頬杖をついたまま答えた。

回想と結末

どこかで見た光景だ、と冬夜は思う。夜の河川敷に鮮やかな光がはじけた。しばらくすると、風を切る音が響き、再び光が炸裂する。それをぼんやりと冬夜は眺めていた。火薬の匂いが、温い風に乗ってやってきた。

公園から数人の笑い声が聞こえてくる——ああ、そうか。冬夜は結末を思い出す。

居場所を奪われ、家を逃げ出したあの日、冬夜は、この光景を泣きながら眺めていた。滲む視界の中に、浮かぶ花火は冬夜の心を落ち着けた。

花火の光の中、若者の影は無邪気に駆け回り、それとは対照的に、冬夜は小さくため息を漏らす。

やがて、若者たちに近づく一人の男が現れた。上下ともに黒い服で闇に溶け込むようだった。若者たちは、それに気づかない。

男は僅かに身体を捻った。その瞬間、銀の光が一閃。その動きに、冬夜は息を飲んだ。ただ、刀を抜いただけなのに、その動きは冬夜を惹きつけて離さなかった。

一人の若者の首が飛んだ。しかし、他の若者は気づかない。悲鳴は打ち上げ花火の男にかき消されたのだ。また一人の首が飛ぶ。三人目、四人目と次々と首が飛んでゆく。

冬夜は、それを堤防の上から、じつと見つめていた。そして、言いしれぬ高揚が腹の底から湧いてくる。居場所を失い、絶望だけが渦巻いていた胸に、新たな力が生まれる。原始的で、現代では認められることのない、不条理を通す力が。

やがて、惨劇が終演を迎える。河川敷の公園に立っている人影は一つだけだった。それは、ずっと闇に溶けてゆく。その後ろ姿を見送る冬夜の心臓は、弾けんばかりに拍動していた。

*

そうか、あの時に死んだのは自分のクラスメイトだったのか——
いつしか、冬夜の表情は険しくなっていた。これから起こる惨劇を
思い出し、冬夜は唾を飲み下した。

時は二十時、河川敷に数名のクラスメイトが現れ、花火の袋を開
け始めていた。日が沈んでも、蒸し暑さは変わらなかった。冬夜の
頬を一筋の汗が流れてゆく。

西浦から花火を手渡されるも、冬夜は気が気でなかった。これか
ら、自分に狂うきっかけを与えた、あの殺人鬼が現れるのだ。冬夜
からすれば師匠と呼んでも構わないほど、尊敬の念を抱いている。
しかし、下手をすれば、ここにいる自分も師匠に殺されてしまう可
能性があるのだ。そして、クラスメイトは、ほぼ間違いなく殺され
るだろう。そういう結末なのだ。

どうするべきか、と冬夜は考える。手にした花火は火がついてい
ない。更にクラスメイトは増えた。

いつしか、冬夜の足は自然と動いていた。向かう先に、西浦の姿
があった。

「すぐにやめさせろ」

冬夜は半ば強引に西浦の肩を引っ張って言った。

「え、何で？」

「ヤバいのが来る」

冬夜の表情に余裕はなかった。じつと闇の奥を気にしながら、西
浦に続けて言う。

「俺の言うことが信じられないか？」

「……ううん、嘘じゃないのは分かるけど」

「いいから、早く逃げてくれ」

そう言い残して、冬夜は西浦の下を離れた。向かう先は闇——そ
こに人影が浮かんだ。

何と言うべきか——冬夜は言葉を探すも、男は無言で日本刀を抜

く。やはり、綺麗な動作だ、と冬夜は戦慄を覚えた。

「待ってくれ」

冬夜の言葉は黙殺される。男は駆け出し、冬夜に迫った。男の間に合いに入った刹那、銀の閃光が迸った。冬夜は、それを後方に飛んだ躲す。しかし、刃先が冬夜の鼻先を掠めた。僅かな痛み、冬夜は顔をしかめる。

「……へえ、躲されたのは初めてだな」

ようやく、男が言葉を発した。冬夜は冷や汗を拭いながら、もう一度「待ってくれ」と頼んだ。

「待つことで、僕にメリツトがあるのかなあ？」

「少なくとも、俺にはあるんだけどな」

「逃げるでしょ？」

「当然」

「なら、待てないなあ」

男の刀が揺れ、やがて静止する。構えたのだ、と冬夜は理解した。しかし、現状の装備で何ができるだろうか——冬夜の頬を伝う冷や汗は止まらない。

しかし、心は静まっていた。あの刀なら一瞬で苦しむこともなく、殺してくれるかもしれない——不意に冬夜の口元が弛んだ。

「まあ話で解決できないなら仕方がない」

冬夜はポケットに入っている家の鍵とシャープペンを取り出した。狙うは一点、目しかない。しかし、どうやって刀を防ぎ、反撃可能な距離まで縮めるかが問題だった。

死んだら死んだときだ——冬夜は考えるのを止める。瞳が鈍い輝きを発した。打ち上げ花火の音で、男と冬夜が同時に駆けた。

刀は思った通り、冬夜を迎え撃つように振り下ろされる。基本的な袈裟斬りの軌道だった。それを冬夜は家の鍵で受ける。手首にかかる重圧が酷い。また、細い鍵の半分ほどまで刀が食い込んでいる。極限の集中力のせい、刀が少しずつ鍵を切断していくのが見て取れた。しかし、その進行速度を、ほんの少しだけ和らげることは

成功した。その隙に、刀の軌道上から身体を脱出させる。次の瞬間に鍵が完全に断たれ、花火の光を反射しながら転がっていった。冬夜は身を限界まで捻り、懷に飛び込みながら振り下ろされる腕をかい潜る。そして、もう一つの手に握られたシャーペンを、男の顔に突き立てた。

手応えあり、と冬夜は続けざまに蹴りを放った。男の身体は軽く大きく飛んでいった。

「……っは」

止めていた息を吐く。それと同時に、汗が噴き出してきた。それを手の甲で拭いながらも、冬夜は闇の奥を見つめ続けた。恐らく、最後の蹴りは、ほとんどダメージを与えていない。男は自ら後ろに飛んだのだ。つまり、引き際に刀を振り下ろしていれば、冬夜にダメージを与えることができたのだ。

思っていた通り、闇の奥で影が起き上がる。冬夜は、今すぐにも逃げ出したい衝動に駆られていた。花火の音は止んでいる。もういか、と冬夜は男との距離がある内に、背を向けて走り出した。男は追ってくる。河川敷の土を踏む音が、ずっと続いてくる。逃げきれるかな、と冬夜は顔を引きつらせた。

「待てよおお、ここまでやって逃げるとか無いだろおお」

妙に間延びした声が雰囲気合わない。しかし、それに言いしれぬ恐怖を覚えた冬夜の額から、どっと汗が噴き出した。

「勝てない相手に向かつて、仕方ないだろうが！」

冬夜は一瞬、振り返って叫んだ。そして後悔する。シャーペンは目を潰していなかった。頬から血を流しながら追ってくる男との距離も着実に縮んでいた。

詰んだ、と冬夜の思考は答えを出した。ならば、と冬夜は急停止して、反転する。

最後の賭けだ——冬夜は吠え、男に向かう。男の青筋を立てた顔に怯むことなく、両の拳を握り、突き出す。それに応じるように、男は刀を振りかぶった。

*

冬夜は、ぼんやりと自室の天井を見つめていた。

時は午後十二時、太陽が昇り、もっとも暑くなる時間だ。それを助長するかのように、蝉が鳴いている。しかし、それも冬夜の耳に届いていなかった。

今頃、昼休みだろうか——冬夜は学校に思いを馳せた。良いことなんて無かった。退屈な日々を過ごすばかりで、得る物も無かった。そう考えると、この展開は悪くない。実に冬夜向けの流れだった。すべては、あの日から始まった。冬夜の歴史が大きく変わり始めた。

あの日、男の刀が振り下ろされることはなかった。しんと静まった河川敷で、冬夜と男は見つめ合っていた。刀は不自然に揺れ、冬夜の拳も何かの干渉を受けて、止まっていた。

「邪魔しないでほしいんだけどおお？」

男の血走った眼がぎょろりと横に動いた。その視線を辿ると、黒い服に身を包んだ人が立っていた。黒い手袋をした手が、不自然な形で静止していた。よく見ると、手袋から細い糸が何本も伸びていた。

「秀、ちょっとやりすぎです」

涼しげな声は、よく通った。スーツ姿から男性かと思いきや、女性のような声だった。

「あなたも勝手な行動は慎んでくださいね」

女はやっぱりと微笑みながら、冬夜に言った。

「分かったから、首に巻いてる糸を解いてくれないか？」

冬夜は首を指さしながら苦笑を漏らした。しかし、女はそれを黙殺する。

「秀、あなたは、もう学園に戻ってもらいます」

「はあああん？ あんな退屈なところに戻るとか、洒落にならねえ

ええし」

秀と呼ばれる男の顔に青筋が浮かび上がる。そのうち血管が切れて、勝手に死ぬような気がして、冬夜は吹き出した。

「何だ、てめえええ、何が面白いんだよおお？」

「その喋り方、マジやめてくれ……ぷっ」

「はい、二人とも黙ってください」と女が手を動かした。冬夜の首にかかった糸が絞まる。冬夜と秀は黙った。

「秀、逆らう気ですか？」

男は黙ったまま、静かに刀を下ろした。そして小さな声で「分かった」と告げた。

「で、今度はあなたなのですが……一体何者ですか？」

女が手を動かす。冬夜は、全身に糸が降り注いできたのが分かった。

「いや、何者って言われても……いや、あの脅されても何とも言えんのだが」

女が小指を動かすと、冬夜の首が絞まった。

何と答えるべきか——冬夜は必死に考える。しかし、今の冬夜は同級生を守るために飛び出した、ただの高校生でしかないのだ。この時、まだ人を殺していない冬夜では、殺人鬼と名乗っても実績が無いのだ。

「……同級生を守ろうとして、力に目覚めた、少し前まで普通の高校生？」

「ふうん、力に目覚めたんですか」

女の瞳に疑念の色が浮かんでいた。

「まあどちらにせよ、目撃者は片づけないといけないんで」

「おい、なら何で聞いた」

「一般人——もはや、一般人とは呼べないんですけれど、秀とあそこまで戦える人がいるなんて思いもしませんでしたから」

しかも、ほぼ丸腰で、と女は付け加えた。

「どうせ、俺も殺すんだったら教えてくれよ。あの人、強いのか？」

冬夜は秀を指差しながら尋ねる。秀は興味なさそうに欠伸をし、女が口を開いた。

「ええ、かなり」

自身の強さが、どれぐらいなのか分かっていない冬夜は、ようやく相対的な位置を見つけられたような気がした。かなり強いと言われる秀よりは弱いと、かなり大まかな位置だが。

「そっか……なら、死んで本望かな」

「え、ちよつと諦め早くないですか!？」

女が急に取り乱した。その雰囲気は、どことなく子供っぽい。ふとした間違いで冬夜を絞め殺しかねない、危うさははらんでいた。「ん、いや、殺すんだろ？ それに、この状態を打開できるほど、俺は強くないし」

詰んでいる——冬夜はため息と共に、小さく漏らした。

「死んじやうんですよ？ もう少し何か……命乞いとか!」

「命乞いしてほしいの?」

冬夜が尋ねると、女は黙った。しばらくして、女は顔を上げる。

「していただいた方が、話を進めやすかったのですが——」

「つまり、脅しだったってこと?」

「そうですね」

あつさりと女は肯定した。冬夜も、それにうなづく。

「いや、しかし、生きてても退屈だしなあ……」

「ああ、もう分かりましたよ。いいから話を聞いてください!」

女は自棄気味に口を開いた。

「あなたには、私たちの学園に転校していただきます——真克^{まじく}学園へ」

転校初日

編入の手続きは驚くほどスムーズに行われた。あとは冬夜が荷物をまとめて、学校に向かうだけだった。真克学園は全寮制で、冬夜も入寮しなければならないのだ。

簡単に言えば、軟禁みたいなものだろう——冬夜が言うと、女は苦い笑みで応じた。

学校には家庭の都合で、と言うことになっている。しかし、夕夏は変わらず今の高校に通い続けるので、違和感は拭えない。実際、西浦にはバレた。

「何かあつたんだよね？」

西浦は何度も問いかけてきた。しかし、冬夜は一切答えなかった。少しでも話してしまえば、彼女も巻き込んでしまうことを理解していたからだ。ずっと続く監視の目にうんざりしながら、冬夜は小さく息を吐いた。

冬夜の両親は何も言わないものの、渋い表情だった。突然の転校に納得がいかないのも当然のことだ。しかし、断れないことを理解したのか、最終的には転校を認めた。それも冬夜の説得があつて、ようやくのことだった。

突然の転校が、こうもスムーズに進んだのは、冬夜が乗り気だったことも、一つの要因なのだろう。両親を説得し、学校にも自ら説明に向かい、冬夜にしては珍しく積極に行動した。結果、手続きはあっさりと済み、真克学園への編入が決まった。

編入当日、冬夜は大きな鞆を肩に掛けて、約束の時間を待った。一体どんな学園なのだろうか——冬夜の胸は期待で満ちて、自然と笑みが漏れてきた。

やがて、車のエンジン音が家の前で止まった。そして呼び鈴が鳴る。それと同時に、冬夜は家を出た。母だけが心配そうに冬夜を見送った。父は会社、夕夏は既に学校に行っていた。「行ってきます」

と、まるで近所に出かけるような軽さで、冬夜は去っていった。

門の前で、黒いスーツに身を包んだ男が待ち受けていた。衣類越しでも分かる強靱な体躯に、冬夜は唾を飲み下す。しかし、すぐ後ろに母の目があるため、冬夜は高揚を押さえつけた。

男に荷物を預け、冬夜は後部座席に乗り込む。男は荷物をトランクに収納すると、運転席に乗り込んだ。そして、車は出発する。行く先は真克学園——湧き上がる高揚に吞まれないよう、冬夜は齒を食いしばって、うつむいた。

「お久しぶりですね」

不意に声をかけられて、冬夜は顔を上げる。端正な顔つきの少女が助手席に腰掛け、冬夜を見つめていた。鼻はすらっと細く、目もぱつちりとした二重だった。あまりにも興奮しすぎて、人の気配に気づけなかった。そのことを恥じながらも、冬夜は疑問を口にする。

「……お会いしたことありましたっけ？」

「忘れられてる!？」

ああ、と冬夜は思い出す。このテンションは、あの時の女だ、と。

「あなたは今、何で私を思い出しました!？」

冬夜は答えなかった。眉一つ動かさずに、冬夜は尋ね返す。

「あんたも生徒だったのか？」

「あ、はい……あの私の方が先輩ですから、あんたって呼ばないでほしいです」

女は露骨に嫌そうな顔をするも、冬夜は相手の名前を知らない。

そのことを告げると、女は頬を赤らめた。

「……すみません、結川ゆいかわ 薺なすなです」

「結川さんね」と冬夜は復唱しながら、毎度のごとく覚えるつもりはなかった。

「私が伝えるのは一つだけです」

薺は真顔に戻って、指を一本立てる。冬夜は唾を飲み下しながらも、緊張ではなく喜びを露わにした。

「絶対に学園から逃げようとしないうでください」

「殺されるからか？」

「そうですね」

あつさりと肯定される。冬夜は何となく心地が良かった。これこそ、自らが求めた場所だと実感できた。

「基本的には教員に追いつめられて、殺されます。それに逃げようなんて思えないような要塞ですから」

要塞つて外からの侵入を防ぐのでは、と突っ込むと齋の頬が再び赤らんだ。

「牢獄つて言うべきですかね」

「でも、あの刀男とか、あんたは外に出てるじゃないか」

「ええ、秀の場合は実習だったんです。ただ、なかなか帰ってこないものですから、私たちが派遣されたんです。私も身勝手な行動を取ってたら、すぐに殺されたでしょうね」

齋は苦笑を漏らしながら続ける。

「この運転手さんも、めっちゃ強いんですよ。私なんか、すぐに殺されちゃうので、絶対に刃向かいたくありません。それに私は、もうすぐ卒業ですし」

指さされた運転手は無言だった。ただ、冬夜は「やはり」と呟く。そして、口の端をつり上げた。

「なら試してみてもいいか？」

「生き残る自信があるなら——それと私を巻き込まないでくださいね？」

刹那、冬夜の背筋に悪寒が走った。まるで身体に電流を流されたかのように、指先まで硬直する。あまりにも莫大な殺気を向けられて、出所が掴めなくなるほどだった。ただ、言うまでもなく、この運転手の男が放った殺気に違いない。

冬夜のうなじを冷たい汗が流れていった。何とか呼吸を整えて、平静を保つ。お互い、いつでも動き出せる状態だった。いつしか、男のシートベルトは外れていた。

「冗談だよ」

冬夜は自らの殺意を抑えて、後部座席に身を預けた。殺意が止み、車のエンジン音が戻ってきた。ふと助手席に目をやると、薺が泡を吹いていた。

「……こいつ、本当に何しにきたの？」

冬夜が尋ねると、運転手は僅かに肩を竦めた。

*

しばらくして、薺が目覚めた。気を失った前後の記憶が無いらしく、「あれ、私、寝てた!?」と騒がしかった。冬夜も説明するのが面倒くさく、何も言わない。運転手は相変わらず沈黙を守り続けた。

「あ、もうすぐ着きますね」

見覚えのある風景なのか、薺が言った。辺りから高層ビルは消えて、随分と経つ。小さな町を抜け、いつしか木々の中に伸びてゆく道を走っていた。山を上っているのか、後ろ向きに重力が働く。冬夜は、それに身を預けていた。

やがて、白い門が見えてきた。見た目は要塞には見えない。普通に乗り越えて行けそうな雰囲気だった。その門をくぐり、更に車は走る。しばらくすると、「監獄」と呼ばれても何ら不思議のない門が現れた。高さは軽く十メートルを越えている。

「あ、この辺りは地雷が埋まっているので、気をつけてくださいね」

薺の言葉で、冬夜は思わず下を見た。

「おい、この車は大丈夫なのかよ」

「はい、ここのアスファルトの道だけが安全なんです」
なるほど、と冬夜は息を吐いた。

「で、ここを通過して逃げようとしたヤツを逃さずに狩る自信があるってことか」

「そうですね、逃げ切った人はいないそうです。あと、地雷原を抜け切った人もいません」

齊は無表情で説明を続けた。大きな門をくぐり、更に車は走る。正面に灰色の建物が二つあった。齊は、その片方を指さす。

「あちらが校舎で、奥に特別棟があります。右手に見えるのが寮です」

齊が説明を終えると、車は校舎の前で止まった。齊が先に助手席から降りる。冬夜も、それに続いて、後部座席を降りた。

「ようこそ、真克学園へ」

灰色の校舎をバックに、齊は微笑んだ。

*

冬夜は、まず寮に通された。一人部屋のように、そこに荷物を置いて、冬夜は部屋を出る。監視カメラが二つあるのを、すぐに確認できた。

「あー、持ち込みの武器は禁止ね」

面倒くさそうに教師が言った。とは言え、冬夜は現在、何の武器も持っていない。事前に説明を受けていたため、無駄な荷物は置いてきたのだ。

「ん、胸のポケットに入っているシャーペンは部屋に置いてきてね」

「ガイドンスのメモは――」

「メモする用紙を持っていない君が何を言っているんだね」

教師の瞳に鋭い光が宿った。冬夜はワザとらしく肩を竦め、ペンを部屋に放り投げた。

「素直でよろしい。それにメモ取る必要はないよ、資料は用意したから」

教師は気だるそうに廊下を進んでゆく。冬夜は部屋の鍵を閉めて、その後を追った。

寮を出て、校舎へと向かう。一階は職員室などが並び、その内の一つの部屋に通された。中は机と椅子が並んでおり、会議室のようだった。学園長のところに向かうのか、と考えていたため、冬夜は

少し訝りながら、部屋に入る。待ち伏せがあるわけでもなく、監視の目が厳しくなるわけでもなかった。ただの部屋で、監視カメラが一つあるだけだった。

「そんな警戒しなくていいよ、適当に座って」

教師に促されて、冬夜は椅子に腰を下ろす。それと同時に、教師は資料を放り投げた。クリップでまとめられており、四散することには無かったが、冬夜は僅かに舌打ちを漏らす。

「それに目を通しておいて、そうすれば自分の身を守る術が分かるから。それと、今日の授業は出なくてもいいよ。あと、部屋のカメラは壊さないでね」

壊したら罰則だから——それだけ言っ、て、教師は会議室を後にした。冬夜は啞然としながら、その後ろ姿を見送った。やがて、ゆっくりと立ち上がり、資料を手にして、自室へと戻った。

来た道を戻る最中に、何人かの生徒とすれ違った。腕章の色が鮮やかで、冬夜の目を引いた。緑、黄緑、黄の三種類があった。学年を分けているのだろうか、と冬夜は推測して、寮に向かう。その間、向けられる殺気が酷かった。

やがて、寮に着き、冬夜は部屋の前で首を傾げる。部屋の中に人の気配があつたのだ。鍵は閉めたはずだと思いつながら、こんな監獄学園なのだ。侵入者がいても、何ら不思議はない、と慎重に扉を開けた。

冬夜の帰還に気づいた侵入者が、びっくりと肩を震わせながら振り返る。

「うお!? は、早かったね!」

薺は冬夜の荷物を漁っていた。冬夜は眉をひそめながら、こめかみを押さえる。冬夜の口から自然とため息が漏れてきた。

「何をしてんだよ」

「ん、ほら、健全な男子高校生の荷物なんだから、何かネタにできそうな物が無いか、って思ったんですけれど、なーんにも入っていない……どこに隠してるんですか?」

「持ってきてねえよ」

冬夜は吐き捨てるように言って、薺の横を通り過ぎた。机の上に資料を放って、ベッドに腰掛ける。

「おかしいな……絶対あると思うんだけど」

相変わらず荷物を漁り続ける薺を止めることもなく、冬夜は小さく息を吐いた。それに反応したかのように、薺は振り返った。

「ん、資料に目を通しておいた方がいいと思うよ？」

生き残る術が書いてるから——先ほどの教師も同じようなことを言っていた。しかし、冬夜は、それを無視して、ベッドに寝転んだ。その時、薺の腕章の色が橙であることに気づいた。この学園は三学年しか無かったはずだ。これで色は四種類——つまり、学年を示すには一種類、色が多いことになる。ならば、この腕章は一体何を示しているのだろうか——冬夜は薺に尋ねた。

「ああ、これね。戦績に応じて、腕章の色が違うのよ」

赤、橙、黄、黄緑、緑と順番に薺は告げる。

「赤が一番強い成績優秀者、緑が最弱層」

薺は鞆から手を引き、机の上の資料を漁り始める。出てきたのは緑色の腕章だった。

「ほら、これが君の腕章」

「最弱か」

「最初だしね」

薺は微笑んだ。

「これから自分の強さを誇示していけばいいんだよ。君は強いし」
そんなことを言いながら、薺は再び冬夜の鞆を漁り始めた。「おつかしいな」と何度も漏らしながら。

「そろそろ出ていってくれないか？」

眠くなってきた冬夜は、薺に言った。薺は苦しそうな表情で、首を横に振る。

「何か……何か見つけるまで、私は帰れない！」

「だから、何も持ってきてないって」

冬夜は呆れて、ベッドに横たわった。そこで考える。今ここで齊を殺したら、どうなるのだろうか、と。

その瞬間、俊敏な動作で齊が動く気配があった。

「あのね、急に殺意を向けないでくれるかな？」

齊は顔を青くして、冬夜から距離を取っていた。しかし、冬夜は露骨に殺意を向けた覚えがなかった。

「だから、ちゃんとルールを把握するために、資料を読むべきだって言っただでしょ？ 正式な試合以外で、人を傷つけたり、殺したりしたら、罰則なんだよ」

冬夜は静かにうなづいた。しかし、その瞳から鈍い輝きは消えない。

「あー、もう分かったから！」

齊は逃げるようにして、冬夜の部屋を後にした。それを確認して、部屋の鍵を閉める。ついでに机を扉の前に移動させた。何らかの方法で鍵を開けられても、これで何とかなるだろう。冬夜はベッドに横たわり、静かに寝息を立て始めた。

デビュー戦

「なぐもーん!!」

どんだん、と扉を叩く音が響きわたった。それを冬夜は無視して、寝返りを打つ。薄いカーテンを貫いて、部屋に差し込む日差しが眩しかった。

「ちよっとちよっと、もうすぐ授業始まるよー!？」

ふと扉に視線をやると、やはりと言うべきか鍵が開いていた。机を移動させておいてよかった、と冬夜は息を吐いた。

「ちよっと転校初日からサボりつてのは、本当に洒落になんないってー! なぐもーん!」

その呼び方をやめろ、と冬夜は初めて応じた。不機嫌そうに扉の下まで近寄って、机の上に腰掛けた。

「授業に出なかったら、何かデメリットでもあんのかな?」

「あるある、ちょーある! 生き残る確率が下がっちゃうよ!」

本当だろうか――冬夜は訝しながらも、机をどけた。凄まじい勢いで齋が部屋に飛び込んでくる。そして、冬夜の姿を見て、固まった。

「な……まだ着替えてすらいないの!？」

「いや、サボる気だったし」と当然のように、冬夜は返す。

「それは洒落にならないって!」

齋の目は血走っていた。冬夜はやれやれと肩を竦めて、着替え始める。

「ぬあ!？ ちょ、着替えるんなら言つてよ!」

再び、齋は耳まで真っ赤にして、凄まじい勢いで部屋を出ていった。こいつは本当に何がしたいんだ、と冬夜は首を傾げた。齋と初めて出会ったときの印象など、もはや欠片も残っていなかった。

そんな齋に引っ張られて、冬夜はある教室の前まで連れてこられた。そこには、あの気だるげな教師がいた。

「先生つ、あとはお願いしますっ！」

そう言つて、薺は廊下を駆けてゆく。「遅れるう！」と薺が叫ぶと同時に、チャイムが鳴った。

教師は薺の後姿を一瞥すると、何事も無かつたかのように教室に入る。冬夜もその後を追った。

「――で、転入生の南雲 冬夜くんだ」

教師の紹介が終わり、冬夜は教室全体を見渡す。転入生を迎えるような雰囲気ではなかった。目が血走り、殺意が教室を満たしている。なるほど、と冬夜は小さく息を吐いた。

「何か自己紹介でもする？」

教師はボールペンを指で回しながら、冬夜に言った。冬夜は首を横に振った。

「そう、じゃ、あの空いてる席に座つて」

教師がボールペンで指した先に腰掛けて、冬夜は頬杖をつく。前で教師が何か言っているのを聞き流し、ぼんやりと窓の外を見つめて過ごした。

クラスは二十人程度で、二年生は二クラスしか無かつた。つまり、二年生は合計で五十人程度しかないのだろう。多くても六十人だろうか、と冬夜は目処を付けた。また、空席が目立つた。教室には三十近くの席がある。その内、空席は六席もあつた。

それだけでなく、授業に出ているクラスメイトも異常に怪我が多かった。包帯、絆創膏、眼帯は当たり前のように、酷いと骨折でもしているのかギブスをつけている人もいた。そういう学校なのだろうと推測していたため、冬夜はほくそ笑んだ。

ただ、授業内容は、どこの学校とも変わらない普通のものだった。一時間目が半分過ぎたところで、冬夜は教室全体の観察を終えていた。暇になり、冬夜はこっそりと教室を抜け出すことを決意した。しかし、その気配は当然のようにバレた。あの気だるげな教師とは思えない俊敏な動きで、チョークが投げられる。それを靴の裏で受け止めて、冬夜は教室を抜け出した。冬夜の後を追ってくる気配は

無かった。

やや失望しながら、冬夜は廊下を歩いてゆく。どこの教室も授業中なのか、廊下は静かだった。もう少し派手な生活を期待していたため、落胆も大きかった。退屈な日々が紛れるかもしれないと思って、この学園に飛び込んだのに、そこそこ退屈な日々が継続中だった。

階段を上り、屋上にやってきた。屋上と言えば、サボリの定番とも言える。しかし、大抵の学校は鍵がかけられて、自由に出入りできないようになっていた。しかし、この学園では鍵が無かった。

冬夜は重い扉を押して、屋上に出る。そこで大きく伸びをした。日差しは厳しいものの、周囲が森林のためか、そこまで暑く感じなかった。涼しげな風が吹き抜けて、冬夜は目を細めた。

見渡すと学校を中心に二つの塀があつた。その間が地雷原になっていることを思い出しても、感情は湧いてこなかった。

冬夜の視界の端で、不意に何かが動いた。授業中で、あまりにも人の気配が無かったため、冬夜は完全に油断をしていた。まさか、授業中の屋上に人がいるとは思ひもなかったのだ。

「ちよつとなくもーん……何してるのかな？」

身構えている冬夜を迎えたのは、薺だった。頬を引きつらせながらも、薺は冬夜を睨みつけていた。

「サボリ」と冬夜は答えた。薺は勢いよく立ち上がって、冬夜の下まで駆け寄ってくる。

「いや、ちょ、本当にちゃんと授業受けてよ！ 私の株が下がるじゃないの！」

薺が叫んだ。そして、直後に失言に気づいたのか、慌てて口を押さえた。

「俺が授業に出ないと、あんたの株が下がるのか」

冬夜の口元は自然と弛んだ。薺は顔を青くして、震えだした。

「何で……こんなやつ、紹介したんだろ」

薺は、うつむいて小さく呟いた。それを無視して、冬夜は屋上に

腰を下ろした。

「あんだこそ、こんなところで何やってんだよ」

「え、私は……えっと……その、あれだ、観察！」

何の、と冬夜は即座に尋ねる。薺は言葉に詰まりながら、空を指さした。

「……雲の？」

冬夜は何も言わなかった。静かに立ち上がって、薺に背を向ける。冬夜は、そのまま屋上を後にした。何か悲鳴のようなものが聞こえたが、それをかき消すようにチャイムが鳴った。哀れな方だ、と冬夜は肩を竦め、少しだけ同情した。

冬夜は階段を下り、教室へと向かう。ただ、歩いているだけなのに、視線や殺意が向けられる。それが嬉しいような、うんざりするような、どちらとも言えない感情が冬夜の中で渦巻いた。

「南雲 冬夜、だな」

その時だった。いきなり名前を呼ばれて、冬夜は立ち止まる。振り返ると、男が血走った眼で、冬夜を睨みつけていた。向けられるのは殺意。しかし、冬夜は微笑みで応じた。何か楽しいことになりそうな予感があった。

「お前に試合を挑む」

緑色の腕章をつけた男が言った。それと同時に、校内アナウンスのスイッチが入る電子音が僅かに聞こえた。やがて、スピーカーから、よく通る声が響き渡る。

「緑腕章の島橋 一之から、同じく緑腕章の南雲 冬夜に試合の申し込みがありました。南雲 冬夜の同意があれば、三分後に試合を開始します。本校舎三階近くにいたる教員は審判に向かってください」
ぶつ、とアナウンスが切れた。何だ、これはと冬夜は首を傾げる。アナウンスが終わってから、急に人が増えだした。あつと言う間に周囲は黒い制服で満たされ、逃げるにも一時間かかりそうだ、と冬夜は周囲を見渡す。

「試合、ね」

冬夜は僅かに微笑みながら呟いた。やっとならしくなってきたじゃないか、と冬夜の中に高揚が渦巻く。

「いいぜ、やろうか」

冬夜の同意に、周囲の喧噪が増した。再び、アナウンスが流れ、試合が成立したことを告げる。ふと冬夜が顔を上げると、監視カメラがあった。これで見ているのだらうと、冬夜は推測する。

「どいて、どいて！」

喧噪に混じらない高い声が響きわたる。聞き覚えのある声で、冬夜は振り返った。人混みをかき分けて、姿を現したのは薺だった。凄い形相で迫ってくる薺の姿に、冬夜は僅かに怯んだ。

「何やってんのよ、君はっ！！」

薺は冬夜の両肩を掴んで、前後に揺さぶった。しかし、冬夜はだらしなく口元を弛めるばかりだった。

「分かてるの！？ これから試合なのよ！？」

「倒せばいいんだろ？」

「分かてない！ 資料に目を通してないでしょ！？」

冬夜は静かにうなづく。薺は一瞬言葉を失って、頭を掻いた。

「この学園には色々とルールがあるの！ ああ、もう、どうしよう。時間無いし……！」

薺は島橋を一瞬だけ見て、腕を組んだ。やがて、屈強な体躯を持つ教師が現れて、冬夜と島橋の間に立った。恐らく、先ほどのアナウンスで言っていた審判なのだろう。

「おい、結川。そろそろセコンドアウトの時間だぞ」

教師は無表情で薺に告げた。薺は険しい表情のまま、口を開く。
「……ッ、とにかく、死ななければいいから。無理だと思ったら、すぐにギブアップして！」

「了解」と冬夜はうなづいてみせるも、瞳には狂気が宿りつつあった。さあお楽しみの時間だ、と胸に渦巻く高揚に身を委ねた。

「セコンドアウトだ、試合を開始する。フィールドは、この階だけ。時間は無制限だ。存分にやり合え」

はじめ、と教師が言う。それと同時に島橋は何かをポケットから取り出した。バチバチと弾けるような音を立てる黒い何かを、冬夜はまじまじと見つめる。何度も見てきたことがあった——それはスタンガンだった。冬夜は肩を落とし、小さく息を吐いた。

「えっと、それで戦う気？」

冬夜は心底理解できないと言わんばかりに首を傾げ、尋ねた。しかし、返事はない。

島橋が駆け出した。一直線で冬夜に向かってくる。それをギリギリまで引きつけて、冬夜はひらりと躲す。歓声は無く、不気味なほど静かな中、冬夜は晒し物になったかのような居心地の悪さを覚えた。

さっさと終わらせよう——冬夜はポケットに手をつ込み、碎いたチヨークの粉をまいた。教室を抜ける際に、教師から投げられたものだった。しかし、粉も大した量はない。しかし、それで男は怯んだ。その隙に、冬夜は拳を叩き込み、続けざまに蹴りを放った。充分な手応えに、冬夜はうなづく。しかし、島橋は倒れなかった。堪えて、再びスタンガンを構えた。ただ、冬夜は既に飛んでいた。島橋が体勢を立て直す前に、跳び蹴りを胸に叩き込む。今度こそ島橋は倒れ、蹴られた勢いを殺せずに廊下を滑っていった。それでも島橋は立ち上がった。眉をつり上げて、凄まじい形相で冬夜を睨みつけた。

しかし、それだけ隙があったら、冬夜も余裕で体勢を整え直していた。胸ポケットに入っていたボールペンを両手に握り、静かに島橋を待ち受けている。島橋も無謀に突っ込むことを止め、じりじりと冬夜に迫った。

お互い、あと一歩で攻撃圏内に入る。そんな距離になって、冬夜の口は横に裂けた。

「楽しいなあ」

心底嬉しそうに、冬夜は顔を歪めた。島橋は、その笑顔に気圧されて、一歩後ろに下がった。それを冬夜は見逃さず、一気に踏み込

む。

「う、うわああ」

悲鳴にも似た声で島橋がスタンガンを振るう。しかし、島橋の攻撃は腰が引けていた。冬夜は、それを簡単に身を振って躲す。そして振った身体の反動を活かして、ボールペンを眼球に突き立てた。骨を砕き、更に奥へと進む感触があった。

島橋は妙な声を上げて、前のめりに倒れた。顔を中心に血が広がってゆく。それを冬夜は静かに見下ろしていた。

スタンガンが手から零れ落ち、廊下を滑っていった。冬夜は、それをぼんやりと見つめている。その瞳は、いつの間にか輝きを失っていた。

冬夜が島橋に背を向けると、悲鳴が上がった。ここですら退屈を紛らわせるには、少し物足りないのかもしれない——冬夜は僅かに肩を落とした。

やがて、教師が勝者を宣言する。しかし、冬夜は興味無さそうに欠伸を漏らした。

「よくもまあ、躊躇無く殺せたねえ……」

いつの間にか隣にやってきた齋が、しゃがんで島橋の死体をつついていた。彼女は死体に慣れているのか、顔色一つ変えなかった。

「こういうことには慣れてるから」

「……何で君みたいなのが、普通に生活できていたのか、不思議でならないよ」

齋は冬夜を見上げて、苦笑を漏らした。

ルール

翌日から冬夜に向けられる殺意は減った。これで、また退屈な日々に戻るのではないかと冬夜が懸念すると、まさにその通りとなった。あれから冬夜に挑む者は現れない。

実際のところ、冬夜より強い者がいないわけではない。ただ、彼らでは冬夜に挑むことができないのだ。

マツチメイクに関して、いくらかのルールが設けられている。冬夜が今回の試合で学んだことは、腕章の色に関することだった。緑が最も弱いことを示し、黄緑、黄、橙と並び、赤が最も強いことを示す。この腕章の力関係に従って、自分の腕章の色よりも、弱い色の腕章を持つ者に試合を申し込むことはできないのだ。また、試合の成立には、双方の同意が必要になる。それは今回の試合でも、その通りだった、と冬夜は納得した。

「でも、ルールはそれだけじゃないんだよ。支給された携帯、あるでしょ？」

薺は、赤腕章同士の戦いから目を離さずに言った。冬夜も同じく戦況を見守っていた。現在は日本刀を構えた風切 秀が、辺りを見渡していた。もう一人の赤腕章は、姿どころか気配すら掴めなかった。

「携帯、貸して」

薺が差し出した手の上に、冬夜は携帯を置いた。慣れた手つきで薺は携帯を操作してゆく。その瞬間、金属同士がぶつかり合う音が響き渡った。真上からの襲撃を、秀が刀で受け止めたのだ。秀は更に刀を振るうも、相手は既に距離を取っていた。

「ほら」

冬夜は差し出された携帯を受け取り、画面を見る。冬夜のフルネームと腕章の色、そして持ち点の表示があった。

「持ち点、って何だ？」

現在は五点になっている。それを尋ねると同時に、再び甲高い音が響きわたった。冬夜は接触の瞬間を見逃して、舌打ちを漏らした。「だから、資料を読みなさいって言ったでしょ」と、薺はため息をついた。

「最初の持ち点は三点で、勝ったら増えて、負けたら減るの。ただ、なくもんは島橋くんだけ？ あの子を殺しちゃったから、島橋くんの持ち点を全部貰えたの」

「つまり、あいつの持ち点は二点だったのか」

「そうみたいだね。あの子は負け続けてたから焦ってたのかな」

薺は試合から目を離さずに、続けて言う。

「ただ、持ち点がゼロになっても、退学になっちゃうから気をつけてね」

退学、と冬夜は復唱する。表沙汰にできないことを行っている、この学園における退学とは――冬夜は答えを予測しながらも尋ねる。

「退学って――」

「うん、恐らく殺されると思うよ」

薺はさらりと言った。冬夜もやはり、とうなづく。

「生きて帰れるなら、あんたはワザと負けて、退学になってそうだからな」

「うーん……私って一体どういう目で見られているのかなあ？」

薺は肩を落として、ため息をついた。

「なくもんより三つもランクが高い橙の腕章なんだけどねえ」

「ああ、それについて考えてただけど、どんな媚を売ったら、そこまで腕章の色を上げられるんだ？」

「ちょ、私だって戦えるんだからね！」

薺は試合から目を離して叫んだ。冬夜は眉一つ動かさずに、両耳を塞ぐ。

しかし、それと同時に別の感情が湧き上がってくる。冬夜も試合から目を離して、維持の悪そうな笑みを零した。それに気づき、薺は顔を強張らせた。

「つまり、俺が申し込んだら、戦ってくれるってこと？」

じじ、と校内放送のスイッチが入った。

「緑腕章の南雲 冬夜から、橙腕章の結川 薺に試合の申し込みが

――」

「あー！ 却下却下！ 断る！」

放送を遮るように、薺が叫んだ。冬夜は哑然として、放送を聞いていた。試合中に別の試合が成立しかねないのか、と驚きの表情で何度かうなづいた。

「――ありました、結川 薺が断りました」

ぶつ、と放送が切れた。それと同時に、薺が冬夜の胸倉を掴んだ。

「馬鹿じゃないの!？」

「いや、すまん。俺も試合になるとは思いもしなかった」

正直に冬夜は謝った。薺は少し落ち着いたのか、再び冬夜の横に腰を下ろして、深いため息をついた。

「試合になったら、橙腕章の私が容赦なく、なぐもんを殺しにかかるんだよ？」

そうしないと生き残れないから――薺は顔を歪めながら呟いた。試合は再びこう着状態になり、秀は顔中に青筋を立てながらも、じつと相手の襲撃を待っていた。

「そうやって、私は橙の腕章にまで、たどり着いたの」

たくさんの人を殺してしまった、と自らの手を睨みつけながら、薺は零した。しかし、冬夜はただただ首を傾げた。生きるために他を殺す――その当然とも思える行為を理解できなかったのだ。

冬夜が他を殺す理由は生きるためではない。殺されても仕方が無い環境を作り上げるために、冬夜は人を殺し、自ら法律の加護を捨て去った。そんな冬夜に、生きるために戦い、殺すという環境は理解できなかった。戦い、相手を壊すのは、ただのエンターテインメントでしかない。その結果、死ねるなら本望だし、勝ってしまえば、また別の楽しみを求めて、冬夜はさ迷うであった。

今も同じだ。楽しめるのならば、そこに自身の生死を問題として

提起することはない。たとえ、相手が絶望を覚えるぐらいに強い相手でも、試合に立ち向かってゆくだけだ。

そんな冬夜の雰囲気を察したのか、珍しく薺の瞳に冷たい光が宿った。最近は慌しい言動ばかりが多い薺であったが、この学園で二年も生き残ってきた猛者であることに間違いは無いのだ。

「一応言っておくけど、いくら私が弱くても、素手のなぐもんに負ける気はしないよ」

そこで冬夜は、とあることを思い出す。

「そう言えば、武器の持ち込みは禁止だったよな？」

薺の瞳から冷たい光が消え、うなづいた。

「でも、何とかくんはスタンガン持ってたよな」

「……名前すら覚えられずに殺された島橋くん、哀れなり」

薺は遠くを見つめながら、呟いた。やがて、我に戻った薺は言う。

「ん、まあそれに関しては持ち点が関わってくるんだよ。本校舎の一階に購買があるの、知ってる？」

冬夜は首を横に振った。

「よし、じゃあ、この試合終わったら、見に行こうか」

「……このこう着状態の試合が終わるまで待つのか？」

赤腕章同士、どちらも決定打を与えられず、先ほどからこう着状態が続いていた。待ち受ける秀に対し、相手はヒットアンドアウェイを続けている。秀は受けるので精一杯で反撃することができないものの、安定して相手の攻撃を防いでいた。外から見ている冬夜ですら、相手の気配を探れなかった。実際に影本と対峙したら、冬夜も苦勞するのだろう。

「うーん……そうだね。購買、行こっか」

薺は僅かに頬を引きつらせて、立ち上がった。冬夜も、それに続く。観戦している生徒の合間を縫って、二人は階段に向かった。一階まで下りて、職員室の前を通る。やがて、奥に購買の看板が見えた。それを指さして、薺は言う。

「あそこで武器が買えるの」

どんな購買だよ、とツツコミそうになるのを冬夜は堪えた。そもそも、真克学園は普通の学校ではない。校内で日本刀や鎖鎌を振り回す生徒がいるのだ。この学園に常識など通用しない——それを自らに言い聞かせながら、冬夜は薺の横に並んで、購買に並ぶ品々を見やった。本来、購買にあるべき物が無く、あるまじき物だけが並んでいた。バッド、ナイフ、そしてスタンガンもある。また刀、ハンドガン、更に奥に飾っているのはスナイパーライフルだった。他にも鎖鎌やガントレットなど、小さな部屋の所狭しと武器となりそうな物が並べられていた。

凄いと漏らした冬夜は目を輝かせながら、武器に手を伸ばした。そこで、ふと思いつく。

「あの黒い手袋は置いてないんだな？」

薺の使っていた武器のことだ。指先から糸が伸びている手袋は置いていなかった。

「ああ、私のは特注だから。だから持ち点も、かなり使ったんだよね」

特注までできるのか、と冬夜は感嘆する。退屈になりつつあった学園生活だったが、少しでも見直した。

冬夜は飾ってあるナイフを手を取った。軽く、そして刃はしつかりとしている。背中に視線を感じるも、冬夜は無視をした。殺意でなく、監視の意味合いが強いのだろう。武器を無断で持ち出されないよう、気を配るのは当然だ。冬夜は一通り触ると、元の場所に戻した。値札には五と記されていた。

五円なのか、と冬夜は眉をひそめて、首を傾げる。そんなわけがあるか、と自ら否定して、薺の言葉を思い出す——持ち点だ。

「これは、持ち点が五も必要なのか」

「正解」と、薺が微笑んだ。

冬夜は、ふと刀に目をやった。十五と書かれた値札が下がっていた。その奥のスナイパーライフルには二十とあった。

「でも、この持ち点ってゼロになったら、退学なんだろう？ それを

使ってまで、高価な武器を買う必要ってあるのか？」

「無いと自然と負けて駆逐されていくだけだよ」

薺は笑わなかった。そして、薺は思い出したよう手を叩いた。そして、ポケットに手をつ込み、何かを取り出した。

「これ、なぐもんの戦利品なんだよ」

薺から手渡されたのはスタンガンだった。戦利品と言うことは、島橋の使っていた物なのだろう。冬夜は手に取ってみるも馴染まず、顔をしかめた。

「ん、どうしたの？ 何も無いよりはマシじゃない？」

「……こんな玩具みたいな武器に頼るぐらいなら、素手の方がマシだと思う」

冬夜はスタンガンをまじまじと見つめながら、率直な感想を述べた。そして、スイッチを入れてみる。スタンガンはバチバチと放電した。

「壊れてはないみたいだな……これ、売ったりできないのか？」

「ん、できるよ。おばさん、スタンガンっていくらだっけ？」

薺が呼びかけると、部屋の奥から「二点」と返ってきた。そして、相変わらず続く視線も部屋の奥から発されていた。

「つまり、スタンガンを買ったら、なぐもんの持ち点は七になるけど、私は持っておいた方がいいと——」

「これ、買ってくれ」

「ちょー！？ 話は最後まで聞いてよ！」

喚く薺を無視して、冬夜は部屋の奥に歩み寄った。しかし、行く手を薺が遮った。

「何か欲しい武器でもあるの？」

薺の質問に、冬夜は首を横に振った。

「だったら、何でスタンガン売っちゃうのよ？」

「あっても使わないし、変にスタンガンを気にして、いつも通りの動きができなくなっても困る」

「う、うーん、まあ一理あると思うけど……」

齊はどこか納得のいつてない様子だったが、やがて冬夜に道を譲った。齊の横を通り過ぎて、奥へと進む。畳の敷いてある部屋が見え、そこに小さな老婆が座っていた。

「これを買収取つてもらいたい」

冬夜は老婆にスタンガンを差し出した。老婆はそつと受け取り、動作を確認する。しばらくして、再び老婆が手を差し出した。

「あ、携帯を渡して」

齊に言われて、冬夜は携帯を老婆に渡した。老婆は携帯を操作し、やがて冬夜に向けて放り投げた。荒いな、と文句を零しながらも、冬夜はディスプレイをのぞき込む。持ち点が七になっていた。やがて、老婆は無言で冬夜に背を向けた。

「武器が無いと、これから厳しいと思うよ？」

齊は心配そうに冬夜の顔をのぞき込んだ。

「相手を殺せば、武器を奪えるんだろ？ だったら、あの日本刀野郎を殺して——」

「ちよつと待つて！ それは絶対にダメ、なぐもんが死ぬ」

首が取れるのではないかと心配するほど、齊は全力で首を横に振った。対して、冬夜は「そうか？」と首を傾げる。

「あのね、さつきも見てたと思うんだけど、秀は赤腕章なんだよ？ 武器無しになぐもんが勝てるような相手じゃないよ」

赤腕章——復唱する冬夜の口の端が僅かに上がった。

「赤つて、そんなに強いのか？」

先ほどの試合を見ているかぎり、秀より相手の方が苦労しそうだった。つまり、秀相手なら何とかなるのではないか——冬夜はそう考えていたのだ。

「うん。私じゃ勝てると思えないような怪物だらけ。えつと、特に二年で唯一の赤腕章の玖月つて子は、本物の化け物だから気をつけて」

あとは、と思い出したように、齊は続ける。

「なぐもんより少し前に転入してきた子もヤバいかな。あつと言う

間に一年で唯一の黄緑腕章になった子なんだ。名前は確か佐伯って言ったかな」

玖月と佐伯——冬夜は復唱しながら、心に刻み込んだ。そして、目の前にいる女の名前は何だっただろうかと冬夜は首を傾げた。しかし、それを気にすることはない。冬夜の瞳は鈍い光を宿し、口の端をつり上げた。

「今は止めといた方がいいよ。絶対に、なぐもんでは勝てない」

薺は言い切った。しかし、冬夜の心は既に決まっている。まずは黄緑腕章の佐伯を探す、と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2945o/>

殺人鬼の日常

2011年12月25日12時53分発行